て少しも取あふ景色おければ繼原は彌々憤懣して今日しも山村ゴ強てせまりて幾分か割前の金をいださせ非道工面して彼の時器を受出したる事ふぞありける書生中ゴは往々繼原の如き人物あり蓋し廉恥を知る性質おれども其執意の堅ゥらざるかゥ時ゴ劣情を制しかねて懶惰放逸におがるゝのゴ年齢漸く老ひさたりて血氣少しく靜まるゴいたらむ或は有用の人ともなりおん是等は所謂多血無神經質の人間といふべし閑話休題さて也須河悼三郎は思ひがけおく繼原ゴより懷中時器を受取つゴさまゲゴ氣の毒ゴ思ふふつ々又今更ゴ何とやらんきまりも惡く氣味も惡くて立去らんとする繼原が袖をいそがはしく取留めて（須）ヲイ繼原君マア待たまへ君はこゝゴ何方へいくんじや（繼）僕はまだ少々用があるのゥ辰岡町までいくんだ（須）ゥれでは本郷まで同伴しやう（繼）君もあちらへいくんかそれぢやア一所にゆのうト口ふはいへどあまり面白くは思はぬ兒附須河は頻ゴ繼原の氣嫌を直さんとして（須）山村は何處へいきよつたネ（繼）何處へいつたゥ僕アしらない（須）山村は今でも放蕩をおちよるおアあいつは實ゴ精神の定まらん男じや（繼）さうさ隨分フハ〳〵とした人間さおゥしあれでも花柳の事情ふは通じさものだ淫蕩學の博士ふすりやア黄金賞牌を與へても可おゴだ道德上から論じちやア全然話ふならんゝまど社會上からいやア何かの用ゴたつかもおれおい校長ゴ諂媚をおたり學校中のアラをさがして人ゴ闊散らしてあるいたり又は人のいひおり放題ふなつて所謂放蕩連乃中間ゴももたゥつさゴ又は腕力黨の贊成者ふもおつたりあちらへベツタリこちらへベツタリ内股膏藥の主義を執ツて「何」の周旋おんぞをする奴に比べりやアまざ山村の方がいゝのもおれおい落第して改心したと言はれちやア殘念だが實アゴ僕おんゥも大ゴ悟る所ありだ以後も放蕩はするかもおれんが人のお世話丹やアおらなゥ積だト何だか筋違の

合ぬ議論を述立るゝ蓋し須河への當コスリおり須河ゝギツクリト徹へる所があると見えてさきがゝ面を赫くして言句もなし。さゝいへ本性が卑屈よして。相應ゝヅウ〳〵しい性分おるゆゑ尚も氣嫌を執らんとして（須）ヤ噪々りおがら来よつたらモウこゝゝ本郷の通ぢや非常ゝ腹がへつた繼原君君サツパア〔夜食〕の相伴としたまたんの（繼）僕ゝ用があるから失敬としやう（須）さう言んでつきあひゐまへ。少々廻道になるかしらんが。二丁目のビイフ〔牛肉店〕まで来てくれたまへ（繼）今夜ゝ真平だ。且ゝ君も食後だらうぢやないゝ（須）ナニイ。賄の食ゝ喰ふさが。四時過ゝ喰ふたんぢやから已ゝ消化してしまふた頃ぢや。マアえいからつさやつて呉たまへ。ト無理やりゝまゝむるゝぞ。繼原もあながちよいおみのねて。引ゝるゝまゝゐ後ゐしたがひ。二丁目還の牛肉店へたゝいる。

○さる程ゐ繼原青造を須河悌三郎ゝ誘てれてビイフ、ショップ〔牛肉店〕ゝ昇りしがど胸に不平といふ塊がある也酒を飲めどもおもしろのらぬ肉を喰らへども甘しと思ゝぬもむぢめの程ゝろく〳〵ゝ談話の應答もおさゞりぢが已ゝ前ゝもいひける如く此繼原といへる男ゝ兎角執意が定まらずして氣が替り易き性分なるゝ元来酒を嗜めるから醉へばいつしの意が變じて仇敵れ如く思ひ者をも信友の如くゝ過をる癖おり此般なる人思ゐの外我日本國の社會ゝゝ多かり是等ゝ一合乃酒ゝうへて我ウ井ル〔我意〕を賣る人物おり。ナント廉價たましいおらぬや。お買ひなさいといひたけまど斯んお馱却の安魂ゝ幾百万箇買入れまも何の益ゝもたちろゝなしおよーなされたが徳用とゝ餘計を作者の惡まれ口本文のとんだ「お邪广さま御めん下さいヨトいひおがら年の比十五ばかりの小女須河の前を通りながら歸り跡の火鉢とかたづける。須河ゝ何心おく風と此娘の皃を見まゝ何處かで見さことのある皃なり。娘もふりかへりて見て居りたしが。俄

ヨ思ひいだせしと見えて(娘)ヲヤ貴君ハ。いつうか。アノ何んでお目ヨ懸つた事がありましたネエ(須)なんでもあふさ事があるやうぢやと思ふちよる所ぢや。おまへハ誰さんぢやツたかあア(娘)ホヽヽヽ。ソラ貴君のお時器をネ無理ふわたイが強奪ツて子 須)さう〳〵。やつと思ひだしさ。お前ハお豊さんさらいふたあア(豊)アラマア。よつく覺えて被居るヨ(繼)ヲイヲイ須河。ありやア恐れた黙り者の何ハ何とうだ牛肉のおごり位じやア許されんぞ。(須)ナニイ。馬鹿いヽたまへ。さういふ譯ぢやないハ此婦人ハせんだつく淡路町てなア(繼)どつこい〳〵。そんあ甘口あ分説でハ此繼原ハ承知しないぞ。姉さんマア兎も角も一盃飲むべし(豊)ハハ有難う(繼)イヤ二氣取ツたネアリイといハないうちが千兩だ成程須河が迷ふのも無理ハあい眼ハ二重まぶちよーて色白く(豊)アラようございますヨ澤山お弄んなさいヨ(繼)どつこい擲るのハ願ひ下げだこれでもいさてる身躰でございヲイ〳〵須河久しぶりであつたやうな風をしさツて無要だ此處の亭へハ君が引誘ツてきた所を見りやア遠のら出来く居たんだらう。子エ豊ちやん。然だらう(豊)アラ恐れ入ツたヨ。もうワタイの名を御存じだヨ(繼)一旦耳へ挿んだら忘れらまたもんじやアない(豊)あんな調子のいヽ事ばう去おいひあさるヨ(繼)所が酒壜のさつぱりよくない。(須)なるほどこりやアウエイカント(空虚)じや(豊)ヲヤこれハ失敬おあついのを持て来ませ字(繼)あんまり熱くしちやアいかんぞ。夏ハ六十度以下ヨ限るツ(須)姉さん序ヨ肉の代もいるぞ。鶏卵も三ツ四ツ持ツて来い(豊)ハイ〳〵。といひながら階段をとりてやく(繼)口留の積歟非常ぢおごるじやアないの(須)馬鹿をいふてハいかん。あのガルヽハ我輩の知己でえおんでもおいハ(繼)分説をするだけ可怪じやおいの君も中々やつてるな(須)然でないといふヨ秘ハなア。もとに揚弓場の女で(繼)それを君がラブ〔いろ〕ヨしさんか(須)馬鹿ア

言たまへ。たつた一度逢ふた事があつさんじやが。如何してこゝへ来ちよるのゥしらん(繼)りのふしにて　この本郷の牛店ヨ逢ふも不思議○これじやアぢ淨瑠璃ヨハ語呂がわるさうだなアヲイ須河一年守治の螢狩といふ。君がなれそめの物語をさり〳〵白狀ゑてしまひたまへ(須)馬鹿云てハいかんそないな深い譯ハないんじや(繼)さつさかゥら幾度馬鹿を云ながでるのゑりやアゑおい。僕だつてさう馬鹿ばかしいふもんゥコンフヘツス(白狀)しなへと。歸校ツてから皆人ヲいふゥ(須)いれてさまるんゥ外の奴ハ事實じやと思ひをるから(繼)事實ヨ相違ないゞやアないゥ(豐)ハイお酌を致しませう(繼)ヲツトきたりヲイ姉さんデハない豐ちやん。須河めゞノロケていゥんゥ。些と謹めといつてお死な(豐)デスカネんとヨ此方ハ浮氣さうでゐ子ヱ(須)馬鹿アいへ(繼)どうも馬鹿アいへが好だナニサ。お前のノロケをいつて居たのヨ(須)うゥじやゥ〳〵(豐)どうで然でせうさ。ワタイのノロケおんぞを何の因果で。子ヱあおた(繼)そりやこそ夫婦喧嘩のむじまり左樣ツ僕はゑらんゥ〳〵。などゝ興ヨ乘じて繼原ハ頻に須河ヲ挑弄ふヨぞ。須河ハほと〳〵困じ果て眞地目ヨおりをいひわけする其容体がをかしければ。お豐も共ヲ口をそろへてさま〳〵ヲおもちやヲおし夜の深行くもゑらざりけり。

## 第十回

生兵法大きゑ間違をしでかして
味方をぶちのめゐ書生の腕立

却説繼原青造ハ醉ふてハ私憤もどこへやら。須河と共に酒酌かはしつゝお豐を對手ヨ夜深るまで彼の牛肉店の二階ヲありしが。須河ハ痛く酒ヨ醉ひまさきふ桐山と約せし言葉も今ハ全く打忘れて。頻ヨ興ヲ乘ずるものから。流石ヨ時刻が後ヨんゥと學校の首尾を氣づゥひつゝ屢々歸ヲを促せども繼原ハお豐をワキヲ使ひて。ゲタ〳〵ガラ〳〵日和下駄で。銀坐街頭を走る

やうな奇怪な聲して笑れながら頻に須河に挑ひつゝ容易にかへりさうな景色もなく西の學者某がいはれし言葉に俗人は笑ふ人を見れば、あの方はお嬉しゐ事があると見えるといへど、これ大なる間違ひなり。笑ひ喜びより出るにはあらで、多くは自慢からでるものゆゑ笑ふ人をむ誘るといふこそ寧ろ當然の事ならめ。と鹿爪らしういはれたりしが、げふさる譯のえのよやあらん。此時繼原が面白げに須河に挑ひて打笑ふは何を喜ばしき譯あるにあらぬて須河が世間に馴ざるゆゑ百舉動がハンマふしく。いろふを馬鹿氣て見ゆるを見く我世にあれを心に誇りつ口から出任せの抑揚頓挫日清葛藤の時のドルの相場を宜しくといふ鹽梅に。何ぞたゞさげさり挑へども。其いひったが巧なるゆゑウツカリの須河は少しもさとらず。お豊と色だらうといはれたのを結句賞典でも貰ふたやうに思ひ真地目でいひゑけ拭ふる中にも自惚の原素とノロケのエムブリヲ（萌芽）を含むもをうしゝ兎角をる中に。近所の醫學校の書生とも思はるゝ連中二三人連れて少し隔ちたる向ふの坐敷へ入来れば。無て常得意の客と見えて。お豊はおなさの席を外して。やがて被方へ赴きつゝ其 誂 拭聞なども（書）ヲイ姉さん。ヲムレツで酒だ後はビフテキといふ注文だヨ（又一人）序に豊ちやんおまへの愛嬌と一時間分借用だヨッ。

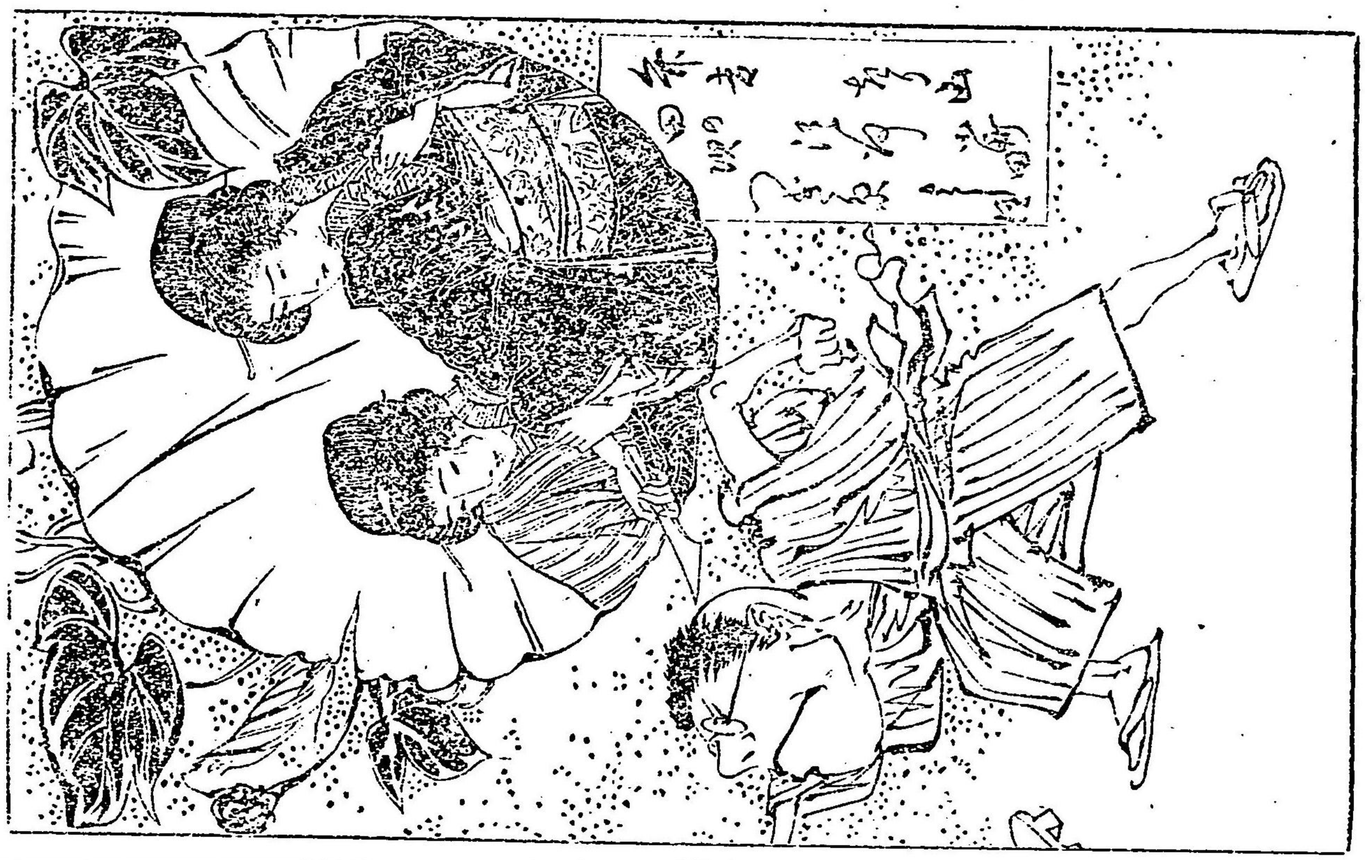
○（須）ヲイ繼原モウ戻らうではないか（繼）お豊がひつこんだッて直に歸るといふはあんまり野暮だ。さう甚助を起さないもんさ（須）エ（繼）ナニサ。そんな事ッ焼餅を起しさまふなといふ事ヨ（須）甚助といふはうんなら怒る。ことか。ジン〳〵ビヤが沸騰をるやうに怒るといふ誠諧の（繼）ハ、、、、、。マアそんな事さ實に君は校中の色男だヨ。小町田と匹敵をるウ（須）馬鹿いふてはいけん。小町田といやアア如何したらなア。久しく下宿して居るなアア（繼）ナニサ。宅に居るんだとさ（須）ナゼ宅へ歸ッたかなアア（繼）ヲヤヲヤ君

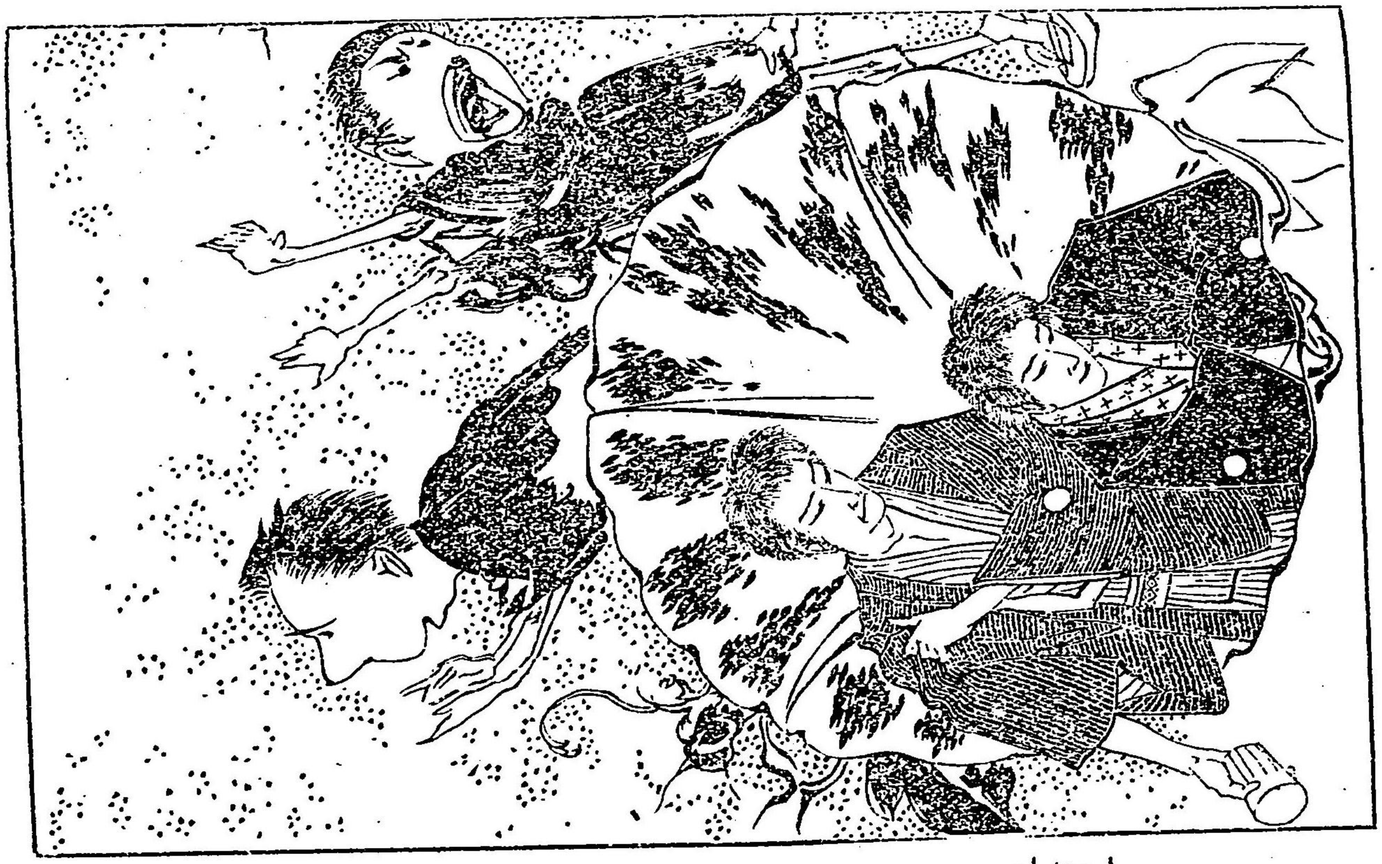
いまだ知らん歟。あの一件を(須)あの一件とは何じやネ(繼)ソラ吉原の珍事ヨ(須)吉原で如何したのじや(繼)あの珍談を知らないたア迂々濶々といふ次第だ。サラバ。うれがしが物語らんデ。ンデン〳〵(須)ハハヽヽヽソリヤ息繼ぎの酒を献ぎろ(繼)ヲツトヽ有々〇頃しも秋の八月中旬戀ヨ心いうばたまろ黒絽の袂吹返へを。——風ぞ涼しき夕涼み。八百松樓ののの。ののの。ののア、いけない。淨瑠理風ヨはなさうと思つたが。即席ヨハ文ができない。やつぱり真地目ではなすとしやう時ヨもう一盃くれたまへヲツトヽサンクス〔幸甚〕エヘン〳〵。

〇僕も子人傳手の又聞だから。委しい原因ハ結果もおらんが其大略ハアズホルロウス〔左の如し〕さちやうど今月の上旬頃だつたらう。任那が洋行をするヨついて。守山のフハザア〔親父〕の發案でやらで。向嶋水神の八百松ヨ。送別會を開いたと思ひさまへ〇ヲイ。黙ツて居ちや不可。ウン思はうとかナントういひたまへ(須)エ。なぜ(繼)どうも君ハ話せないなア。思ひたまへト洒落りやアウン思はうといふなア定規だア子。マアいヨさ所が其晩ハ風雨で子ト第八回の大略をば。事實八分附會二分ヨて物語ヨで須河ハアとアと興ヨ入りて。時刻の移るも忘ヨ果てそゞろヨ膝を進ませつヽ(須)ヘヽイそれハ希代なことじやなア。それから茶屋へいんでどうしたかネ(繼)扨こヨきうらが本文だテ。去程ヨ小町田粲爾ハ思ひがけなく我思ふ藝妓田の次ヨ出會して。——打驚くこと大方ならず。——(須)ハヽヽヽ中々君ハ小説文ろやうヨ喋口ることが巧じやなア(繼)エートさをが思慮ある少年なれども。——。かヽる里ヨハ慣ざるからエート。——如何ハせんと氣をもミぢ。——。あうらむ兒で車を降り。イイイアいのん〳〵。やつぱり真地目ではなさう。(須)真地目の方がおうりよりてえいワイうれうら小町田ハどうしたか子(繼)それのら子。どうも車の乘ツ放しで無言で逃るといふ譯ヨもいく

まいだもんだから。小町田がネヲズ〳〵一所ヲ来た客ヨ向ツて。いろ〳〵其粗忽を詫たさうさ。(須)向ふの客といふのハ全体何もんぢやネ(繼)さしう代言人だと歟いふ事だ。スルト向ふの客野郎ハ圖部七圖部八の連中だから。別ヨ怒るべき理由ハなくても。何か理屈種ガ生いて死たらト待ツて居た處ざゝらたまりやアしない。酢だのこんゝやくだのと管を巻ゐて色々面倒ヨありかけたを田の次と辨吉といふ藝妓がうまく真中へ割ツくはいツて。一先段落ゐありゝけた處へ(須)フーン其田の次たらいふ女が小町田のラアブしちよる女じや子(繼)さゝさ。處へ吉住といふ男が○此男ガ小町田のライウバル〔競爭者〕で子。ホラ樫森のブラザア〔同胞〕ヨ(須)ウンあいつか我輩も一度見たことがあつたやうぢや(繼)後ゝら人力車ヲ乘ゝツて子韋駄天の如くヨ其場へ馳着たと想像したまへ(須)ヤアそいつハ面白かツたあア(繼)吉住ハ非常にドランケンヨなつてハ居たが。頗るクイツク〔鋭敏〕な男だゝら。忽地小町田に目とつけて子(須)小町田をシンガア〔藝妓〕のラブ〔抑客〕ぢやとゐつちよつたのか(繼)已ゐ其以前ゐ知られて居たさうだゝらたまらない忽地ジエイラシイ〔やゝ気もち〕を興し来つて。無理ヲ小町田を引張ツてネ茶屋の二階まであがつたさうだ(須)ヤレ〳〵小町田ハ困ツつらうゐア(繼)それのゝが大變だツたツさ。はじめハお知音にゐりたいとか。ヤレ奇遇ざとゝナンだとゐいつゝ。無暗ヲワイン〔酒〕ばかり強つけて居たゞ段々おしまひヨやア激しくゐつて「ヲイ小町田さんとやゝ。實ヲ君ハお浦山吹花も實もあると申したいが花あつて實のない好男子だヨ。まゞ親の脚をのぢつて居ゐながゝ已にキヤツト〔藝妓〕ゐどを色ヨほるたア。實ヨ花やか極まツさはなしだ。然し花柳ヨ名聲が高いだけヨ。校中の評判ハ不印ださ字だ子放蕩竿業のサルチフヒケイト〔証書〕ヨマスタア色男の爵位を以て。學者の尊号ヲ交換をるたア感々服々士癡の煮音蒸氣の沙汰といいはれな

いとうヤレ「承知るところ丹因まむ。近来益々御學力が君まに御進歩の御様子とやらで。但し後の方へヤ。これに失敬已まに近々まに御退校イヤ御卒業になるさうで。誠まお樂をなお身の上だ。流石放蕩まに熱心なだけまに。君に万端に如才がおいヨ。だから田の的が戀着まるヨドウデス。田の的と廢業ーてゑまツて。九尺二間へ引込んじゃア僕が家賃だけ借さうゥなんぞとそりゃもう續々まやツ付けたさうゥ。(須)非道く小町田にゃらまたなアそれでも小町田に黙ツちょツたのなア(繼)可愛さう丹斯うなッちゃア仕方がないヨ向ふに三人と来て居る上まドランケンといふ便宜がある。此方にソッバアなア(繼)そこがさ如何いふ呼吸であつた歟實地に臨まんゥら解らないが。想ふゐゼ。キャツト(諌藝妓)に究ーたらうヨ何故ゥといふゐネ已に先刻もはなした通り。田の次よりも古い皃の。辨吉といふ藝妓ゲ居るゥら其姉藝妓をさしおいて。あんまり口を出を諱にもいゥんーー又一ツまやア吉住潔まをツゥり内幕を知られて居るから下手丹取做を試をた日にやア。いよ〳〵焼餅の火の手を増して。小町田の身丹害はあるとも毫も應援にやアゥらゐいとゥなんとゥ漢とのリイゾン(道理)があツて切ゐさ思ひ忍摺亂れ苦し き心の中ヤデミンデン〳〵(須)ハ、、、また淨瑠璃語の真似か君もよつぽど山村まに似て居るゐア(繼)だゥら君に天保イヤ。ゆかアんして居ると人がいふヨ。山村の義太夫に習ツた淨瑠璃所謂本場の調子だアネ僕のやらゐをゐア。無茶苦茶の自得流で節ゐんざア臨機應變ざ僕と彼とを同視をるのに。月とスッポン。ウンテンバッテン。龍動のニウスまに東京の新聞日本の書生まに英國のスチユウデント(學生)須河君まに繼原君ハ、、、、。これやア失敬(須)君も實丹をく喋口るなア。それにさうと。肝腎のストリイ(はゐし)がどうかおツてゑまふた○我輩が想ふにゐア。どうも解らんと想ふ事があるゥ





（繼）ナニが（須）なぜといふて何たらいふ今一個のキャツト〔藝妓〕の事ぢやがあぜそいつが中裁をせんじやツさのう（繼）イヤニ生意氣に先察をするネお主から其キヤツトの傳聞なるんだ。マア引こんで聽て居たまへろも〳〵藝妓辨吉と聞えたるハこいつ頗るのお轉婆キヤツトで隨分もてあましの古大姐さ。おかるゴこいつめ吉住潔ゴ多少おうぶれの氣味團子一本めしあがゴと饗應して。已ゴ怪ーむべき中だとうハふんさ。おかし吉住の本心じやア例の田の次といふヤンガア。キヤツト〔若手の藝妓〕を。是非ともオウライトといはせる積で其尻ゴぞのしついてまはツて自然辨吉をウドンじたとか。ソバんぢるとの。底ゴやアいろ〳〵な蓋があつて〇いゝかい。蓋とハふ字ハ蓋とよむだらう。底といはて蓋といふ。暗ゴ理由といふ意味もありさ。ナントうまツこいパンリング〔口あひ〕ざらう（須）エ。おんじやか話がわからんやうゐなツてしまふた（繼）アゝ〳〵話せおい〳〵〇所で辨吉の方に依ていハチゝンチン〳〵ブイ乃おんたうら股から尻尾が出たのじやアないが。燒芋大の角をはやして常ゴ田乃的を敵と見做して。仇吉えどきの惡言おんぞも時々いひかけた事があるツさ。つぎはらいきやうふどやうどてあきりすいつーやれどもすがはいそのいみがわからぬ。ゆゑはんやりだまつてきいてゐる。已ゴ平生がそんなだのらおんぞいゴ穴でも見つけたなら。スツパ抜ーて田の次をこまらせ恥をのゝせてやらうと思ツて無く待かまへて居たもんだから。此一條の時なんざア天の賜とおーいさやさ。我時至れりと喜んで子。おばらく樣子を窺ツてると。田の次ハまを〳〵困却して子。たしか辨吉ゴ請願して。彼お客さんがとんでもおいつまらん濡衣を被せられなすツて困ツて居らツしやるが憫然だ。あたしが口をだもと面倒だうら。大姐はゞかりだが何とかいつて。ト依頼んだと歟たのまんと歟うこの所ハ曖昧だが。兎ゴ角兩藝妓の間ゴ於ても同時ゴクヲレル〔口論〕がはじまツさとさ。辨吉め。こゝぞと思さとと見えて赤い唇を引くりかへしやア

がつて「おんだとへヲヤ〳〵呆れものへらないヨあゝ書生さんゝおまへの情人だとへ働のある藝者衆ゝ異ツたもんだ子エ面のいゝのを鼻ゝかけて三味線なんざアろつちのけで。ベタツキ専門で客をとるのに平生腕なれてゐいでだけよ摘食ひの種も御前だとゝヤレ麵包ざとか何だとゝいつて連ゝ嘲弄をはじめさので吉住もモウ破れかぶれ斯うなつて来ちやア敵役だ田の次も恥をかゝされちやア意地ゝもいふことを聴なのら字。どうで手ゝ入らないお庭の花なら存分惡口のストウム〔あらし〕をおこして二人を思ふさまいぢめてやらうと。辨吉猫と一所になつて色氣おしれ罵詈讒謗醉ゝ乗して喋口りつゝると。外の野郎共も岡惚半分面白半分野治馬になつて助太刀をゝるイヤハヤ一時ゝ騒ざだツさツて○小町田も性来癇癪持だし。田の次も出のある人間ざゝし。斯うなつちやア黙ツちやア居ず。田の次ゝズツト起上ツて子。なるゝど此方ゝ妾の情人です。定めしお腹ざむりゝなりませうゝら妾ゝ今のゝらお坐敷をお貰ひまをして。情人を連れて歸りますヨ。ハイ左様ゝら御免なさいヨゆつくりとかお静かとゝコウルド〔あいろのない〕棄ぜりふを跡ゝ殘して突然小町田を引張ツて子。二階の階段を降てゐまツた其劔幕の鋭いのと其すばやいので一坐のものゝ彼此あつけゝ取られて居まつて留も得いしないで面見あはせ暫時ゝ言葉もやおかアり。○けエエりイイ(須)ハヽヽヽヽうまくやアをつたおアろまで此節ゝ學校ゝ出てこんのか(繼)サアろこらい恥をのさをつたおアろまで此節ゝ學校ゝ出てこんのか(繼)サアろこまでゝ探訪が届かんがネなんでも此事の關係でゝ校長へも呼ばれた様子だ人の風説する所ゝ因れば已に退校ゝもゝる所ざツたを誰とのが取做に周旋したので。ヤツト命脈を維いたとゝいふヨ實ゝ小町田ゝ校中の好男子ゝやア相違ないが。あゝ柔弱ゝなつても困るヨどうも女ゝ好きると不可餘程志のゝるものでも概して氣力が挫々るもんだヨ(須)さうじや。實ゝさ

うじや。我輩なんぞが考へる丹ハおア苟ゴも事業をせんとすればおア。まづ婦女子輩を遠ざけるが第一必要かと思ヒまるゥ。而して婦人を遠ざけるハ最ヒ如何したらえいのといふ丹成べく腕力を研いておア。威厳を保ツちよるが上策じやゴい。威厳さい保ツちよれば女子もおのづから近づかんワイ。人間ハ元がパツシヨ子イト。アニモル〔有情動物〕ドやから向ふのらラブ〔惚る〕してくまバ。まさか排しがたい事もあるじや。ト先刻桐山かゝ聞いた事をむ、全然鸚鵡石で喋口りたてるもど此須河といへる書生ハ彼の桐山と同級ゴて書物も數あまた讀んだ身おれど。所謂思想のおい男おるゆゑ。讀んざ事だけハどうやら斯やら月夜の螢ゥどに記えて居まどもサア自説ハと問ひかけると。一句ヒ考案の出ざる質なりたま〳〵新説を吐く歟と思へバ。昨日讀んだニウス〔新聞〕ゥ基ヒ折々議論めかを事ありと思へむ。是又受賣の論説ゴて。自分の持説丹てハあらざるゆゑ。一本グツト突込まるゝと。跡ハ一言も梨の實の皮ヒおヒだ薄ツペラおつタやさむおり。須河の如さハ極端ゴて。世間ゴ其人ハ稀なるべけれど之ゴ類似せる人ハ多かり。看客氣をつけて見たまへゥし。繼原ハ嘲笑むて（繼）そういふ卑屈な考へざゥら不可んだ。女子ゥ好るべき性質あつて尚且亂れおい人間おゥ。はじめて有爲ゥ人物だらうが力めて嫌ヒるゝやうゴして居てヤツトパツシヨン〔情慾〕を忍ぶやうじやア。到底大業ハおしがたしだ東洋でもむのしツのら文武兼備を良將だといふし。西洋でもシバリイ〔武官制度〕成立以來ハ武あつて文備おさを野おりといつて大ゥ卑しんでる譯じやアないのゼントルメル〔紳士〕といふこたア取も直さを文武兼備の人といふことさ女ゴ好れると劍呑だから威厳を保つためゴ武骨ゴをるたア。あんまり自惚の極まツた話だよしん武骨ゥ去おくツたつを大丈夫女ハ惚りやア。ハゝゝゝゝこりやア失敬

○うんゥ。ウ井、イク〔よゐい〕ゥ性根だから。ツイ龍○なぞを愛したくおるん

だ龍〇の害を説明したいが。あんまり猥褻ゐ渉るとゐるいで。マアおあづかりとしておかうヨ。腕力を研くゐ極めていゐが如此目的おら止した方がいゐ。假令武骨ゐして居たらツて。女が惚れないともいれおいから惚れたら。忽ちグニヤ乎となつて。有爲の志を失ふだらう。底ゐ到ツちやア我輩なんざア。婦人ゐ平生交際をして。美婦をお茶漬ゐして居るゥらよしんばウビイナス〔辨天さま〕を見さゝらツてもメレイスチエアルト〔蘇國の美しい女王〕ゐ惚られたゝらツても。河童のフハアトとも思やアおないヨ。ナントど字だ經驗の功こゐゐありツヲホン〇ヤア豐うちやんどうしたんざ。尚一度位出て來ツていゝどやアないかさア〳〵お酌を願ゐう〳〵〇ソラ須河どうだ。まづこゝゐ的例があるじやアおいか君ゐ武骨主義で居たからツて。此お豐といふ一個の美人が。已ゐ正ゐ北山時雨ぬれてゐしやの。ネエお豐さんさうだらう〔豐〕いやでをヨ。おてませんヨ〔繼〕ト言のゐズツト表門人ゐ心を奥



の間のヤデン〳〵〔豐〕ハ、、、、、。それでゑ貴君どうで僕なんゥがリイベン〔戀着〕しさツて無効でをものを〔繼〕ヲヤ〳〵生意氣な言語をしつて居やアがる。何處の醫學校の情人ゐ教へた貰ツた白狀しないとくをぐるぞ。〔豐〕アラいけませんハ、、、、、、トいひながらお豐ゐ下へと逃てゆく須河ゐ繼原ゐやりこめられて。酒も次第ゐ醒たと見えく〔須〕ヤ大變どやく〳〵。繼原君のへらう〳〵。我輩のウヲツチ〔時器〕ゐ已ゐ十時半ヲヤ〳〵今夜も止ツてをるゐ〔繼〕留りまいさ質ゐいれる時分巻いさまゐだ。〇須河ゐ手を鳴らしてお豐を呼び時間をさけば十一時なりといふ須河ゐたちまち面色をかへをそりや大變どやトあえて騒ぎて。急ぎ牛肉店の拂をなし無暗ゐ繼原とせりたてつゐやがて牛店をたちいでゝ。

〇話前に戻る。さても又桐山勉六ゐ須河が外出をしたる後いそぎ寐道具を取いだして床をのべ。蚊帳を釣りて已ゐ就眠らんとをる折しも部屋の障子

を外より開さて。入来る一個の少年あり。但見年の比十五歟十六。色白く鼻筋通り。眼ハパツチリとして　唇　紅なり唐様ふいへば風流蕭洒彌子瑕の幼兒へ。董賢拭細末ヨして加へたといふ容色ズツトやむらかヨ之をいへば秋の夜長の梅若丸まさハ業平のわらむ姿尚一ツ景物ヨわめていへば。バツキンハムの侯とおりける英のジヨウジ。ウビリヤアスのポイフウド〔童兒の時〕も斯くやありけめと見ゆるゝとハ些とわめ杉の彈正大弼タルトル〔海亀〕入道とおツ月さま。あまり比べかたが大業おれども兒に角愛くるしき兒だちふて。氣象も頗活の方おるゆゑ。女人禁制の高野主義で。專ら腕力を擴張をる。色中の餓鬼其人にハ多く慕むるゝ性質おり。其衣服ハ如何ヨといふヨ棒縞の單物ヨ金巾の屁子帶所謂猫じやれらをヨ結び下げてツカ〳〵と部屋ヨ入来り（少年）ヲヤ〳〵。モウ寐さのう暗いネエヨ。イ桐山居ないのの（桐）だれじやい（少年）僕ざヨ。ヲイ少し依頼ヨきた（桐）ヲヽ宮賀歟何ぢや



ア（宮）ヲイ此プロブレム〔問題〕を一題教へてくれんか（桐）また數學歟阿兄ヨ教へく貰へ。おれハ眠うておらんうら（宮）ブラザア〔阿兄〕ハ急がしいてツて教へんうら来たんざイ。教へて呉れヨ〇いやのア。いゝヤイおせへて貰えんでも外へいつて聽てくらイ。トいひをてゝ荒々しく障子を開きてゝむとする。此少年ハ第二号ゐ出たる宮賀匡の弟ふく其名拭透といふ學生なり。桐山ハ声を掛て（桐）ヤイ宮賀待ちよれ。今起て教へてやるワイそないヨ怒らんでもえいえんぢや（宮）うまぢやア早く起玉へヨまだ外ヨコムボジシヨン〔作文〕をのヨんけりやならんヨヲイ早くヨ（桐）そう急迫なイ。桐山ハりたちいてゝサアどまじや〳〵。宮賀ハ本をひらきて（宮）こまだ。如何しても僕ヨやア出来ん矢張此フホウミユラ〔定式〕をアツプライ〔あてはめ〕していゝのか（桐）馬鹿いふゐそおいな事して出来るうイソレ此法式ぢやこれでやりやア直ヨ出来るハこないおイージー〔たやすい〕フロブレム〔問題〕がおぬしヨやア獨

で出来んか(宮)ナニ未だ毫末も考へて見おのツたのさ。トいひつゝ莞爾と笑ふ。桐山ハ其兒をおがめて。ニコ〳〵と笑ひおがら(桐)そおいに懶惰てハ不可ぞ(宮)ナニ惰けやアおおい(桐)おまけんもんが。なんぜ。トライ〔やつて見る〕せんの(宮)ダツテ君今日ハ忙しいと僕がいつても君が聽ないで畫の中ハまるで外へでゝ居たじやアおいか君が往け〳〵と言ムなけりやア。僕ア王子おんぞへ往く氣ハなかツた。畫の中をウエイスト〔むだふくら〕〕〕さもんだからとう〳〵下讀の閒暇がなくおツちまつて。兎ても自分ドやアやらりやアしないハ(桐)さうゝそれでハおれよ責任がある譯にやなア。マアえいワイ。外ふハ難解點ハありやせんか(宮)ウンもう澤山だサンクス〳〵〔ありがたう〳〵〕(桐)ヲイ〳〵マア待ヨ遊んでいけヨ(宮)まだ作文があるのら遊んで居る譯ゐハいゝん(桐)えいワイ作文ハあゝでゝけヨ。(宮)こゝでかくと君ガ話をするのら邪魔ふなツくゝりやアしない

(繼)ナニイ。話をするもんかい。おれが甘い文を案じてやるから(宮)話をせん位ならこゝでも彼方でも同じこツさ。また来やう。失敬ツ。トいむ棄つゝバタ〳〵彼方へ走りゆく。桐山ハあと丹口あんごり(桐)中々彼奴ハアクチイブ〔活潑〕な奴ゞやト。獨り口の中でつぶやゐながら。やをらマツチをとりいだしく紙巻煙艸ゑをひつけつゝ何やら暫し思案兒折ゝら響く上野の鐘ボーン〇〇ボーン。

〇ゑや深渡る秋の夜ゑ月ハあまども雨催ひ浮雲多き空景色暗ゐハ結句たよりゞと時得兒なる二個の少年私塾を囲ふ板屏とゞそつと乘越え校内の庭へひらりと飛下りつゝ塾舎をさしてゆかんとをる此方ゑ窺ふ一個の少年たちまち木陰を走りいでゝ泥賊まて。ト呼とむれゞ彼方の二個ハ吃驚仰天中ゑも一個ハ身を飜へして。をむやく傍の木の蔭蒼へ入るよと見る間ゑ逃足早くいづこともなくのがれさりぬ殘る一個ハ狼狽して逃んとをるを

逃しもやらぢ走りかゝり一此方の少年ウヌどろぼうめと一心不亂拳骨を堅めてハタとうつ彼方ハキヤツとさけびながら尚も逃んと身をもがくを。ドツコイさうハともみあむしが此方の力や強かりゝん難なく件の少年をむ傍へドウト投つけつゝ○ヤイ泥賊どうしてくれうヤイ名前をおのらんか此畜生おれを誰だと思やアがる桐山勉六といふ豪傑だぞうぬらのやうな卑屈卑劣無氣無力な人間さア人間が違ふてをるワイ　桐山アもりにてげんこでポカ〳〵ぶぐる　ヤイ白狀せんかうぬ〳〵〳〵ポカ〳〵〳〵○ア痛い桐山ア。痛い僕ぢやア痛い我輩ぢやアイタヽヽヽヽ須河ぢや許してくれいアヽイタイ〳〵（須河はおきたつれど桐山はかちほこつてむちうまるりほこしも須河のいふことは耳まいらぢ）（桐）おんぢやうぬ僞を吐くな。おれの學校のもんが屏を乘越えるわけはないはいうぬ姓名をおのらんと。うぬうぬなぐり殺すぞウ（須）アイタヽ僕ぢやといふよ（桐）僕も糞もあるかうぬ〳〵ポカ〳〵〳〵（須）桐山やるせ引（桐）ぞぬ。おれの名を知つちよるなうぬいよ〳〵怪しいぞポカ〳〵〳〵（桐山はひたすら須河を山村と思ひこみて何をいつてもすこしもきかぬやみめつたよなぐりつ）ポカ〳〵〳〵（須）アイタヽヽヽ僕ぢやア引（桐）うぬ〳〵ポカ〳〵（須）アイタヽヽ僕（桐）うぬ。ポカ（須）我輩ぢやア引（桐）うぬ。ポカ（須）アイタヽ（桐）ポカ（須）我（桐）ポカ（須）アイタヽヽヽ（桐）ポカ〳〵〳〵。

## 第十一回　つさせぬ緣日のそゞあるさゐ

小町田たゝらぢも舊知己よあふ

「若き時ハ血氣内子あまり心物ヨ動さて情欲おゐし身をあやぶめて碎けやすき事珠をはしらしむるヨ似たり殊ヨ愛着の道ハ其根深く源遠ゝり。六塵の樂欲おゐしと雖もこな厭離をつべし其中ヨたゞ彼の惑のひとつ止をがたきのみゞ老たるも若きも智あるも愚おるも異る所なしと見ゆる」されば粲爾ゞ愚ならぬも一度此道ゐ迷ひてより田れ次が實意の捨がたきゐ。

人目の關を忍び〳〵ゐ互ゐ深くも語らひしが。人の言の葉さがなき世い。殊に惡事のもれやをくて。いつしか浮名たちまちに父浩爾さへ事の由を人の風說に傳へ聞て。以ての外おる大腹立粲爾を我家へ招き寄せて。さびしく異見を加へしかば粲爾い且恥ぢ且悔みていよ〳〵心を改めつゝ土用休課の其中さへたゞ謹慎を專一とし。駒込の宿に引籠りて。書を繙くのゝ餘念もなく。父の心を安むるをば。其本願といおし居たり。をのるに守山の招待にて。さ死れ日八百松ゐ昇りし折はからぬ事の間違より。他人乃仂車ゐ乘違へて。中廓の引手茶屋にひきこまれつ。思はず田の次ゐ邂逅して。まづ其胸を冷したりしに。うて、加へて吉住等に。あくまで嘲弄されたりしをさをがい世なれぬ少年とゝ堪へかねつゝ其席ゐて。已に爭ひとをおらんとせしを田の次が機頓のはからひにて早くも粲爾を伴ひつゝ其場をうまくも外せしのば。事穏ゐすゝさりゝり。其夜いあまりに夜ふけしかば竟に田の次ゐ誘はれて。



ある待合に夜を明して。翌朝朝まだきにたち別れて。我家へ歸りたれどおもなければ父へい事の由を告も聞えぎたゞ思はざる雨風に歸路い殊れ外夜深けしゆゑをゝめらるゝまゝ任那と共に守山の家に泊りしとのみ何氣おき体に告聞えぬさいあれ此事い逸早くも友芳の耳へい入りたりけり。或日小町田ゆ家に訪來くひそゝゐ小町田に意見を語りて。其將來ゆ警誡たり。斯て一旬ばかり經たりし程に已に開校の期も來ぬ。粲爾い駒込の家をいで、やがて學校ゐ赴きゐ。校長よりの呼出しあり。何事ならんと行く見れば校長粲爾に告くいふやう。足下い學才も乏しからぬ且品行もあしからねば。是まで頼母しく思ひ居りしが。近頃何故にや學校内ゐく頗るよろしらぬ評判あるゆゑ。段々事の源を探り見しに。いろさま種のある事とゞ思はる。左樣な不品行な所行あつてい外の學生への為めしにおらねば。退校勿論の筈なれども又退いて視察をれば。足下の性質の沈着おる。唯一旦の卑情に溺

れて素志を挫くべき人とも覺えぬ今より退校を命ぜんことをしむべき次第なれば情實幾分を酌量して罰一等を輕減なし休學命ぜべう思へる〳〵此旨承知なされよとのいと平らかなる申渡しに粲爾もかへすべき言葉もなく覺えぬ其兒を報うおして其日より學校より歸りたりしが藏しおほをべき事ならねば父よりも其仔細を語り聞えて身の誤を詫たりしに浩爾は思の外痛くは叱らぬたゝうつけ者といひたるのみにて他に一言もいたざりけり寸鐵人を殺をといこゝらの謂にやなか〳〵に口やかましく罵めくよりは人を感ぜしむる力は強かり粲爾は其年は少けれども性來センシブル〔感ど易き〕な性質にて一度恥辱と蒙るとき丹は年を經ても忘るゝ能ぬ恥を雪がんぬる心あるゆゑ一ツは父の氣沈安むるため一ツは我汚名を潔くせんとて是よりまを〳〵身を謹み興のおのが部屋に閉籠りて年頃手馴れし政書を繙き苦學に餘念はおきんのうら往る日朝とく別れしま



ゝ事の樣子を露程だに田の次の許へは知せぬもゑさら此頃では苦勞にして紫ぐもをべく怨をえせん郵便なりとも送りやりて事乃始終と告おらせて思ひさるやう諭をべきの否なまおかに便をせば互の未練がまを譯ゆゑらしこい樣でも女の淺ぬか我こゝに在る由をおらば事にかこつけ訪ねを来んうれでは却つて面倒おり遠ざかるものは日々丹疎し古人の金言まことおらむ打棄おくが上策ならん素人おらばいざおらねど牽手あまたの浮氣稼業おかに心を移しもせば我身の爲の幸福なるべしといへ日頃の真實さば思ひえやらで心強く理由もおろせを遠ざのるはあまりに不實な仕方おれど大功細瑾を省みを小義に泥むは愚の極なり。何ゝさりながら田の次こそ我身丹取ての善知識あの守山が說ではなけれど人若き時は架空乃癖ありたゞ一向に奇を求めて身を忘るゝに至きる事まおとおおろかおる振舞おり架空の癖はもとよりして色戀丹のみ恨らねども最も恐ろしきは

架空乃戀なり。無好法師が徒然艸ゐて「身と惜しとも思ひさらぎたゆべくもあらぬわざゐもよくたへ忍ぶゐ。たゞ彼の色を思ふゆゑぞ。と穿ち兒ゐて宜さりゝゐ是通常の戀の上ゐ。常の戀だゐ尚且然り。況んやアイデヤル〔架空的〕の戀情をや。佳人才子の奇遇を羨ミそを身の上ゐあぞらへたる。我身の行のおぞましさよ。さもあらばあゐ架空れ病ゐ行えずしてゐ悟るゐ由ゐゝ行つく後ゐ非を悟るゐ。己ゐ後れたるゐ似たりと雖も智惠淺はかゐる凡夫の身にてゐ之を如何ともすべきやうゐゝ經驗ゐ智識の母蹉躓ゐ覺悟の門あの田の次我身もろともザイセルフ〔汝が身〕ゐわがおろのゐるアイデヤリズム〔架空癖〕乃 unfortunate victim〔不便ゐ犧牲〕で。あり々るゐや今ゐ不實といはるゝとも。結句そゐたの幸ゐりまた我爲の幸福なり。pardon me〔ゆるしてくまよ〕と小町田が自問自答の獨り語洋語まじりゐつぶやきたる其語氣さゐがら西の國の稗史を學ぶごとくゐるゐ尚架空癖のすつりとゐ脫ぬゐるしと思れて聞く人あゐなば笑止と思はん。

〇ゐくて四週間を經たりゝ頃ゐ。ゐれかゐ學校より書狀來ゐぬ披き見るゐ入舍さしゆるをとの文言ゐり思ひしよりゐ早ゐをしを心ゐ深く喜びつゝ父浩爾ゐも理由を語りて再び學校ゐ入塾なし。以前ゐましたる勉勵出精もとより才學凡ゐらねば程ゐく級中の上位をもしめ人ゐ漸く推導され講師校長ゐも愛せられてあしき風評も日を經るまゝいつしか薄らぐゐ至りしかどいのゐる故ゐや小町田粲爾ゐ其頃よりゝく顏色おとろへ。兎角鬱閉勝の樣子あるを倉瀨其外の信友ばらがこゐ腦病の再發ゐらぎや肺を病みそめしゐあらざるかといろ〳〵さまゝゐ心配ゝて頻ゐ療養狀をゝむれども。小町田ゐ敢て之をさかを別ゐ替ゐたる事なしとて其儘ゐしく打過ぎけり。此頃小町田が莫逆なる守山友芳ゐ校を辭して代言事務ゐ從事せしが。一月あまり以前なり々ん父友定ゐ伴れく靜岡地方へ赴きたりさるゐ代言の

事務をかねく。おのが近き頃入黨せし。ある政黨の用向をも整理せんが爲の旅とか聞えし。

○時に十月九初つゝた處に下谷上野町佛に摩利支尊天日柄に緣日といひおらぶれば。清少納言の口真似めけどもげに東京の市街に限りてあきるゝまで丹數多紀に彼の緣日とかいふものなりのし。今宵に稻荷明晩に天神又その次に琴平おどゝ。無間斷丹緣日のを引續紀てゐと〳〵三百六十余日緣日おらざる日に稀おり。埃及國の多神教も思ひ合されていとかしこし。想ふに我國の神佛に西のゴツド〔上帝〕丹に立まさりて。ズツト開化主義でましますゆゑ。かくに幾柱丹も分身して。おの〳〵分勞して人間試ば護らせたまふゝやあらんずらん。斯る有難き神々たちが日毎夜毎に目をくばりて我皇國を護らせたまへば。のさにはとさえに家内安全國土太平人智開暢學藝進歩農業振起商賣繁昌武備擴張政治改進秩序整然日新月化疑ひおし南無



亞アメン。陀波羅美陀波羅美も白す。

○はや暮はて玄暗乃夜も街をてらそ露店の星をあざむく燈火に。あたりまゝゆ紀夜の市一山二錢の翫物店にはいさとり兒の達摩今戸燒のおいらんと滕相摩し。二本八厘の簪釵店ふに馬爪おまいさゐ鼈甲を氣取りて象牙の劣町形本名鹿の角と肩をおらぶ。カンテラの油烟に薫ぶりてに菊乃隱逸の名空しく打水の露にうるゐふてに柘榴の紅玉を包めるに似たらん七艸も已に時過ぎたれば華ある艸どもいと稀にて同じさまにて趣なき秋蘭蘇鐵など鉢植丹して。こゝにもかしこゐもすえおらべさる中にに根のなさもありぞと聞丹きさるに緣日の艸花にに常ゐ定まれる値のなさをば暗に悟らしむる惡戯にやあらん。らく計りはのゐ紀物のをうち集ひたる所にらく計り人あまた集ゐ来りて男女老幼袖ふりあゐ拐賊れ餌食となるにいかに街の狹隘おる空氣の不潔なる遊歩に便宜おる場所とも見えねば衛生の爲丹と

て人々群集ふわけにていあらじ。けだし摩利支天のいやちごなる御靈德を慕ひまつりて斯くい蟻集ぞと推測れば我おがら畏う覺えて掌おのづから合さるゝふ。但見れむ賽錢い一厘錢のみ。それだゝ奉加するいいと稀へ。ある不思議おる事もあるものかな。然れば蟻集る老若男女もみな信心家ゝあらざるみやゝ。ゝる不健康なる空氣を侵して。おのが夜業をも打忘れて。この横町ゝ逍遙をるとい。知識ゝ長ぞさる東京人ふい。ふさわしらざる振舞ゝこそ此原因い那邊ゝあるか歸納法ゝて推理せん歟。將た演繹の法ゝ因らんか。喞々奇怪とうちうめくい。作者ふ似たる屁理屈論者年比二十二三と見えたる色の生白き書生風庭前れ梧桐搖落して。凉風だーぬけふたちたるゆゑまだ移換がでたぬと見え隨分被おらした薩摩の飛白へ。綿南部の羽織を引りけ。爪先ばかりイヤゝ磨た古い疊附を穿けたるい。問はでもおるさ北國そだち。氷ゝをべらぬ用心ゝら。習慣第二の性とるして。足の爪先ゝ力がいるへ件



の書生と相並びて。何やら語らひつゝ行く書生い是又年二十一二比。肺病ゝ胃病の情人と見えて。顔色い人並より青ざめたれど。瘦肉ゝして男振よけをば。浮氣な娘おどいをまちがひて。度々ふりゝへりく見るもあるべー下被い白地の單衣。上へ被たる南部の袷い古色蒼然として襟垢つきたり。袴い縫直したばかりと思はれむだシャンとして折目正しく夜目遠目もて之を望えむ。立派ゝ嘉平治と思はれたり。第二の書生を誰とゝなす。是おん小町田粲爾おるゞ。胸ゝ心配のある故にやたゞさへ鬱氣性の人間が。此日い殊更ゝ不樂氣にてろくゝい口もきかむぶらりゝと逍遙して。やをら廣小路へ出たるとき。連の少年にうち向ひく(小)ジャア倉瀬なんだ子。いよゝ山村と繼原い退校ゝなつたんだ子(倉)エ唐突ゝジャア〔jar〕といふのら。jar is an earthen vessel〔ジャアい瓶なり〕といはうと思ツさ。さうヨ退校ゝおツちまツた。おかし山村い到底ホウプ〔のぞみ〕乃無い男ざのら。ギス〔ギスミッス

の略にく退校といふ事）ハ結句正當ゐ話だが。氣の毒をゴハ繼原だヨ。彼奴ハ子放蕩懶惰ゐやア相違ないが。幾分か取どころのある人間で。山村ゐんぞたア同視し難しさ。君も知てる通りスピイチ〔演說〕なんざア甘ー。さうして中々あれで慷慨家だヨ。只憾むらくハストロングウ井ル〔不拔の決心〕が無いゞうりさ（小）詢ゐ然りざ。さうして繼原ハどうする積だらう（倉）工部へ入學とか言ツてゐた。彼にハ工部ハ不適だ（小）山村ハどうした（倉）山村ハたしゃ銀坐のアヽ何とゃ言ツたヨ。さう〳〵東都新報とのいふニウスの工ヂトル〔記者〕ゴ傭はれるとかいふはなしざ（小）ヘヽイ。いヽ新聞屋ができるだらうハハヽヽ（倉）君ハ桐山ゴ風評と聞たか（小）イヽヤ（倉）あいつハ奮進黨へ入黨ーたといふ事だ（小）此節ア政黨へ加入をる事が流行だネ守山なんぞえさーの魁進黨へ這入ツさといふ事だ。そきハそうと繼原ハ今何處ゴゐるか（倉）山村と一所ゐ本郷ゴ下宿して居るんさなんでも龍岡町邊



の下山とかいふ新しい下宿屋ざ（小）けふハ君ハ學校へ歸るだらう（倉）アヽ（小）そきじゃア眼鏡の方へ行ゥぢやアないの。（倉）さう〳〵話でうかきく上野の山へ這入さうゴなツた時に小町田君ハ大層皃色が惡いじゃないゥ何如したのだ（小）ナニ例の如しさ。（倉）ノウ〔否〕例でないヨ。僕ハ君ゐ忠告をる事がある（小）エ（倉）斯言ふと何だか具い物身知らぎで生意氣なやうな言分だが。君ハ一体子ルウバス〔神經質〕だから（小）ヲイ〳〵倉瀨モウ御免だ。神經質の講釋も久しいもんざ。守山ゴも聞くし。誰かゴも聞くし（倉）マアサ。聞たまへといふゴ。君ハネルウバス〔神經質〕だもんだから。何のすると無益ことゴ心配して。自分で身体ゴ不健をるヨ。よしんバ頑固連や石部黨ガ。何といはふがノウ。マツタア〔かまふもんゥ〕時々にやア酒も飲むさ。プレイ〔放蕩〕ゴるもいヽトやアおいか。人の犢鼻褌で角牴をとりやアおまいし。浩然の氣を養ふのゴ。何の憚があるもんか。最も僕の一身の如きハ。あん、

まり立派ニも威張ないが。近来斷然非を覺ツテ自立特行と決心したのらそれで斯な事もいふんだけまど(小)そりやア君のいふ通さ實ヨ君の行爲の換ツさのハ。僕も感服ヨ堪へない所だ君が屢々プレイ〔放蕩〕をる時分ニ。僕が意見した事あツた。が今じやツ汗顔と思ふ位だ(倉)棺を蓋ふて知るといふのら。容易ニ賛辭を下がをべうらぢツ。ちかしフレンド〔朋友〕となツた以上ハ互ヨ思ふ事を明しやツて。長短相助けて奬誡する)が真の情宜だらうと。僕ハ思ふが(小)そりやアいふまでもない事さ(倉)それぢやアいふが子○酒を飲みヨゆかう(小)エ。妙な發案を提出した子。ナゼ(倉)何故でもないが。積鬱を散ぜる爲ヨ(小)何處へ(倉)何處か此邊で(小)とかしいじやないか。何故俄ニそんな事をいふう(倉)大丈夫區々として物を思はんやだ例のシンガア〔藝妓〕を聘ばう(小)ハ、、、、夫ぢやア解了ツた。ジヤアないんだネ君ハ僕と以て花風病的の人物だと思ツたんざネ(倉)ナニサ。さういふ譯で



もないが僕ア君のラーブ〔意中人〕のレツタア〔てがみ〕を見たヨ(小)エ(倉)サア。さのふ来さレツタアとネ偶然僕が拾ツたうら。開いて讀で見た所ヲ實ニ僕ア感服したあの氣象おら君の迷ふのも無理ハないヨ。僕アこれでも多少人情を解しく居るのら君の心中を察するヨウーマン〔婦人〕ハ所謂soothing agent〔心を和らぐるもの〕だ。誤ツて之を濫用をりやア或ハ人をして懦弱おらしめ其大望をも挫かーむるが我ウ井ル〔執意〕さへ定まツて居りやア。決して恐るべきものじやアない。否六尺の男兒をして能く其偉業をおさしむるハ屢々佳人の力ふあるヨ笠頓が編た莉延自外傳を讀んで見たまへ。莉延自程の英傑でさへもレデイ、ナイナ〔邦イナ姫〕のあるが爲ニ其回天乃素志を貫く勇氣を維持し得さといふじやアないのウエスタルンカントリイ〔泰西〕で中古ニシバリイ〔武官制〕乃盛へたのもまた近代の社會ヲ於てレデイス〔貴女達〕が財嚢を與へるおんぞハ皆是佳人ハ善用して。士氣

を振むしむる方便だア子。是ゐ因て之を觀きば佳人を愛するゐ人情の常ざ。我ウ井ルさへ確定ーくりやア。毫も憚るべ紀譯ゐおいんさ例の君シンガアおんざア氣象も中々快活だし。何れレツタア〔てがみ〕の文言で見りやア。君ゐ對ーて真實おるのゐ毫も疑ふべき所なしだ。仮令藝妓をして居たからツて其スピリツト〔氣象〕さへ高尚なら。君のコンキウ〔コンキユバインの略ゐて妾といふ事〕位ゐやアおさツてもいゝ大丈夫時に太白と引て鬱悶をやらないじやア長く大志伐養ひ難ーだ。鳥八十か何處ゥで一杯飲まうエム〔かね〕ゐ僕のとこゐあるのら。マア兎も角も来たまへ来たまへ「倉瀬ゐ少々酒機嫌と見えて。頻ゐ獨斷の議論をならべて。無暗ゐ小町田と誘引ひゥゝまど。小町田ゐ打笑ひく。たゞをき程ゐあゥらふのみ。ノゥ〔否〕イエス〔應〕ともゐ分明ならねば。倉瀬ゐ少々じれこみて(倉)ヲイ小町田。どうも君ゐ優柔不斷ざからいけない。一旦ラアブ〔愛〕ーた位おら。飽くまでラアブをるがいゝにやアないか。頑固黨が二三度攻撃をしたゥらツてそれで恐ま入ツてゐまふ位なら。斷然絶念して去まうがいゝ。腹でゐクヨ〳〵思ツて居おがら。只外面ばのし聖人ぶるのゐ君ゐも似合おいゥ井イクネツス〔未練〕だ。馬鹿氣切ツた話じやアおいゥ。小町田いすこしむつとして(小)ヲヤ妙な事をいふ子。僕が腹の中で思ツて居るたア。ゐりやア何を思ツて居るんだ(倉)ヘン知ツてるヨ田の次の事をさ(小)ハゝ君も馬鹿な事をいふ。僕ざツて男だ斷念した上ゐ未練ゐ無い成程レツタア〔てがみ〕ゐ此間もよこーさが返辭をやツた事ゐ曽てなしさ。尤も彼方ゐ女だものゥれゐ色々の事情もあるゥら。今尚あゝいつくゐよこをものゝFrailty, thy name is woman〔脆弱ゐ女子の心ゥお〕さ。頼ゐなるものじやアおいヨ。僕が快々としく居るのを。君ゐイヤニ邪推を下してシイ〔あれ〕を思ツてると思ふかーらんが。僕が心中ゐ大ゐ異なりだ。僕不肖なりと雖も年来私ゐ志を立てTo be something〔有為の人たらん〕と盟ツた

アルイデヤルといの世行ふ翁政事上の中れさこうビユウ癖政事丹關係のアルと云々

うらふい豈一人の女子の爲ま終身の業を誤らんやざ只憾らくい僕があんまりアイデヤルだもんざのら時々妙な妄想を興して西洋思想を日本の社會へ(fallaciously)〔馬鹿氣た具合〕ふ應用をるうらそれで失策をする事があるんさ。ぢうし此弊い僕ばうりどやアあい。日本全体がさうざ君なんぞも矢張さうだ今君が莉延自の例を引たがおんであれが處世のエキザムプル〔てゐん〕ふなるもんの子。回天の大志と抱きおがら美人のお蔭で勇氣を維いでヤツト其功を奏をるたアウ井イク極まツたたなしどやアあいか。ありやア笠頓が才筆で以て人情の隱微を穿ツたまでゝ元来ゐめられさ事どやアないのさ。將来ふ害がなけりやア搆たないが。兎角婦女子などま親んで居ると。思ひぬ入組が興る者で。義理人情を捨ざる以上い爲ま色々な困難が生るヨ。たとへば時と場合まよりてい。相應まべキユニヤリイ〔金錢上〕の心配もぢなくていならぢ。フヒジカル、アツシスタンス(形体上の助力)もぢなくていおらぢ。夫是心配ををる中にい。人ふ嫉まれる事もあらうし人ふ怨まれる事もあらうし苟まも人情を有ほる限りい。所謂意氣地と張で以て。喧嘩の種をまく事もあらうさ是等い決して色ふ溺れくそれで釀した害どやアないが其遠因をさぐツて見りやア。終極い女子ふ歸せざるを得ぢさ。百般乃出来事其底狀たゝけば毎ま婦女子をいだをべしとい。誰やらがいつた確言ざが。實丹女子い恐るべしだヨ。それも身を立て後であれば。いくらか進退丹都合がよゝれど未だ天下ふ我家なき。漂泊書生乃身の上でい第一時の浪費をると注意を餘所事ま散ずるといふ。此二ツの害があるうち非常非凡の人でなくていい重ま(dangerous〔危險〕)といたざるを得ぢだ。政黨ふんぞま加えるさへ書生の爲丹い有害無益だ蓋ー其思想と二三にして空しく漁名家となツてぢまツて輿論の方針を左右をべき學者の本分を誤るからさ政事丹參るさへさうざものを況んや色丹泥むま於てい(倉)プーヒヤ〳〵といひたい

が失敬ながら申チマセン君ハ立派らしい議論ハ吐くが言行相違としかいれないヨ其位斷念したなら。ナゼ其様ヨ鬱閉で居るんだ悟れないのら。未練があるからそれでふさいでゐるんだらう。僕ア何も君の非を訐く malice〔惡意〕もなーまた遊蕩と勸めるでもないがあんまり君がふさいで居るのら又腦病ゐでもなるいせんのとそれやあまりやが心配だのら〇トいったら餘計なお世話だ自分の頭の蠅を追へト世間の奴輩ハいふか知らんが。僕ア真實のら忠告するんさ。ほんたうヨ君ハ子ルウバス〔苦勞性〕過るヨチツト磊落にやらうしたまへ(小)君の真實ハ深く謝るヨ成程苦勞性ヨやア違ひ無いから。此 defect〔缺點〕を除かうと思ふがどうも性質ハ去かたがない。今も明ふいつた通り。僕ア未練なぞハ少しもないがたゞ人情ヨ束縛せらるヨ實ハ心の中で struggle〔戰鬪〕して(倉)だらうと僕ア洞察したのさ。何もそんなヨ苦むヨ及ばないや月ゐ一二度づゝ逢へばいゝ(小)馬鹿アいゝさまへ。僕ハ逢ひたいと思やアーないが(倉)それじやア如何ーたんざ(小)實ハ子君も聞いたであらうが。例の good〔中廓〕の一件でハ。あれゐ多少迷惑とかタたし。それから愛顧客も減ツたといふから是が普通の人情ならいやア打棄るのハ義理ぢやアないのさ。そるヨあれも色々な因緣からして真實僕をといひかけてゐむらくだまつてゐるくらせはおのろけちや思つて居るから。兎ヨ角今までとうだいおそれいつたといひたいのをぢつとこらへてゐる同じやうヨ。聘んでやる位ハ當然ざが。ことむをするどくして。といひかけしがふはかヨ。のう思ふのハウ井イクネツス〔氣の弱いの〕さ馬鹿極ると自ら笑ツて。已ヨ斷念をしたけれどもハいくらか良心が安んぜんから。持病の苦い顏が見えるんだらうさ。どうも人間ハウ井イク〔氣の弱い〕なもんさアハ、、、「倉瀨ハ又も何事かいたむとあたる其折しも松坂屋の前よりして。こあさとさしていでさたれる。二人連なる婦人あり。一個ハ年比三十二三當世風の權妻仕立をしや眉毛ハそりおとして衣裳も野暮ヨ被なーたれど。ヲギヤアの時から今日までまるさ

り素人で通したとゐちと請取られぬ取做格好殊ゴ左の手が何とやらん手持不沙汰ゴ思たるゝゐ小褄とりさる昔の癖の尚殘りたる故ゴやあるらん。下女と見えさる一人の小女丹万斗青の小鉢を持せおがらこなたをさしく歩を來しが。圖らず粲爾と顔見合せ。女ゐたちまち声をゥ々て(女)ヲヤマアあた貴方ゐ。小町田さんの粲さんじやアありませんか「粲爾えびつくりつくづく見て(小)ヲヤ寔ゴ暫く其後ゐ大層打絶えまして(女)こなたよりでございまはヨ御親父ゐ(小)相替らず達者でをります○今ゐ何處ゐお住居でをか(女)じき近所でございますヨ。よい所でお目ゴのゝりましさ。是非あなた丹お話がございまをから。御不都合がなければ。一寸宅まで「折ゥら人力が六七臺お成街道の方よりして。まけじおとらじと先をあらそひ。ゴツサイゴツサイガラ〳〵(女)アゝこわいヲホゝゝ。

# 第十二回

學校から追出される親父の送資ゐ絶える。

どこでたつ岡町丹懶惰生の飜譯三昧本郷辰岡町の下宿屋下山といふ家の奥の一間ゐ足蹈延してゐらばひ卧したる繼原青造讀さしたる時事新報をゐうりだしゐながら(繼)ヲイ山村如何した子。いよ〳〵一件ゐセツトル(確定)しさか(山)ナツトエツト(尚)だ。然し別ゴ金儲の口ができさ(繼)どうして(山)ナニサ汗牛堂の飜譯が子一葉十行二十字で以て。トエンチイプハイブ(二十五錢)といふ約束さ。ツウチイフ(あんまり廉い)だゐら嬉しくゐないが。千里の能ある駿足と雖も之を知るの伯樂おければ。餘義おく平凡の駑馬と伍しゴ我多々〳〵馬車を牽ゥざるを得ぎざ我々の勞力を廉價ゴ賣ツちやアいくらか見識が下る譯ざが。是も勢のおゐらしむる所財政危急の今日ゴ在ツてゐ是非ゴ及ばぬといふ次第さ。それゐ其價値で甘心しく。やつてやる積に約束した(繼)そいつゐ甘

さうお口だ子。原書ハ何だ(山)エンサイクロピヂヤ〔百科通覽〕の中ゥら政事に關をる事と農工業ゐ關する事を拔粹して譯するんさ工業上の事ゴやア中々テクニカル〔科学的〕の言葉があるのら解らんポイント〔ところ〕も屢々あるが大概いゝ加減ゴ意譯をして早速エム〔かね〕ゴをゥ了見さ今もいつた通りプライス〔價値〕ハツウチイフ〔あまり廉〕にハ相違ないが只便利なのハエム〔かね〕の点さ。原稿さへ持てゆけば直ゴ引換ゴそれだゞの代をよこすから。我黨ゴやア至極便利ざ最も飜譯者ハ僕さのりじやアない外にも二三人ハあるんだが。どうざ君もやつて見ないゥ名前ハ僕の名義ゴしといて譯料ハ相當ゐ分るどしやう(繼)そいつハ我輩の願ふ所ざ。親父の供給が絶えをゥらハ我輩も實に究したから。何ゥ金儲をしなくツてハ下宿ろペイメント〔排ひ〕もでさやアしない。早速周旋してくれたまへ。それじやア今朝ツのらやつて居るのハ即ち其translation〔飜譯〕か(山)さうヨ見たまへ雜と如斯体裁さ(繼)どれ〳〵。ト言ながら山村が譯しかゞたる原稿をとつて見る(繼)ヤア隨分亂暴ゐ飜譯だゐエートなんざ○是ニ因テ之ヲ觀レバ倍審裁判〔ジユリイ〕トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ蓋シ遠隔ナルサキソン時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ決シテ疑フ可キ事ニアラザルナリト余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ○ハヽヽヽヽイヤニ兄長な曲りくねツた變ゐ讀惡い文章だなア羊の腸よろしくさア如斯文体をいふンざらゥ就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」ゐんざア實ゐ重複極るどやアないか。ナゼこんなゴ文を延をンだらう反語ばかしいやゴ重ゐつて讀惡くツて解りゴくゝツて是じやア素人ゴやア解りやアしないぜ(山)ハヽヽヽヽぶつゝけがきだものを文ハどうせ無茶苦茶さ。ちゥし長くしたハ此方の策さ反語を澤山つかツたり同じ事を繰返して居りやア骨がちつとも折れないで以ゥ直ゐ一枚だけ出來るだらう何

くゝせぎんむあるべからざるふりと歟それ然り豈それ然らんやなどゝやつて居ると。十行二十字ゐ二十分位に一枚かゝツちまふ。是之れ economy ニ。Ilbon（ゐねとりの儉約）といふ（繼）ヤレ〳〵斯いふ飜譯者乃手ゐ成た飜譯書を買ふ奴ゐ可憫だ。おのし我輩も其法でやらかそう。二三枚原書の散亂まおつたのを貸たまへ。（山）ヲツト承知だ。ろれぢやアペイジ。トエンチイ〔二十葉〕ゥら〇かうツト〇ペイジ。サルチイ〔三十葉〕まで。君まやらう。汗牛堂へゐ明後日ゆくから。ゐるべくせいだしる譯したまへ。十枚で二圓五十錢ゐやアゐるゐら（繼）急ま エム〔かね〕の要ることがあるから。それじやア直まやらう。時ま山村例のイギヲツト〔愚人〕のシクエンス〔後語〕ゐどうなツたか（山）ろれに附て實まリヂキユラス〔をゐーい〕ゐ話があるゐ玄一昨日の晩僕が子。イギヲツト〔馬鹿野郎〕を引張だして子例のト印を引卒して若竹の寄席へいつた所が豈圖らんや思ゐざりき桐山宮賀ど同伴して同じ席亭に来會せんとゐ。（繼）へー。そいつゐ珍的妙不可思議だ須河め。定めし弱ツたらう（山）弱ツた所の騒ぎじやアない彼奴のさらぬだゐ真赤ゐ面をゞ。丸で猿のやうましやアがツて子。物をもいたないで逃出ものさ。僕ア君の知ツてる通り少々眼の力が弱いんだゐら（繼）ハヽヘ少々と副詞と附るうちがいゝ。七八度ハ眼鏡をかけてもちつと遠方ゐ怪しい位だ（山）馬鹿アいへ。僕ア十一度だ。僕より桐山ゐ餘程非道いぞいつゥも須河を僕だと思ツてさんざ揶揄りつけた位だもの（繼）ゐのー君も隨分ひどいぜいつゥ新宿へいつた時ま。プロ〔娼妓〕の坐敷を取違へて。平氣で上の間へ這入ツていつて。ゐきりゐ駝酒落を言ちらしく。プロまを抱つかうとするだんまおツて。はじめて間違へたと氣がついて。泡を喰ツてかけだをとて火鉢の鐵瓶をひつくりかへして。夜中まで僕まで口をきかせく。やつと詫言をしたぢやアないか（山）アリヤア酒まを醉ツた爲の故だ。僕の近眼の故まあらぎツ（繼）なんのかんのと

負惜みをいつて。眼鏡をゥけゐゐで見えをするゥら時々失敗をやらゐをんだそれゐさうと話が横へまぎれてしまツた(山)トいふ譯だから僕ゐ桐山の居るのゑまらずゐ平氣で前の方へいつさ所が桐山めさをがゴ鏡眼をゥけてるゐら忽地僕ゐ眼イヤ眼鏡をつけたが彼奴め例の通り意地惡ものだからツーンと。まらん振で居やアがるんさ。僕ゑやすやく氣ゐ附たが此方も意地で挨拶もせを暫らく睨競でをまして居ると向ふが居苦しくなツさと見えく。宮賀ゴ何やらホ井ツスル(耳うち)して。いつの間ふゥ歸ツくまさ(繼)須河ゐ其間何處ゴ居たのだ(山)何處へいつたかゐゥらなゥツた。サア是からが僕の幕さ。まゥー君嫉んじやアいかんぞ(繼)イヤハヤ呆れカイロウのシチイ(都會)でございい誰が君ゐんぞを嫉むゑんか敵婦ゐたかゞ豐印だそをさへ空情痴ときくゐるもの(山)ヲホン空情痴ゐゐ侍ゥぎゥしツ。マア氣を靜めて聞さまへだ愚邊も無て知らるゝ如く彼の豐印といへる小女ゐ。とくより僕ゐ氣有り名古屋鯱魚だちしてヲーライトと命ゴ應じたげる素振があるから岩木ならねば僕ゑまた(繼)だをが岩木だと思ふゑんの。カンテン野郎こんゴやく男兒たア君の事だ(山)よいヨなんとおといつて頂戴まゥるゐ須河のトンチキめが。あの豐印ゴ戀着して逆上て居やがるのが可笑いゥら。わざと須河奴を玉ゐ遣ツて。まゞ〳〵牛肉屋へ出掛さが子是ゴやア深い因緣ありさゥも〳〵豐印の親父といふのゐ所謂天保度の古藥鑵でイヤ二頑固的の人物だゥら。一旦人ゴをゝめられて矢場へあのガルゝ(娘)をだーた所が矢場ゐおいちやア嫌の風儀が。ゐるくゐるだらうとまんばいしく。さちまちつれゥへつた奇人だのゥ。たま〳〵豐印ゴ當込ゴして。牛屋へやつてくる客があつても決して外へゐ出さないとさ但し二個以上連があれゞ。シブ〳〵おがらゴ出をといふのゥ。こいつ乘ぎべしと工風を凝ーて。あの須河めを主唱ゐして。もんべえじめて連出ーたが元が斯の如き因緣

だのゝ何とゝブロベブル（ほんとらしい）な口實を設けて須河を退除ふと
いふ望であつたを圖らぜ今話した一件で以て須河が求めぜして歸ツたか
ら。いよ〳〵滿願の時到れりと。そろ〳〵小當り丹當ツて見るとシイ（彼奴）
ハ元來二ツ返辭で。チン（願）でプレスト（胸）とたゝくやつさサアのうなツ
て見る日ゝあつく見る日ゝなるとモウ寄席かんぞハ聞氣もなくそきゞや
ア斯う〳〵と相談して○ヲイ繼原寮てしまツちやアいけない。是のゝが肝
心だ○ヲイヲイ（繼）エイやかましいウン聞いてるヨ（山）子。それからな
（繼）ヲイ垂涎が垂るゞ（山）馬鹿アいへ。こりやア嬉だ（繼）嬉えよだれもお
おじこつさ（山）それからあア。急いで二個手ゝ手をとり（繼）イヤハヤいや
な道行だぞ（山）寄席ゝら街道へ馳けて出ると出逢がしらゝ（繼）犬の糞敗
（山）そんゝらまだしも增だけれど。須河の頓地氣めが待て居て子（繼）ヲヤ
〳〵。それじやア其時まで。須河ハ街頭ゝ待て居たのか（山）向ふの汁粉屋へ



這入ツて見たり。又ハ所ツち此方歩いたりして。根よく出てくるのを待て居
たとさ（繼）ヤレ〳〵馬鹿忍耐の強い男ざそれのゝ何した（山）僕ハ大ゝ失
望したが子。忍一策を案じだして子。モウ九時過だと思ハれるのゝ。お豊ハ
こゝから歸さうじやアないのと。内々眼で以て其意を知らせて。二個ともお
豊に別れさのさ。さうをると須河めが俄ゝ何ゝ思ひだして子。先へ歸りさい
と吐したから。こいつ上都合と承諾して。須河ゝ別れると直ゝ轉じて。牛屋の
通までかけてゆくと。誰か半叫むのり前の處を。女と話してゆくやうだから。
何の心もなくふツと見ると女ハ其ウボイス（声）で判斷をるゝどうやらお
豊の樣であるゞ。男ハ無言で歩行てゆくのゝ。僕の近眼ゝハわゝらんのさ。足
を早めて近よつて見るぜ。イヤどうも驚いたゼ中々頓痴氣も馬鹿丹ならん。
其男ハ即ち須河さヲヤ。といふとさをゞの須河ゑよゝど駭然としたやゝで
あつさゞ馬鹿ゝ鐵面る野郎だから。平氣で僕の方を向さやアがツて子。ヤア

山村君も何の忘れもんをしたら我輩は牛屋へ手拭を忘れてきたッさ實ー
後世恐るべしだ(繼)ハヽハヽヽヽろれじゃアつまり双方が御失望だ(山)
さうさ其晩はそれで牛屋へ歸ッて再びいくらかの散財しく空して二人と
もうへッてしまッた(繼)とんだ遊學勝栗毛だ。ハヽヽヽ。

## 第十三回　心の宵闇

有漏路無漏路と踏迷ふ男女の密談

美女の肩のとぞ見る新月は已に西の空に傾きつゝ四下もやう〳〵に昏うなきば一しお秋風の身に滲むめり。爰は都會の中といひながらも繁華を通筋にあらざるゆゑ役は往來れ人も疎くひさとゞろかを人力車のゴボ〳〵も稀に聞こゆるのみ。心ぶくき格子戸つきはいかゐる人の住居なるか此方は一面の黒板屏松おぶさつて姿をかくし。彼處に一基の石燈籠蔦だきつきて形洒落たり艸葉ぶをだく虫の音のみ。いと悲しげにおきつきゆる小庭へだてし小坐敷こそ主人の居間かと思しくして疊六ひらほど敷たるべー燈火あやまくまおぼろげなれど。障子ぶ移る影坊師はまだとしまかき男女と思ふる。清少納言に見えたらんまはこれも古くき物のうちぶゆ加へん女は心地あしさふや。細やゝおる手もて額を押へて。ぢつむきたる面ふほつれ髪のふりのゝりて。影さへもいとどやつれしさまおり男は年の程いかばのり歟の頭は今様の斬髪ぶて。姿は痩肉の方とぞ思はる。折々頭の後邊の方を手もて押へもし拙さもをるは腦に病のある人ぶやあらん。やゝありて女に向ひて。ひそゝにうちさゝやく声をきけむ。

(男)今いつたやうな譯だからネ。おまへゞ郵便をよこした事もまるきり知らないで居た所が先月學校へ歸ッてから。倉瀬があづかッて居さといつて渡ーてくれたので見たけれども今更返辭でもおかからうッとサア斯いへば不實るやうだが。とても今いつさ情實ゆゑ。末の約束をし

たのらツて果して其通りに遂られるか又ハ遂られぬ分らぬのにな
まおゝ返辭をして未練とまをより○それも親父さへあつかりして居
てやたかゞ一二年の事だといつて互ふ辛抱も出来やうけれど何をい
ふ母も近頃でハ親父もめつさりと弱ツたやうざし内ハ相かはらず火
の車でいまだふ借金がぬけない位さ。たしが卒業をしさのらツても
まづ二三年の其間ハ中々思ふやうにおる所か自分の志も腰もまげて
官員にでもおらなをりやア。とても立行らんと思ツて居るんさ。おまお
う互に未練氣をだして。末乃約束おぞした所が到底苦勞種がまを計で
容易ふ樂ををる譯ふハいかんヨ最も六七年たつうちにハ
そりやア自分極の考だからキツトさうなるゝさうならんゝ今のら
定められた話でなし。殊ふハ身躰が弱いのらして。どういふ思ひ寄らん
病氣にかゝツて中途で倒るのも去れおい譯をきやこれやを考へる



ト。斷然今のうちにされておくのがわたしハ免もあれおまへの爲ふハ。
イヽエサ。ほんたうにおまへの爲だヨ。斯いふとをのしいやうざが東京
の藝者多しといへども氣象がおまへわどをつのりして居て男の魂の
ある女ハ恐らく。イヽヤたとへ官員にやア氣ふ入らおいでもさつとう
きしがる人がのるんさ。早くいゝ旦那に身代任せて。脫籍ておまふのが
おまへの德だ。おまへハ親父への義理を思ツて。エサア。わたしへ乃義理
ナニ。實のえをらんがたとへ六年でも七年でもにたしの都合がよくな
るまで藝妓でおーとわしてやつて見るとさも手輕さうにいふけれど
もそりやアおまへにも似合ハん話だよしんハ養母でも假親でもお常
さんへの義理があるゝら。あの婆さんハつまる所おまへが厄介にしな
くちやアおらん。その老母ハどうでもよい自分ばかりがサアそりやえ
とよりおまへだから。其邊ふぬけをハなからふけれど。六七年と口でこ

ういへいざ實際とおツて見ると存外長くツて。もどうしくツて辛抱ができたものでやアないまるさり逢むずまいいられぬゆゑ月ふ一度とか二度三度とおらおいうちまる度重おりまた人の口ふかゝるゐ必定むかしゐ隨分情郎が其情婦と約束して。五年十年とたつた後まる夫婦まるツたといふ例もあるが今時そのやうな者ゐをくおいよしあつたとおた所がたつた一個の女に迷ツて。其と夫婦まるならふといふのを。只一心まる目的にしまそれで勉強をまるやうおゐ奴おら。到底益またつ人間ぢやアおいかういふと何だの不實らしいが何も水くさい不實おゐうちを。まるざ〳〵好んでゐ爲やアおないが人間万事まるり燈籠時宜まよつてゐ浮世の義理でまゝまおらないゐ事んあらうさ中廓の一件じやアおまへもまるさしもいくらか面目をそこねたからまるたしゐうういふ氣象だから。實まくやしくツて爲やうがおいがさうのといつて無暗矢鱈ふ敵手ふしかへしを爲やうと思へば却ツて恥の上塗同樣馬鹿氣さツた話だゐら。ジツト三四年辛抱してまづ一身をたてた上で。あの吉住とかいふ奴まいさつと返報をまる積さおまへゐわたしよりがあの事でゐ。

此時女ゐうるみ戸ふて

（女）わたしゐあの時の事ゐ思ふと。まことふにくやしくツておりませんヨ。てがみでさう申してあげた通りあの辨吉の意地まるめがあれのゐわたしを敵まして。陰でいろ〳〵とまるさしの事をいさんざわるくばがしいひまをので。お客ゐざん〳〵と減ツて來るしお茶屋ももとのやうに騁れてくれぢ家母さんまあア愚痴をいゐれる。あおたからゐ音信ゐふし。わたしやくやしくツくならおかツたゐら斯おりやアモウ破れゐぶれ。思ふさま辨吉めを叩き下して。赤ツ恥をかゝせてやらうと。胸をすツゐり極さけれど此家の姉さんふ意見をいれれて成程辨吉さんと

けんくゎををぢばつまりハ粲さんの名の出るもとぞと。あなたのお身の上を思ふばかしで。十分こツちゑ理ハあるゞれど。じつと我慢をして居ましたゞち人の風評も七十五日こツちで念を入れて勤めるうちに。段々新らしい得意客もでき。古い客人もいつとおく。呼聘でくゐるやゞゑなりましたが。サアさうおツて見る日ゐなると。今まで肝癪の蟲でとて。やつと押へつけておらへて居さ。未練がどうしても我慢ができぞ。あんまり水くさいと心で怨んで。度々郵便をあげやうゑも。學校の首尾がどうかと思へば。それが心配であげられもせぞいつろ駒込へと氣にむやれどどの面さげておとつさんゐと思へば出掛てゆく義勢もなく。よもや御病氣じやアあるまいの丹端書の一本も下さらおいとハあんまり水くさいとたつた一個で。どれてばつかし居ましたうち段々からだがわるくおツて。坐敷へ出る譯ゑもいのおいから。多田さんの御世話ゑおツて。藥をたべたのも一月あまり。あたしが休業て居ました間もこの姉さんハあげ〳〵来て。おまへハ氣が勝て居過るので。自分でいろいろな苦勞をこさへて。求めて病氣ゐもなるれだろ。チツと心持を大きくし。余計お心配をしおいがよいうれぼど粲さんが戀しけてやア。隨分逢せてもやらふけゑど。又時宜ゐよりやア旦那へえおーて。添ハれるやうゐもーてやらうゞ。今ハ粲さんゑ御修行中ゆゑ。今といふ譯ゑハとてもゆうぬ。せめて三四年ハ辛抱して。心で逢て別ゑて居て。末のたのしみを俟がよい繪入新聞で名高うつた若鹿のよし江のはおしを御覽。しがおい藝妓といひおがらも今の薄情の世の中ゑハ。實ゑめづらしい眞實ものの。それなれむころ末を遂て。岩桐といふ情人と。一所ゑなつたといふじやアおいか。三年我慢をする氣があるおら。きつと二三日ゑ逢せてやる。必ぞクヨ〳〵思ふなとて。過日れつーやつたが約束通りゑ。今

夜このやう丹思ひがけなく。お目にかゝる事ができやうとは。ちつとも思はない事でしさうらわたしやあんまりの嬉しさ丹。御話申をことも後や先で。怨もいえおいで居りますものを。貴方はあんまりな不實おお心ゑむらく別れて居た間まどういふいろ處ができたかしらねど。お爲ごかしで斷緣やうとは。そりや水くさいにも程がある。否おら否と○もし見棄てさへ下さらなけりやア。六斗でもまた十年でもわたしが心はかえりませんイヽエ餘所外の藝者衆の心持はどうゝ志りませんが變人藝妓といはれるまで人まも笑れたわたしの氣象はあなたも御存知でありながら。今さらいやだ斷緣やうとは。ろりや水くさいあんまりでを。をうちかみつゝあおたがいつうかおつしやつた丹藝妓を女房まもるもよけれど第一素人の手業を志らねば世間体が見ツともない。ひまが。あつさら時々まは縫物讀書もおらふがよい。何處へ緣附くにしさ所が。そまが第一まは入用ざど。おいひなすツたの拭忘れおいで。閑暇さへある と机まは向ツて内密で手習を勉強しさを畢衣から袷綿入もゞ此節でにどゝやら斯やら袴えいがゝなり丹仕立るのもゝんなあなさへの心中だて。なんだねんねへれやうな事とと。嘸御笑ひでありませうがまさしや種々まは考へるとおんやうまくやしくツてなりませんをたむけてさしうつむく

男は志ばし黙然まて手をこまぬきて居たりしが。

（男）だん〳〵のおまへの真實けつしておろそうまは思はおいが。おまへゑ今一度氣を靜めてよツく後先を考へて御覽わさしは無ても知ての通り妙まは偏屈な氣象ざゝら。たゞへ如何やうな事があつても是が餘所外の女であつたら今までこれほどまも迷ひゑせず。恥ものゝないでをんだであらうが何云不思議の因緣だ。おまへとらくむどんおり ○自

分で自分の氣がまらぬまで。度々友達まも嘲弄たりまたハ意見された事もあれど。どうしても思ひされぞ今日が今日までハ迷ツて居たが。これでハ行末乃爲まもならねば。第一親父への不孝だと思ツて。斷然決心して緣を斷つと。己まの親父へハ誓ツたものを。今更其舌も乾らぬ間丹。其志をひつくりかへしくよしんぞ行末の約束ぞうして。當分逢むないました所がおまへと斷緣おいで居た時ハ。親父ハ勿論友人丹も。質まも面目がおい譯ゆゑ。

(女)サアろれが貴方の勝手ばつのし。斷緣やうといふはなしおんぞハ。またしまも露ほども志ないで居て。自分獨りでだーぬけまも。

(男)サア。さういたれて見た時まハ。わさーが惡いまハ違いないが。是も自分の身の爲のみぢやアない。おまへの行末が氣の毒ゆゑ。

(女)イヽエ。そんお逃口ハ聞ません。おんらといふとお爲ごうしで○わたしやどのやうお苦勞をしても○よしんば十年が二十年でも。俟て居る積で居りまをものを。そりやあなた水くさいぬぐひだしておきがほのなみだを



男ハ又ぬやさーうつむき。愁然とせし体なりしが志ばらくして声をたげまし。

(男)おまへもあんまり解らんたやアないの常ハこんおでもないと思ツさが。これほどいふ事が解らんたアアヽ何だ子。わたーを困らせて遊ぶつもりだ子。イヽエ。さうまも相違ない。なる程今更まも斷緣るといふのハ。實まも不實まやア違ひないが行末の爲まやア換られおい。わらざア如何なとをるがいヽや。今斷緣てさへ呉まるなれば。行末までも妹と思ツて。交際もできるまをだけまど。それができなけりやア是迄だヨ勝手丹どうでもをるがいまど。ぞうせ名が汚れたおれのこつた。何をされたツて

園田の妾宅より小町田丸の次に逢ふ

かまふもんかモウおれア歸るヨ（トいひつゝ已ふ）
女ゝあたてゝ押とめながら覺えぞワツとなかんとせしが手拭かみしめ身
をふるたし。
（女）粲さん〇解らんとゝあおたの事御修行おさる其間ゴ呼んで下さ
いといふのじやなー。六年でも七年でも辛抱しまをといひまものを
〇何も慾徳拭目あてゐーて。斯なツたといふ中じやアおし貴方も大概
わたしの心を〇考へれば考へるゐど飛鳥山がうらめしい〇あおたゝ
邪見ゴどうあつても。（トすがる女をつれづれと面うち守り）
悄然として燈火がうつを姿もうはかゴて男女の影おがら。おまめのぞし
てあたれおり。
男ゝ覺えぞ勝まづき。泣臥し居さる女の背を撫擦んとしてまた突立。
（男）話ゴうゝれて氣がつのおんだが。お常さんゝどうしたのゝ大層歸
家が遲いやうだゴたしゝ心を決したゝら何とも勝手ゴ思案としなも
ーお常さんが歸ツたおら宜しくいつて。ト
いひたなーたゝんとしたる襖の外。
（女の声）粲さん。大さゴ遲るたりまーたヲヤ〳〵。まうお歸校なさるの。
男ゝ不意ゴ驚圦ながら答をおさんをる折しも下女ど思ーき一個の女臺
所からかけて来て（下女）モシあなた。旦那さまがいらツしやいまーた（女）
ヲヤ。今晩ゝ土曜日でないのゴどうしてお出おをツたらう。早くあちらへラ
ンプをつけて（下女）あちらのランプゝ火屋がございません（女）ヲヤまた
おまへが碎ーたのかへ。ナゼ碎ーたおら碎しさやうゴ。わたーゴ斷をいゝな
いんだヨ。こんお時ゴ困るじやアおいか（女）それじやア此行燈代お持おを
ツて（女）それでも此處が（男）イヽエ。今直ゴ歸り升から「折から彼方の一
間の中ゴて。旦那ど思し圦男の声。旦）ヲイ清やあゝりを早く（常）ハイ〳〵

只今ろきじゃア直ぐとりかへますから清や。のけていつて買ツてむいでヨ。二個も一度期ぐこゑをんだもの爲やうがおいじゃないかネエ「此間ぐあゝて、下婢が行燈ひさげていでやゝば。後に一面暗の幕えかしと共ぐ影坊師も消にく跡おくなりおけり

## 第十四回

近眼遠らを駒込の温泉ぐ再度の間違

社會どかさくるしくいふときおいどうやら政治くさくきこゆれども浮世とやゑらげをいひゅゆれば。おのずと色氣づきて聞ゆるぞのし。されば英吉利の姿ジェホットも浮世の目的に談笑なり。ふざゝて遊ぶのが眼目じゃなど、變ぐ粋めかしをいたれたりさ。いらさま面倒なる政治の社會の野暮ぶ堅くるしい宗教社會にズツトらけはおゑた別物として。浮世に浮世として考ふれば男女老若相集まり。たがひふ冗言をたゝきあひて。樂しミ戯るゝが道かもしきねど其樂遊ふもさまゝゝあり彼乃色戀乃道おんども此世の中にに必用おる一箇の要素でそろ盤外思案の外おる戀あるゆゑ地球も正則り運轉して。おもしろをかしく立行けども。もし結婚が一變してたゞふ生殖の手段とおらん歟。それこそ所謂百發百中男女相逢へばゝおらぎ子をうみ。麻ルサス頻死。溪レイ仰天狹き世界に數年ぐして。錐おつたてん餘地なきまで。人口增加するに保証おり。こに犬猫の特例らら。師納推理したけふの屁理屈ちと匆卒なる斷定なきども。兎角色好むに人情にや玉の盃底所數高い脚のついた高脚杯をさゝげくさむるゝ痛さうお髯ツ面を雛妓の芳頬ぐもりつけなからノウ小ちやらおのしい年齡になんぼほどじや可憐お容貌をしちよるれう。今曉わいどもと同伴して。猫本へ一所ふ来ゞなんのかんのと託宣する英雄豪傑ゲ多い世の中雙びが國の坊さんでえ今おら二ツ三ツ首をふりく原の艸稿をばなゝーたかもしれぞ遮莫色事ぞも階級あゑ假ぐ其種

類を分て見まゝば上の戀中の戀及び下の戀乃三種なるべし意氣相投じて相愛をる此等ゝ所謂上の戀ゝて莉莚自の那以那ゝ於る。（浮世士傳の中ゝあり）其一例とも見るべきあり。こゝ其人の氣韻の高妃と其稟性の非凡なるとを景慕するより起れる戀ゝて御前上等上々吉戀乃坐頭ともいふべきものなり。所謂中の戀ゝ之ゝつぐ男女互ゝ相愛して生くゝ人力車ゝ相乗なし死ーてゝ蓮臺ゝて一所ゝをゝならふ事なら比翼の鳥儘ゝあるなら連理の枝妾ゝ時々ゝ呼吸器となツて郎が浮氣ゝある口元を塞がん僕ゝ折々ゝ帯留と變じて卿が解やをき下紐を押へん郎と一所ゝ暮をなら憂を深山の詫住居ぬひ針仕事糸ぐるま苦ー死賤の手業をも何のいとしい郎じやも死んでもゝたしが女房じや。といつたやうなえの即ち是なり世間見ぞのわかうどたち血氣剛らしい面をしてもとゝく迷ふのゝ此戀なり。およそ中の戀ゝ溺るゝ輩ゝ意氣相合ふと主とせをして。まづ其色をめづるがゆゑゝはじめゝ其情切なれども一月二月相むつみて。其意氣合たざるを覺るに至ゝば。自然相思ふの情も薄らぎ其交情冷淡ゝく成行く事あり。英の詩人彌ルトン翁ゝ曠前空後の英才ありしが血氣定まらざる其頃ふゝ一旦の痴情を得ゝ忍ばず。詰らぬ苦勞種を蒔かゝたりき。詢や中の戀といへるものゝ開けざる世の遺弊ゝて。るくいへば獸類流義たゞ其皮相の毛並を愛しく相交るものと何ぞ選ばん。哀々野蠻とうちゐえ々む。どうやら岡燒の風聽めゝども作者ゝ性来無垢潔白秋毫も其樣ゝある野心ゝなし。たゞ我國の少年男女がみだりゝ結婚の儀を素りて浮氣で結婚離縁るをゝいたく歎かゝしく思へむなり々り合縁奇縁ゝ見てゝからぎゝあかるを梅屋舗の腰掛ゝて一寸見た計で縁談沙汰なんと無雜作ゝある夫婦ゝあらぎゝや又戀初るといふ事をむ見初るとゝふ言葉をもてわからせるといふも奇態ゝ習慣かゝゝまゝ我國の男女ゝ互ゝ相慕ふゝ名のをふして其實其人をゝ慕ふゝあらで其蛾眉其是眸其容姿其腰附をゝ慕へ

るおり豈あさましき極ならずや。さてこそ夫婦となりたる後ふに終始家の内ゴ仇浪騒ぎて結局におさだまりの三行半巡査の御厄介もよくある事ゑりたゞし此手の野合夫婦に西洋ゴも仕入高ゲ多いと見え如ンソン翁ゲ寓言の中ゴて。Marriage has many pains but celibacy has no pleasures 〔女房持には苦労多く獨身者ゴは樂なし〕と穿ち見にて述べられたり「妻といふものこそ男の持まじきものなれとい。やたりこの邊から推測したコロルラリイ〔條論〕かも圖られねどこは是浮氣ものゝ獨斷論作者はヒヤ〳〵といいたぬ積さりとて細君の味ゑら祢ば。匆卒團扇をあぶらぬまど土俵ふのゐんだ妙齡諸君は豆ゴ氣合を見やつま〳〵。ヨイショどつこい。配偶たまへや。扨尚一ツは下の戀なりこは肉体の快樂をば。唯專一丹主眼として男女相慕ふ情をいふ。をなたち鳥獸の欲こまなり五圓金を與へてニヤア〳〵を聘を嘗の旦那一圓金を投じてゴロンバタン拭待つ田舍紳士は些中無たいひぶんかれども。やたり此クラス〔中間〕のお仁ゴこそ是等は淺ましき下戀也。

ゑ葛山の背丘も鼻つまさて是ハア柄杪ゴゝらぬとて。タマイキ。吐くびやアぞ思たれ侍る。扨たや思たぬ長談義いざや本文の戀のおたなし。上中及び下戀のうちいづれに之を列をべき歟そは讀人乃評判〳〵

○草津とし云ば其氣も名も高紀。其本元の藥湯をこゝにうつしてみつや町駒込のお丹人のおりたる温泉あて夏は納涼秋は菊見遊散をゐぬる出養生客あし繁き宿おがら時しも十月中旬の事として團子坂の造菊もまだ開園ゴはおらざる程ゆゑこの温泉も靜ゴして浴場は例の如く込合へども皆湯錢並の客人のみ。座敷ゴ通るは最稀おり。五六人の女郎手を束ねて。ぼんやり客俟の誰彼時たちまちガラ〳〵ツとひきこみしは。さしか丹二人乘の人力車根津の廓からの流丸おらをば。權君御持參の高帽子。と女中はてん〳〵丹浮立つゝ貯蓄のイラツシヤイを惜氣もおく異韻一齊ゐさらけだして急ぎいで

むゝへ〻二度吃驚男は純然さる山だし書生坐敷へ通るだけが殊勝かれど。とても若干の御祝義などよは。お氣が附さうもない客種年齢は二十一二。色は淺黒く鼻は低く。三十二相の三分の二は首尾よくかけ損じた百人並世間ふありふれたる馱面附ふり衣服は結城歟糸織歟シツケの糸が所々〻殘りて。此頃仕立ましたどうです子。イヨがらもないお廢止おさい南漢といふ袷衣ふり。帶は麁價の本博多まだ角帶にはなきぬと見え貝の口まは得も結ばず。娼妓の寢巻姿よろしくといふ塩梅ゴグル〳〵巻まして挾みたるもをかし。一個はチヨツドふめる白首女年比やう〳〵丹十五ばかり。尚眉揚は下ざまどもある一種の能力のみは格外發達せし事と見えて。物のいひぶり腰のふりかさ。お半跣足といふお轉婆娘衣服はあやしのペンペラもの。綿仙の半纏で藏くれてゐからも帶は赤い唐縮緬や紫繻子の腰台せ。だらしなく下げたる端をあー蒲んだとは女中の惡評矢場ゥ二階歟おどさゝやく聲耳にむい迚ど恬然の平左涵落乎として男まはしたがひ輿の客座敷へ打通りぬ、(女中)よく被入おやいまし只今お浴衣を(客の娘)今夜は御厄介丹なるんですからどうぞ其積で(女中)ハイ〳〵。それではお夜食は(男)おまへ何くふうえいもんをさういふて遣るがえいぞ(客の娘)それじやアあのウロ取と子。うして何かうま煮と子。それからエート何まは爲やうか(男)マアうまでえいワ。あとからまたさういへばえいワ(女中)それではお口取丹うまにを御二個前陪酒はどういたしませう(男)酒も要は(女中)畏りましたてゆく男は娘の方ふ向ひて得意さうふニコ〳〵しながら(男)よう今夜は親父さんが出していこしたのう(娘)アゝいゝ加減な虚言を吐いて子。やつとぬけだして來たが子。といひながら生意氣ふ小欽で前髪とチヨイとつゝき(娘)モウ〳〵アタイは内の頑ちやんまやアくさ〳〵はるワ。一晩でもうちをあけるとほんとまやうまーくツておらないのヨ嗚呼また淡路町へかへりた

くなつた(男)さうゝそれゝえい具合じやツさのう。おかし誰ゝ知ツちよる奴ゝ逢はんければえいが(娘)菊の頃ゞやアなゝ誰がこんお庭へくるもんかネアタイゝ氣をもんだせいゝ何だか汗がでたワ早くお湯へ這入たい子エ(男)なんぜ浴衣をもてこんのおアをりから女中がゆかたをもちきたる両人てむやくきものをぬぎてゆかたをひつかける(女中)お大切おものゝお預り申しませう(男)そんおらこれをあづかツくれ(娘)アタイノ衣服もお序ゝをつかりあづかつておくんおさいな(女中)ハイ〳〵。とゝひおがら腹の中でゝなんだこんお柳原をイケ洒落つくな女だと思ひおがらそしらぬ顔で娘の衣裳拭一寸たゝえてもちゆくおぞあとふつゞさて男も娘もやがて浴堂へとおもむ紀げり。

○天下無双の正直者時を違ぬ親玉とて(The sun; the most punctual servant of all works)時刻とおれむ用捨もなく日ゝ西山ゑ入相の黙火ごろとおりける折俄ゝ人力車の音のまびすくガラ〳〵ガラ〳〵とひきこみたるゝこれこそ擬ひもおき上等客たしかゑ根津のら来た客と思しく藝妓三四人。としま二三人茶丁前ゝ進み茶主後より来る旦那ゝおんでも田舎の紳士其数ゝ正ゝ三四人おり「お客さまツとの車夫の掛聲心得さりと此方の女中ゝ被入いで受とめされどゝ不意の襲撃ゑ狼狽騒ぎて(女中)チヨイト三いさんお二階ですか(三)ナニ下乃方がよからうヨ(女中)ハイ〳〵只今御案内。マアこちらへ。とあはてふためき。お茶よお浴衣よとたちさわぎて景氣づきされば陽氣づ充て已ゑひきだしたる藝者の三味線酒おく肴もでぬ其前から。いくら飲あきたる上とゝいへちと急進おるジヤンジヤカ妓さ此客もまた愛人歟さらぎゝ夕暮ゝこんお場所へおんでのこ〳〵と乗だすべきはてさて人心ゝさまゞ〳〵おるかお。

○そきゝ扨おき以前の男ゝ彼のあやゝおなる娘と共ゑ浴あきする場所ゝおもむきつゝ男女互ゑ立別れて。浴衣とぬぎをてかさたらおる衣服戸棚ゑ

いれんとせしとき男は覺えず其隣の戸棚の中よりさがりたりし浴衣より其手をふれたりしが浴衣はたちまちまべり落てあやしやカチヤンといふ音してけり。されど男は心も着のみや落たる浴衣を拾ひあげてもとの所へおさめおきつ。いろぎ湯あがらんとかけてる爪先おぼえず躓とむものこそあれ。遥に陸湯のあとりへとびさり再びカチヤンと音してけり。男も此時心附さてあゐ心得ずと思ひながら浴衣の中よりいでたる物とは今尚心のつのざりしの其儘尋ぬる心もおくやがて板の間へもゝいりぬ。此時一個の男あり漸くお掃除がで充しと見え婆さまがお賓頭盧を撫まもといふ容体あり。むやみゐ手拭をふりまはして頭や面はいふもさらへ四肢五体をふ充了りてやつとこさと上をゝ人品衣裳を着てからはいざまらねど。裸体姿を評まる時あは實は one cent(一二錢)の價値もなければ車夫だう職師だか。はた官員だか。すこしもまのらぬ花繡あるもれはあは其職師たるを知る腕と脚とのたくましきものはれ其車やたるをゝる。而してハの守のお鬚あるをまれ官員とぞ心得さり。あのゐは此男は花繡おく。また八字鬚もあらざるゆゑ。さては車やのといはんとすまども腕のさくましゑ不似あひなる色の白さのが一ツの不審さゞ雪乃如く白さまあらねど他の車夫はくらぶるときまは幾らの白ツ不さ肌の色あり。扨は書生はやと又よく見るゐ此人頗るの近眼らしく。始終眠るがごとき細き目試して。探り足ゐて歩むありさま。按摩の杖おきまも騒騒たり。此壮年あして此病あり。書生はあらぬしてそも何ぞやトいつたやうゐ少年あり。扨探り〳〵何がり来りて此方の端から一二三四と衣服戸棚乃順序を數へて。第四番目の戸棚の中をりやがて階浴衣をとりいだしつまた越中の事ありをとりいだして式のごとくに畳め了りて。尚棚の中をのきさぐりて。何やら不審さうゐ見附して。頭あ手拭を巻附ゐがらまづ浴衣をきて小首をうさぶけ。暫時思案まる体なりし

が再び棚の中ゑ手をさゝいれ殘る隈なく撫まわしてまた不審さうな兒附なし首を三ツ四ツふりまわして浴衣をふるへども別條おしもなくだ困て果た顏色まて(男)コリヤ不審じゃ。どうも奇怪ぢゃたしゝゑいれちよイたまて相違ないが。コリヤ實ま困却じゃワイ。どうも奇じゃ。實ま希代じゃ。ハテ如何しつらう。と面色かへ。頻ゑ當惑せる書生ゝ樣子ゑ番堂ま居る此家の細君さすがに捨てもおゝれぬゆゑ。此方ま向ひて書生ゑ聲かけ(妻)モシあなさ。何ゝおゝくしなさいましさゝ(書)ヲウ眼鏡がなうおツたワイ(妻)なんでをとへお眼鏡でをとへ(ト云ひながら堂を下りて來て)何處ま お置おさいました(書)此四番目の戸棚の中へ浴衣と一處ゑ入といたがのう(妻)奇代ですよ子エ。おめしゝゝ(書)浴衣ゝおれじゃ(妻)それじゃアお眼鏡ばかりがアノございませんので(書)さうぢゃ眼鏡ばゝしじゃ。それもおアえい。眼鏡でゝおいワ。鐵の欄のついさ飽末なもんぢゃが(妻)そま じゃアさつとそこいらゑございませう



ヨ(書)ウンニヤ。この邊まゝないワイ(妻)もしゃお座敷じゃアありませんう。(書)ウンニヤ。這入る前までゝゝうけちよツたのら(妻)それぢゃアなくおる。筈ゝ(書)おい道理じゃがの字。もしゃ其邊ゑ落てゝおらんゝ(妻)奇代で ほ子エ。といひおがら其邊まんべんおく見廻せどもうまかと思ふ物もなけまば(妻)ほんとにお氣の毒さまでをネエ戸棚へお入なをツたま相違ゝご ざいませんゝ(書)眼鏡がなウてゝ一歩もあるゝれんからのう湯まむいるまでゝ除んぢゃツたが。浴衣の上ゑのせて。攢鼻禪と一所ま。たしゝゑこゝへ(妻)もしゃ入所が違ひゝいたしませんゝ(書)ウンニヤ四番目と覺えちよるが(妻)それでゝゝお取れおをツたのてゝございますまいか(書)ナニイそおゑな事ゝ決しておい。新らしゝて三十錢程の眼鏡じゃ盜んでも何もおらんそれま欄ゝ損じちよるし玉も右の方ゝ碎ちよるのを紙でをつけておいた位じゃ。但し近眼の泥棒がえいツさかもおれん(妻)ヲホ、、、(書)を

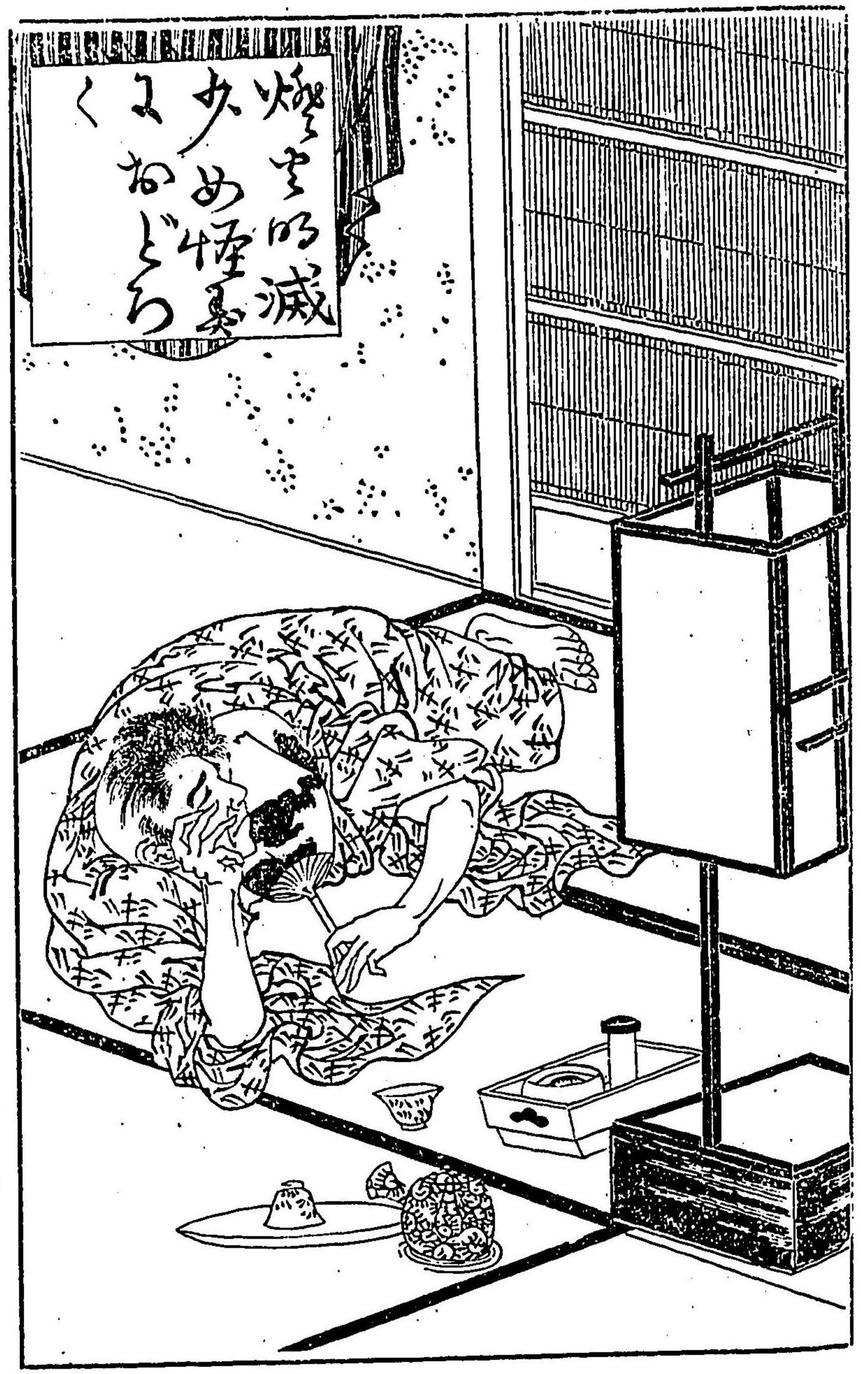
かーういおいぞ。眼鏡がおゞてゐ歸られんワイ。此度詮義おてくまイ(妻)ハ、イ〳〵畏諾りまーた今直ぐさがしますのらマア與へいらツおやツて(書)そまでゐ頼んだぞ。なうてゐ實ゑ困るぞ。えいの早ふ探索して(妻)さつとこの邊ゑございませうから(書)それでゐえいか。頼んだぞ(妻)ハイ〳〵

○書生ゐ眼鏡とおくせーゥば。ゐとんど盲目もよろしくまて。一尺さ先さへも見えゥぬれど根が負おしきの氣象おるゑやズント平氣なる顔色まて習むじめの女禮式。三舎を避るといふ足の運びで。廊下をそろ〳〵あゆみ出さて。やうやく客座敷の縁側までゐまづ別條おくたどりつきしが。何處がおのが部屋であつたる事やら。眼を細うして見回せども。皆同じやうゐ結構おるゆゑ。容易ゐ判然とゐ見分がたく。暫時停立つゝ躊躇せしが。さりとておのが部屋ゐ何處ざなどゝ。女中ゐ尋ねるのも不見識おり殊ゑゐいろがおい取込最中女中を呼たてるも氣の毒ざトとんだ所で氣がねをおて。さしか三番目の部屋おらんと。まづうろ〳〵と入く見るゐ爰ゐ行燈をつけ置たるが。油が盡ざむとおりしと見え。數行虞氏の涙四面楚歌乃聲と後へ附句した死明滅あかり。たゞさへ近眼ゐて目がきゥぬゑ。さりとゐ胴慾おる行燈めと。口の中まてつぶやきながらそつと燈心をゥゝげあげて。まづ其あたりを見回たまゑ。かなたゑ最前かけおきたる。おのが裕衣服かゝりてあり。其下ゑあるゐ帶おるべし。少し置どころが違ツて居れども。女中が置のへたるものぞと思へば書生ゐむゞめて安心して。覺えず吐息をゐつとつきて。頭ゑ巻たる手拭を取て。窓の闕ゑなげゥけおき。其儘そこゐ横ゑおりて(書)アゝ非道い目ゑあふたぞ。眼鏡をさがしざしてくれゝむえいが。それゐさろと。宮賀めゐ如何しをツたの。あれほど堅う約しちよいたのら。今まで来ん譯ゐない筈トやが。モウ何時じや歟。ハア。今鳴ちよるのゐヤア七時じや五時までといつちよいたゐコリヤまう来んゥおア。失敬お奴トや是非ゑ後からいくといひをツて。

ハヽアお豆をだましをつたお可愛さあまツて憎さにやうぬどすまるゥ見
をれイヤまた行燈が昏うおツたぞ○うれに眼鏡いどうたさ事じやか。女中
を呼んできいて見やうヲイ姐さんいちざ(ト手をうちあらして女中をよべどもをくのざしきのをほ
こちかけちがひてこいのふんおいをもつう
こうすれどもいをおしいのてへんーもせす(書)ヲイ姐さん糞ウまたまつていきをる。
えいワ。まうちつと寝て居てやれイてなまかぶつ〳〵つぶやきゐる
○かゝるところへ以前の娘い此時漸く湯あをし果て。沼衣ゞゝよて座敷へ
歸りつ。障子ひらきて入らんとして(娘)ヲヤなんさるあゝりざらう子エ須
河さんモウおあがんなをツたのたぎのまゝよてねいりたる体おり(娘)チヨイと風
ひさまをツさ。ぶんと丹此人い氣樂お人だヨツ。といひおがら。障子をハタと
さてきりつゝ一足二足をゝみ入る。此時たふきて我ちをいまゞた、ねせ
も以前の書生いむゞめてハツト心附きく。扨い座敷を遠へしのと驚きあた
くゝふりかへるを娘いたちまち見て仰天(娘)アレ引と一聲たてたるのを



如何おるゆゑ手や正氣をうしおひ。ウンと其まゝのけそつたる意外の珍事
ま書生い仰天手をうちたゝきて女中を呼び水よ藥とたちさえげば女中い
如何おる譯とも去らねど客の娘が乃けぞりたれて齒をくひちばりし不
思議のありさま只事ならぞと周章狼狽まづありあえせ乃寶丹をば渡せば
書生い受取つゝ盞うち開きていそがえしく(書)ヲイおまい些と手を借く。
ヲイ抱いちよつてくれイヲイえいゝおれが飲ませるから(女中)マア如何
おをツたんでを子エ。お可愛さうヨアラあおた不可ませんそりやア盞の方
でをヨ(書)ヤこりや藥がえいらん成程これい盞の方じや。こちらが藥かツ
イ眼が見えんもんじやのら。ト去よせいいぼうたんのいれものをむそのまゝ娘のロまあてがひむやみまぼうたんをつきこみつゝサア水ゞや
〳〵早う水と飲ませんければいのん。(女中)サア〳〵。おひや(書)どこじや
(女中)アレサこれでをヨ(書)どれゞや〳〵。ヤしまふた。こぼした〳〵
(女中)アラまア。鼎盃へ手を突込んでさ。チヨイト三さん(書)えいワ。こゞれ


煙草の滅
少め極楽
くゝ
なごら

たゝを吸ふワどすでゝ口うつしゃや。えいぞ〳〵（云おのら疊へこぼれたる水をよくみて娘の口へ口うつしまのます）（書）サアしめたゞ〳〵ヲヽイ引（女中）お名をお呼びおきいな子エ（書）名ハ志らんどゃ（女中）ヲヤ〳〵。あなたのお連さまどゃアおいの（書）ウンニヤ。おれの連でハおいワ。ヲヽイ引「此中娘もやう〳〵ま息ば吹返ま（女中）モシお氣をおつゝりとなさいましサアおひやをもう一口（娘）アヽこハゥツた。ナニまうようございますワ（女中）全体如何なまツさんですへ（娘）ナニネ。今お湯からあがツてネ。座敷へえいらうとまると（書）ヲイ姐さん。こらへてくれ。氣の毒おことをしたおまがのう近眼でよく見えんもんどゃからツイ座敷を間違へてなア。平氣でこヽへ這入ツちよつた所へ（女中）ヲヤ〳〵ろまでハお座敷ゞ（書）ヲウおれが間違へたのじゃ（トいふりつく〳〵娘こし安心せしやうすなりしゞ）（娘）それふーてゝ不思議な事があるワ（女中）どうなまツたの（娘）さつきアタイが座敷へ這内らうとまるとネ向ふふ誰やら寢て居るのを行燈が消ゥヽツて居たもんざのら。連の人だらうと思ツちまツて。さつさと這入らうとした時ゐ子。フツと其人が寢がへり志たのさ。さうすると子〇アヽ思ひだまと今でもこハいワ（女中）エ（娘）其人ハ後にも面ゞあるのさ（女中）うそをお吐なさいな（娘）イヽエネんとうだヨ。後の面ハ此方ゴよく似て居たヨ（書）やつぱりおれじゃ（娘）エヽ（書）おまハおまいさんが這入ツて来た時ゐハ障子の方を背まして寝て居ツたじゃ。おまへさんゐ呼れてふりむいたのゞ真成の面じゃ（女中）エろれじゃアあなたハおゝ面が（娘）アレ引。やつむり二ツあるヨ（書）コレ〳〵馬鹿いふてハいゥんこれハ面でハないハ。ソラよく見イ胎毒でむげて居るんどゃ（トうつむきて見せる両へハつく〳〵見て）（女中）ヲヤ〳〵まるで藥カあきれている（娘）ヲヤ〳〵。さうでしたゥさうとハ知らおいもんだのら。アタイ―〇ふんとコ馬鹿氣さがたまらないワ。ハヽヽヽ（女中）でしさゥ。ハヽヽヽ「書生ハ間が惡くてたまらねどもつきあ

ひま(書)アハヽヽヽ。

○之より先此娘の連の男ハ何ゝ思ふ由のありしと見え。わざと湯の中のらあがらをして出て見てハまた引込引こんで見をハまさたちいで。かくすること一時間むかり。やツと浴衣をきて四下を見廻し。そろ〳〵我座敷へ歸て来しが。此爲躰ふうちおどろさろうのまゝ部屋ろうちまかけいりしが。彼ろはげあたまと面見あハせ。ハツト當感せし様子なりしが。思ひきつて度胸をきえ(男)ヤ君ハ桐山君でハおいか「書生ハ目を細くして眉をおかめ。奇妙變的おる容貌をしてこおたを見やり(桐)さういふ聲ハ須河のア(須)イエス〔然り〕君ハどうしくこゝふ居るの(桐)あのおきハのアノおきハあおんじや。國の者と一所に来さ。おぬしハまた今時分どうして来たか(須)我輩ろアあのおふさ。親類と一所ふ来さ(桐)さうろアろきでハ此ガルゝ〔娘〕ハおぬしのリレイション〔おんるい〕ろ(須)ウン。さうじや(桐)此ガルゝと二個さりか(須)ウン。ウンニヤ。あのおんじや。まだあとのら来るんじや(桐)さうのおぬしハ未のへらんのおきハおアア非道い失策をしてなア(須)どうしさのじや(桐)おれハ眼鏡を失ふてなア。と部屋を取違へし一伍一什ならぴよいまがたの騒動まで。かハつまんでものがたれば。須河も覺えをふさいだして。一同大笑とおりたりしが。桐山ハ再び須河ヨ向むて。もし別段ふ用がおくば。共ヨ歸校せよとをゝむるにぞ。須河ハたなだ困り果て。あとより親類の者ゲ来れば今から歸る事能はをとて。いろ〳〵ヨことわれども桐山ハいつなきかをおれハ眼の玉をおくしたゆゑ到底ひとりふくハ宵目も同様一歩もあるさざをおとできねば。おぬしが用向のほむ頃まで隣の坐敷ヨて俟をるべし。先刻國の者と同伴して来たといふたのハ真赤な偽なり實ハ宮賀のスモール〔小弟〕とこゝ迄て諸談ををる約束おりしが。今尚来らざる處を見れば。宮賀ハ到底来おいと思はる用濟次第に同伴してくれ遅ふなツくもうまは

ぬ上でとまり頼めいもてあまして。須河ゝ失望恨なければ怪しの娘をゆ
れ社したる事の始終を氣取られてゝいよ〳〵以て不都合あり。一旦こゝを
あちいでたる後又出直して来るとそよけれとひろうよ思案を定めしかば。
伴ひ来りしお豊を呼出し此グリハマの次第を語りて。我紙入をも渡しおき
てやかて再び座敷に歸りつさて桐山を急がしたてゝ。竟に温泉をばさちい
でしが其後の事ゝ作者もしらぬ。嗚呼好事多魔佳期易阻須河の失望いかは
うぞや。まことよお氣の毒さま見たようなもなしよなん。

## 第十五回

旧人を尋ぬる新聞紙の廣告ゆ
見鳥ゆくりなく由縁の人を知る

○アレサ源どんマア待ネエといふよ(源)ナニサ出来ざア出来ねいでもい
ゝの。その代りにやアお氣の毒ざが(女)マアサおいらのいふとを聞ねい
ふといふゆ何もおめへの請求を聞うねいといふうどやアないゞ尚おめへ



考へても見子エを成るう成らねいかも解ら……(源)だからヨ。できおけ
りやアいゝといふことヨ。都合がわるゝりやアそれでもといいはねエ(女)
サアさういえれちやア困るじやないかおめへざつて知ツてるだらうどや
アおいか。此節ゝお客もみんな狡猾になりやアがつて。容易ゆ請求おんざア
聞いて呉れをさうく〳〵加へて此不景氣でもつて。坐敷なんざア二三日。お茶
のシキつゝけといふ始末だうら(源)コウお秀どん。たのむぜ。どやうだんい
つちやアいけねい。おやりアおめへの泣言の聽聞ゝやア来ねいぜ。都合ゞで
さなきやアそれまでのこツた。もんべ立聞した一件ゝ河竹ゆ賣ツてやつて
も乃至ゝ新聞屋へくれてやつても。いくらか種ゝやアなりさうだが。まだそ
れよりかおれの方ゝやア。チツト耳たぶな當りがあるから(秀)だからヨ。聞
かねいといやアしないのさ。どうともはるうら待ネエおといふのヨ今ゝ花
冠が歸ツて来たるら何とゝの相談をきめた上で。イゝエサ坐敷被を曲たつて

もおめへのいふ位にどうとも成るうち。マアこゝへすゑんかせいヨ。

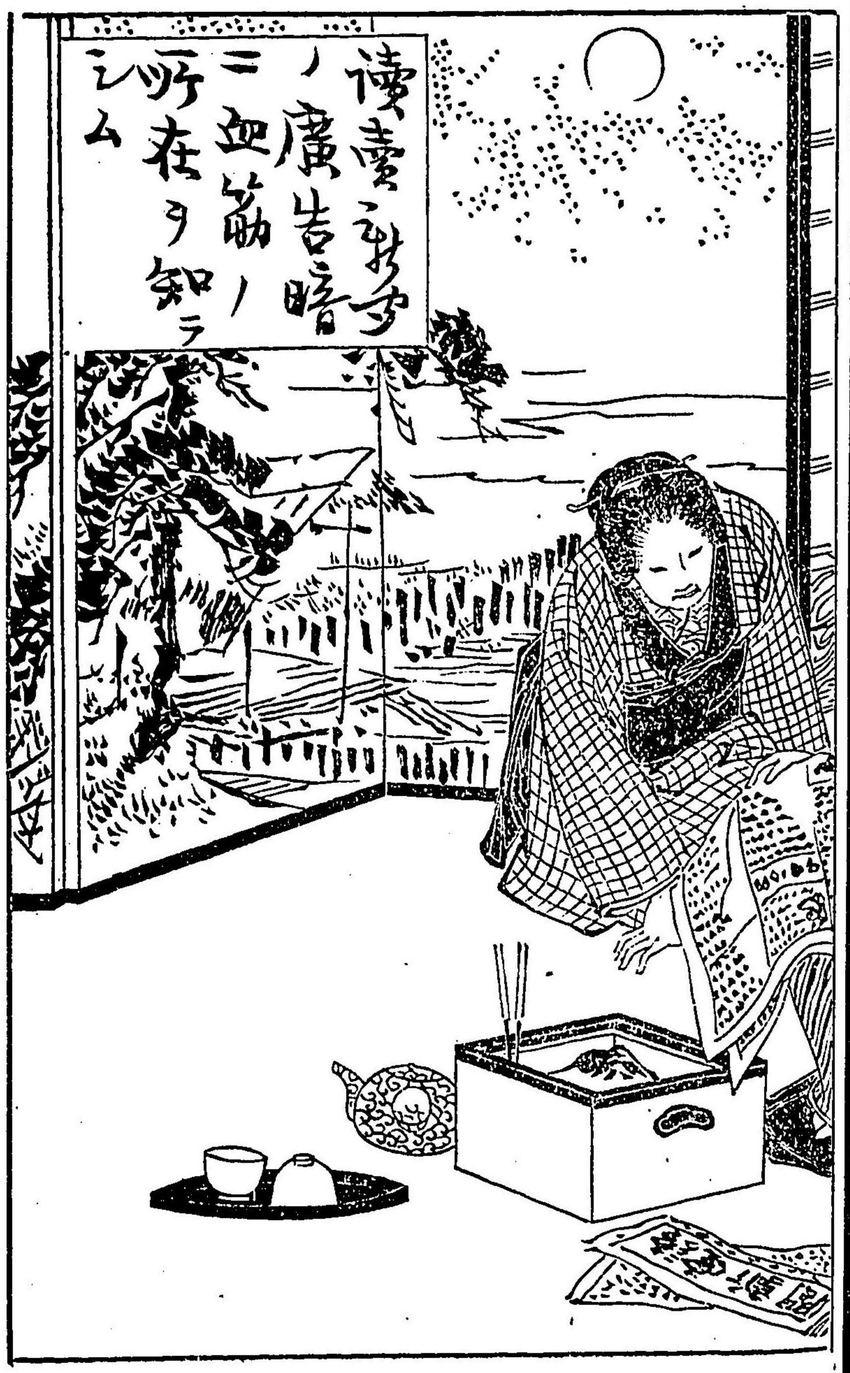
小言ながら丹言ひあらそう二個の男女に何者にて。そもまた此處に何處と問にんゑ讀人已ゑ推したまゑんこに是角海老の樓上にて彼の兒鳥が坐敷おるが一個にをなゑち梳攏お秀男に此樓の中どんにて其名を源とか呼なしたる斗北四十を六ツ七ツも越えたりと見ゆる新髪あたま其爭論の事の由に何事おらん歟しりがたけれど源にしきりにうちゑらだちて。おざむるお秀を耳ゑもおけを袖を拂ツて去らんとするをお秀がやうやくおし留めて。火鉢のわとりへをわらせつゝ。何やらひそ〳〵うち私語く其声きに成て低かるおら。話の仔細を知る由おし此日にちやうど撿査日ゑて。娼妓に大方打揃ひて。先刻撿査場へいでゆきたるが尚歸り来ぬも多うるゆゑ。畫が夜おる貸坐敷の樓上樓下人氣勢おく二階へあがる上艸履のバタリ〳〵の声ゑ和して。ベタリ〳〵と樓丁が長き廊下を雑巾ゑて押拭ふ音の聞ゆるのゑ畫あそびの客もあらざるゑやゝいづれの坐敷も靜寂として。三味の音色などに絶えて聞えを已丹撿査場よりぬけがけして歸り来りたりし娼妓もあまど も多くに昨晩の疲勞丹得堪へで。色氣えなれし容体ふて眠を貪るも尠のら ず。さにあれ人心のさま〳〵なる同じ泥水を飲みおがらも其たちふるまひ一様おらねど或に上の間丹閉籠りて。唐机ゑ面づえつ圧高尾薄雲の跡を慕ひく。生ゑ風雅めかす娼妓あれば屏風一面ゑたてめぐらして。ひそうに不格好おる手つきをして頻丹木綿物状ひねくてまいをに風をとらふといふためにあらで。自身ゑ素人被を縫ふゑおありける。搗出しこしらへんと罵るあれど。おしるこたべたいヨとうめくもあり千狀万態いろ〳〵おれども多くに船底の枕をうつざて。横丹たちさるが多さぞのしつかれさこうとにいむおがらも中ふに愛素もつきはつべき滅天倒地寐像もあり辛氣辛苦のくの字形可愛々々のIの字形に。まだしも女らしき寐像おれども大の字尤の字な

んどの如ぢゃ。えと〳〵論外ともいふべきなり。うつぶしたる豆どん尻度外れま巨大く。其様凸の字もよろしく。何わむきたる梳攏嗚脚まつをぐゐおつたて。真正面より望むときゃM といふ字よも似たらんゃし。之と要するま十中八九ゃ。翩々蝶ま化ーて黒甜鄉裡に。遠くうかきいでしことゃ見えて。とのく樓中がゑづかなる中ゑ。ひそ〳〵語るお秀が言葉も多少戸の外ゐ洩れさるをば今かいつまんてかきゑるせば。左のされ〳〵ゐる言葉ゐして如何なる意味ぞともまこのらねども。讀人とゐしなへま考へたまはゃ或ゃ罪もなきゆんでの膝をば。ゑさとうちたまふ事えあるべし。

（秀）ダヨ。……イヤ。エ子。中々承知しゐいんさ。今時おめへそんゐ馬鹿正直なことをいつてゃたまるもんゃ子。……アヤ。さうさ。中々〇式ゃあるといふはなしさ。ゑゃしネ其人ゃ書生だからえなしたツてゐのらねいンさ。エ。だゃらさ其おやぢさんといふのへ。……ウンさうさ。しりまかけやつて見やうといふんだが。エ。……アヤ。こちらまやア居ゐいといふえむゐーヨ。エ。ゐまへ。エ。……ヘヤイ。あのゃんゐらあのおまへが。……ヨヤ〳〵さたいだネエ。さうしまあの子ゃ今どこま居るんだへ。ゐまへ死んだかどうしたかゐのらんとへヨヤ〳〵こりやア不思議だ。……アハ。さうさ。そりやア。おめへの胸しだいさ。……さうとも〳〵外まやアおめへ。此譯をしてつる者ゃありやアーゐいやネ。……アま承知だヨ。夕方ゐおいでな。さうさ六時過でおくちやアだめだヨ。それじやアたのむヨ。まだ甘くゆくのどうだか二番目の筋書がさまらねへから。何へ大丈夫だツて。さう子エ。まあ〳〵外れねい積だがネそれじやアこれだけでいゃネ　とゆびをはちぼんだーて見せる　アま承知だヨ六時すぎだヨまはりまこゑ　さうーて子源どん例の深川一件ゃおめへふたのんざヨ承知だらう子〇ヨヤ〳〵おいらんが歸ツて来さやうだ。なんざまた内の

餓鬼がいやあさう〳〵しくかけて来やアがるろきじやアろの積でア、。

折柄むた〳〵いさせさと廊下おらしてかけくるお常（常）お秀さん客さまでもヨアハ〳〵〳〵（秀）おんだ子イケさう〳〵しい。お客さまがゐんでをかしい（常）だつてもネ吉住さんが朝つむらのろふざけて〳〵（秀）ナニ吉さんがおいでなをツたツて。トいふうち兒鳥も歸りきたる。後ゝり微醉機嫌で入来るゝ。例の吉住潔なり貌鳥ゝあゝ究屈だといひながら上の間へ走り入りて。撿査被乃帶をとく（秀）ヲヤ吉さんお早うございまをネ、よツくお出なさいまし。何樓のおあまりでをへ（吉）おんだ今時分死たのがゐるいか（常）あるいからお歸んおさゐヨトいひながら。後から走りかゝりて。帽子と煙艸入をむつたくる（吉）すぬどろぼう引（常兒）ハゝゝゝゝ（兒）ゐんとうましやうがおゐヨ。此ひきやくゝ（吉）なんだひきやくだ。ヘン憚おがら天下の郵便夫だ。天下の眠をさまさんもの乃公を除いてまた何處まかある（常）チンプンカンプン。チンプンカン。アハ〳〵〳〵（吉）うぬおまを馬鹿にをるお。此めらう。トいひながら。お常とおぐらうとをる。お常ゝ廊下へ逃出を吉住ゝつゞいて追かけやうとほるを兒鳥がひきをえながら（兒）エゝいちう〳〵しい人だ子エ。マア下丹お出おちいな。おまへちん昨夕ゝ何樓へいきました。サア白狀をしておしまいなちい。チヨイとお秀どんお聞ヨ今子撿査場から歸ツて来ると子。清どんをつきてぼんやりしゐ兒をして（吉）ナニ今朝岸の邊と一所ま淺草で飲んで。今こちらへ来ばかーだ（兒）ヘゝろのお手々ゝゐべませんヨウゐしかふ大文字へいつた歸りかと思ふヨ（秀）ヲヤ〳〵吉さん。まゐですかへ。サア今日ゝゆるしませんヨ。ろれ丹清どんも清どんだヨ思ひツきりゐゝ死おろーてやらなけやりア「折から廊下をバタバタ〳〵（常）おいらん新聞がきまーたヨ。トおげこむ新聞（吉）ヤ生意氣丹繪


讀書ニ耽ル
ノ廣告暗
ニ血筋ノ
所在ヲ知ラ
シム

のおい新聞をとるうちがをかしい讀賣新聞さアイヤ二素人ぢみるぢやアないか。トいひながら新聞をとりあげる(秀)そんな事でいひわけをごまかそうと思つておいらんおぐツてれあげなさいヨ(吉)それよやア及びません(見)よくらーい子エ。ビシヤン(吉)アイタヽヽあいた見たさいとびたつかばりヲイ〳〵一寸まつた〳〵暫時休戰條約だ。イヤアこゝお希代お廣告があるぞ(見)僞事をお吐きおさい(吉)うらこゝ丹(見)どこま〇そりやアなんの廣告でをへ(吉)なんだかこれから讀むどころだ。ハテナ妙お廣告だぞ(秀)御自分ひとりで承知して居ないで早く讀でおたかせおさいヨ(吉)さらばこれよりエ。ヘン讀み〇あげ引ますヨ。

静岡縣士族旧名
守山良右衛門妻　おかく
當時年齢廿七歳

女おそで
當時年齢三歳

右ノ者事明治元年五月上野戰爭ノ前夜不圖見失ヒ候儘今以テ行衛知レズ万一御心當ノ御仁有之候ハヾ何卒下名マデ御通知被成下度懇願致候或ハ兩人共存命致居ラヌ哉モ難圖候ヘバ假令同人ニ面會ハ得致シ難ク候トモ其成行ヲ確定スルニ足ルベキ御報知ヲ賜ハリ候ニ於テハ相當ノ御禮可致候也

同

湯嶋梅園町〇〇番地
鈴代つね

(秀)ヲヤ一寸おゝせなさい(吉)ヲイ非道いなア。お客さまの御覽をすツて居らツしやるのをひつたくる奴があるもんか(秀)ヲヤ〳〵〳〵。いよ〳〵おいらん(見)あれかへ(秀)でをヨ〇一寸御覽おさいヨ。ホラ守山子守山で

せう(兒)さう子エ。それじゃアいよ〳〵うれしいネエといひつゝ兒鳥ハ莞爾と笑ふ。(吉)おんだ〳〵。ろの守山が何したト(秀)ハヽヽヽ。何でえないんでをヨ(吉)ハヽアおいらんの情人と言筋か(秀)ハヽヽヽ。人ですヨ。上野の戰れ時分に二十七れお神さんのある仁でをかゝちやうどおいらんヨ似つこらしい。ハヽヽヽ。情人でせうヨ。子エおいらん(吉)ヘン。さう利口ふやアされたくないヨ。朝ツばらから登樓ツくるとどうせかういふ目ゑあふのだ。岸の邊があちらで待てるだらう。おりやア今から歸るとほるぞ(兒)ヲヤ何でを歸んなさるの(吉)何でもいゝやおきが勝手で歸るんだ(秀)おかしいじや有ませんかどうなをツたの(吉)ナニどうでえないのだたゞ歸るのだ(秀)ヲヤ〳〵變じやありませんか。今おあつらへがきまさア子。ト二個がゑさりヨ不審がりく呆氣ヨとられてとゞむきども。吉住ハいツかなきかず。手早く帽子を頭ヨかぶりてはや廊下へと飛いだすをお秀ハあハてゝ追



をがりて。引留めんとて悶着せり。もと吉住といへる男ハさはめて嫉ぶかき性あるゆゑ。些細の事をも聞ひがめて。知恵がついた洋犬の子同樣むやみヨチン〳〵をしたがる質あり。久しく兒鳥の許へハ通ひて。多少あるくおく遇らきた事ゆゑ。自然足しげく通ふうちヨハいくらか花柳界の情ヨも通じて。例の持前の氣取だけハちのごろめつ切りと滅りたりしが。まだ生得の甚助ばかりハさはがヨ止をられぬ事と見えてお秀と兒鳥の話の樣子を少し變だと疑念を起して。ゐるひハ守山といふ男が内々情人か何のであるのでわざと其名前とのつぎだして聞によがしにおきの前で。斯くハ馬鹿ヨしていふのであらう其手ハたべぬ。ト邪推をおし歸る歸るとジヤ〳〵ばれども。其實歸りさくもないのと見えてわざと紙入れを忘れた手際ハ廊下で立留らむ寸法おるべし。お秀ハやう〳〵ヨ追をがりて(秀)お待おさいてつたら。マアおいでおさいヨ。晝日中おんでをを子エ(吉)なんでをたアなんだアヽしま

つた紙入れを忘れた。取てきてくれ(秀)サア紙入れをあゞますから。マア免も角もエヽお出おさいといふヨ「折からいでくる以前の源(源)ハ……
……吉住さん大層おはやうございまを子(秀)源どんわたしの悴ハ實ふあんむくでうわさでわんふ〳〵困りきるヨ今もネ外へもかうと思ツてだしぬゝふ歸らうとをるんだヨ呆れるへるゞやアおいうおめへ後ららおーておくれおゝさーが引張ツてつれてゆくうら(吉)馬鹿アおきを山車のおんぞだと思ツて居やがる(源)ハ……方々の藝妓衆が引張まをから。ふるわど山車うもしれませんヨ。ハ……

## 第十六回

黒紹の薄羽織の嫌分ふて

薄一のらぬ縁因をゑる守山と倉瀬の面談

守山事務所と筆太ふ山陽まがひの筆法ヨて書認めしハ自筆の掲札借屋ながらも玄關の構もさをがい・かをしき彼の友芳が假寓居社會ヨ出てまりやう〳〵ふ尚二月ハたゝねども實に優勝の時世とて才名早くたつか弓公事の鑑定訴訟の代言さしつめ引つめたのまるゝ事務の多忙ヨしばしだもやをらふ暇おりむひハ骨の折さるものなりけり興の一間をたちいづる主人守山友芳ハ以前ふかえる八字鬚やつとハの字程に生長たるをゞ頻ヨ指ヨく捻りおがら(友)イヤどうも倉瀬君定ヨ失敬を致しまーた大變ヨお待せ申して(倉)どうぞお分意なくどもをゞヨをんざいおことむヨおる僕ハいつまでゝんぞ候て居るから用とすまして呉たまへな(友)イヨ。もう大概了りましさ。如何でハ樂ふ居ちやア(倉)ナニ勝手ヨ膝を崩をからどうして不行儀ハ持前だものいつまで辛抱して居られるもんか遠州からお歸京と聞たから早速伺はうと思つたがツイ(友)よく今日ハ来て下すツた子エ實ふ君ヨハ久しぶりだネエ恰ど四ケ月むかりあはんやうだ尤も君むかりゞやアおい久しく學校の人達ヨハ逢はおいから閑暇があハたらと思つて居てもイヤどうも

事務多端で(倉)定めし多忙いだらうネエ。ときかし御商賣御繁昌ハ祝すべしだ。ハヽヽヽ(友)所謂艸卧儲の方さ此頃ハ學校の景況ハ如何でもなんだか風評ハ因ると擊劍が大變流行だといふじやアないか(倉)アヽ學校の氣風ハ君の在校の時分から見ると實ニ一大變動をパツス(經過)したヨ例の校長の諭告以來ハ政談ハめつきり衰頽しさが腕力ハよつぽど盛んニなつさ隨ツて妙な陋習が行はれて子(友)ヘヽイ妙な陋習とハ(倉ナニさ兎角麁暴ニ流れて(友)如何も仕方がないもんだネエ。一刹あれば一害あり歟。東京大學ハからつてBout race(競舟)でもはじめればいヽさうもりやア餘程違ウだらう人に情欲れある限ハ何か洩す道が無くてハ不可ない(倉)實ニさうだろまハさうと守山君今日參ツたのハ外でハないが。若ニ折入ツてお詫ハ來たがネ(友)何です。大層改まツた口上だネ(倉)イヽエ君ニ對してハ。實ニ汗顔ハ事だらけで何とも言譯の爲やうもないがこれを借用していつた儘で。今日まで失敬をしツちまツて。今更返却でもない譯だが(友)何でもかと思ツたら。ろんなボロ羽織を大切さうハ。いつでもお序で宜かツたものを(倉)さういハれると恥入る譯だが。實ハ子色々の困難があつて(友)ナニ其理由伏聞ニやア及ばん。僕が却ツてお氣の毒だ(倉)まだ此外ニも借用があるが(友)マアそんな事ハ廢止ハしたまへ二三ケ月むかり逢ハなこのツたうちニイヤニ義理堅くなツたどやないヽ(倉)ナニさういふ譯でもないが。ト云ひかけてゐんだかいきほひおくゝいつもほどほうきたゝぬハ。いぜりとてぎりをしらぬおやうでもおきやえ。おげやりのもちまへはもはぜさうおうまくらうニして。ほんさうするやえ。それやこれやニて。ふさぐとみえたり「守山ハもとよりして頗る keen eye(慧眼)人物あれば早くも倉瀬の腹を洞察しさきゲニ笑止なりと思ひしかば。ひそかニ臺所へ退きつゝ下女に酒肴の用意をさせまた元の座ハたち戻りて學問上の議論より轉じて時の政黨の得失を論じいつしヽ學校の物語ニうつり。繼原の風評。山村のはなし又ハ小町田の事ハどを

論じて。ちばらく時刻を移す程ふ下女ハ酒肴の用意を了りて。やうやく盃盤をもちいづれむ(友)サア〳〵倉瀬ゐんの有合せの不馳走といふんだ。一盃大さいので傾てくまたまへ。これでも君家内でこしらへた不馳走だヨ(倉)コリヤどうもトいつたツきりヨて一寸會釋して盃をうけとるおよそ書生界の人間ハ。政談ゑしくハ學術上の議論とかれむ。さながら竪板ふ水もよろしく滔々よどみなく演舌すれども。少〳〵世辭がヽツた事ヨなると。妙ヨ偸約ほる癖あるなア。それ交際ハ社會の大事ふり而して交際ハ挨拶より成る。挨拶を偸約するハ交際を偸約をると同じことなり。交際を偸約して世を渡るハどうやら人間の名ヨ背くかと思ハる。

○あだしごとハさておきつさても倉瀬蓮作ハ守山友芳と酒酌かハゐて。已に二三更ふ及びしらば。次第ヨ持前の氣象を伺らはし興ふ乘じてゐやへりたてる(倉)ヲイ守山君ヨ話して驚かせる事があるヨ(友)エ何だ(倉)此事ハ早速君に知らせやうと思ツて居たが子財政困難の一件のら君の御羽織を典じてゐまツて。持ツてくる事が出来ないもんだのら。ツイ〳〵詰までも爲おくれさが子其物語の筋といつむ實ヨ妙奇的烈珍不可思議だヨ(友)トいふのハ(倉)君白狀してゐまいたまへ(友)ヲヤ何を(倉)何狀ふどヽとゞ〻る可らぎツ。角海老樓の兒鳥といふプロを君ハいつの見た事があるだらう(友)ハヽヽヽ何をいふゥと思つたら。ハヽヽヽ馬鹿ふ事を(倉)馬鹿ふ事があるもんゥ其プロの身の上ヨ關して君ヨ密接ふる關係があるヨ(友)はてな。如何いふ關係だらう成程二年むかり前の事だが一度ある人丹引張られて。中廓へ遊ひヨいつた事があるが(倉)ヘヽイ君がいつたゥ(友)ハヽヽ。我輩がいつちやア可笑いのネ(倉)ナニ然ぢやアないが。それじやアいよいよ事實だネ(友)何が(倉)兒鳥がいつた事がさ(友)我輩の行たのハ一度ツ切だヨ(倉)それでいいよ〳〵疑團氷解(友)ヲイ〳〵一個で承知して居る

計ぐやア我輩へハ秋毫もわからん全体如何いふ譯ですか。ト友芳が不審がりて倉瀬の面狀うちまもれば倉瀬ハ覺えぞ小膝を進め(倉)をこゝノベル

〔小說〕めいた話說でぞがトこれより第五回第六回の經歷をかさり角海老の娼妓兒島が身の上の事に及ぶ。

○元兒島といへる女ハ如何なる素性の者なりやと問ふ。其實の父母ハたしのぶらぞ養父ハ往る年世を去りしが其名を水野貞七といひて三河豐橋在其ころは吉田と云の豪農なり。貞七が若かりし頃豐橋驛乃遊女と深く契りて父の勘當を受たりしがうくてえ其迷ひを得も悟らぞ竟ゐ其遊女を盗をいだして遠く江戸表へ出奔なゝ前後の辨へも内々ゝて夫婦氣取みて暮ゝ居りしが元來貯金の多かりしゐもあらねば程なく必至ゝ困窮ゐし貞七ハ或家ゝ下男となゝていりこみ女もある家の下女とハなりしが不幸の重なるべき時ゝやありゝん女ハ其比より病氣づきて梅毒ゐとゝくふをいだしても



たゞ奉公もなゝがたければ谷中三崎町の宿元へ引退りて病氣の療養をなをうちゝも貞七ハ獨り身を粉み碎きて其藥代ハいふも更ゐ二人が雜用ハ試もまかなひたりされども其辛苦の驗もゐく女ハまを〳〵病重りく竟ゐあへなくなりしかば貞七ハガツカリ力を落しくさゞさへ利發つかぬ田舍男が氣拔の如くゝゐりたるから今まで眼をかゞて使ひし主人もこれでハ用向が足らねばとく竟み貞七に暇を出しぬされば貞七ハ活計を失ひ空しく宿元み歸り來りて更ゝ奉公口求めしかど頓ゝハ住こむべき家なきのを妻ゲ野邊送の物入ゐんども大概宿元より借たりしを今尚支拂ふべき都合ゝゆかねむ心苦しき事限もなし。いつそ再び夜逃をゝ一先國元へ立戻りて父へ身の勘氣ハ詫てぞ見んいかゞをべきとさま〳〵ゝ思ひゐぞめる折しもあれ明治元年五月十五日俄ゝ上野の彰義隊と官軍の間ゝ戰爭起りて谷中あさりの市人等ハ上と下へと騷動ゐし其兵難と避んとして何ゐた

こなたと逃いづれば。貞七きつと思案を定めておい屈強乃事よぞある此混雑ゐ取紛れてひそのゐ出奔おまものおらば宿でもおかゝ惡くい思いじ親父の勘氣がゆりたる後世話よなりたる此人達よ詫もいふべく報ひもすべーさうぢや〳〵と心を定めつまづ宿元を馳出しが身ゐ一錢の貯なければ一先王子の近在なる知人許尋ねゆ充て。いくらう路用を借受けんと又一頻りふりいざせるさみだ身空をいとひなく狼狽まどふ老若伏搔ゐけ衝の け急がいしく谷中下まで走下りしい恰ど中堂の燒たる頃ゐて朝の五ツ前の時刻よやあり夕ん硝煙空よ漲て彈丸い霰と飛違ふ戰鬪最中の事なれど此處あたりも遠近に打合ふ刃れ音聞えて。すさまじなんどいふ計おー貞七い一生懸命とびくる彈丸を避くゞりく落ゆく前ゐ憫むべしさるべき武家の妻女とも思し充。二十五六の中年増が彈丸よやあたりし癪やおこりし齒をくひおばりて古木の根へ。伏ほのけざまよ倒れたる其傍ゐい女と思ー



き。三歳ばかりなる一個の女の子が。卧轉びつゝ泣さてゞ居る。思ひ懸なき有樣のいと無殘なるよ見をでしのね覺えず傍よ立寄りつゝ見ゐば婦人い頸のあたりを深く流丸に貫のゐて。已よ全く息絶えさり扶けて介抱したればとてまた蘇べくも見えざるゝら。南無阿彌陀佛と念ぢはてゝ心急くまゝ其儘よ去らんとせしが泣號びてまつたる女の子よ憫を催しさをがゐ棄てもさりがたさよ覺えゞ斤手ゐださ上たる折しもどつと人波うちて。彼方よりして逃くる落人鉄砲の音ちげしく聞えて丁々發失と打あふさる刃の音さへ聞えしのば。伏おやと計ようち驚き女の子を其處よなげいだして身を飜へして逃んとせしがまたもや泣ざを聲さゝてい再び起る惻隱心此儘よして打棄おきかば人ゐ踏れて殺されやせん憫然と思へば去かをが丹棄る丹忍びゞ搔充抱きて後の証據と件の女ゞ帶ゐさしたる短刀をば奪ふがごとくぬ充とりつゝ後をも見ゞして貞七い王子の方へと逃ゆきける。恁ゝ王子

の近在なる某しの許へいたりつさて事ゑの〳〵と物語りて。たゞめて女の子の姿と見るゝ身まゝ玉川漆とゝいふ單衣を被て平縫の紐長くしめたり。如何なる人の娘にやあらん。其容貌も上品ゝて愛らしきあと限もなしまた懐劍をも取でゝ見るゝ燒刃の可否ゝわゝらねどもさるべき業物と思しくして。黒地丹鱗形の紋つけたる塗鞘もまた並々ならぎさてゝ彌々由緒のある武家の妻子ぞと。心ゝ覺れど手懸りゝ只夫のみゝて外ゝ探索せん便もなければ今更其始末ゝ因じ果て由なき事をせしと後悔をまども元が慈悲深き性分なるゆゑ女の子がいつしかゝ馴れ慕ひて離れがてにをる樣と見れば置去りゝして去るゝも忍びぎ重荷丹小附とゝ思ひながらも竟ゝ將て行かんと心を定めて。其後五六日過たる頃王子の知人ゝゝ辭しゝとられて女の子をゝどころゝかさいだきて。本國三河へと旅立けり斯て故郷へ歸りて見れば父ゝ其年のむしめ世を去りて母のゑ病ゝうゝて在りゞと聞て胸まづ潰る〻事大方ならねど。さてあるべきゝ所ならざるゆゑ人を頼みて詫事なし。家ゝ入ることを許されしかば。それゝを全く心を改め頻ゝ家業に出精なし。一年三年と暮を中に母親ゝ次第丹病重りて。明治六七年の頃ありけん竟丹黄泉の客となりぬ其後或人の周旋ゝて新ゝ妻をさへゝ迎へしゝどよくよく不運なる性質と見にて。程なく其妻にも死別れつ。それのみならず連年の不作つゞきゝ田畑大方ゝ賣しろなし。借財なども次第丹ふにて。村丹も居丹くゝなりさりゝん家産田地をはじめとして。餘れる家財道具までも皆悉く賣盡して。三四百圓の金子を得てまたもや故郷をひそかゝぬゝいでことし十三才ゝなりたりける養女と共に出京ゐし。ゐばし一横濱ゝゝり住して一商法せん心ゝり。ゐが是又心ゝ思ふゝ任せぎ爲を事ゑなくて一月二月濱ゝ旅寐しくありける折しも俄丹西南の騒動起りて。物價の亂高下を生ぜし際こゝ〻ながらもをゝめられて些と米相場ゝ手と出せしが偶中歟一舉ゝし

て一二百圓儲けーのばはじめて生さる心地をおし是おの〳〵親と子が困究なさん緒ぞと神ならぬ身の悟るゝ由なくろ迄より後も機を圖りて時々相場ゝ手をだせしが流石丹運のよろりーゝや利得と所損と比較をれば概して儲が多ろりしかば益々相場をやめゝねつゝ一敗一勝一失一得おのく一二年を過る程ゝ今より三年さきつゝたより次第丹拍子がゝろくなりて爲る度なる度ゝ損失のみまたゝくひまゝ千圓あまりの財を空しくなゝさるのみの他ゝおびたゝしき負債を生じて首もまわらぬなりたるより余義なく女を吉原おる角海老樓へ出ゝせざさせ一時のおのぎをつけたりしがそれより後ゝ浮む瀬なく貧苦と辛苦ゝ身も衰へ病むこと半年あまゝゝして竟に空しくなりたりしゝ二年以前の事とゞ聞えー。恁て後ゝ兒鳥ゝ是地ゝ由緣の人を失ひたよりおゝ身となりしゝつけいや慕ゝしき真實の親の由緣のおつゝのしく明ても暮ても其事のみ心ゝ念じて居たりしゝど証據とおるゝ母親が最後ゝ殘せし短刀のミ其短刀の紋所ゝ外ゝ例を見し事なき六ツ鱗の紋章ゆゑ是をさよりゝ血筋の人ゝめぐり逢ゝんと此年頃心に念じて俟折から圖らぬ守山友芳が其友人に誘れて角海老樓ゝ登樓なし。此兒鳥を敵媚とし一夜の客となりたりしを心ともおく氣とつくきゞ不思議や羽織の紋所が彼乃短刀の紋ゝ似たりさてゝと思ひて尚よく見れば擬ふ方なゝ同紋おれば。ひそかゝ心ゝ喜びつゝ外に類なき此紋をゞ附たるゝらゝ此人おそいづれ因緣の人なるべし身の上話をうち明して尋ねて見むやと氣ゝむやれど流石初會の口重くてためらふ中に友芳ゝ急ぎ歸りの仕度とおて床ゝゑ入らず夜を胃おて止むるも聽かず歸りおゝむ手ゝ入る玉を落せおゝ如く今更おのれが手後れをゞ頻に後悔なしたりおがさて詮方もなき事おきゞ只其人のまさ来ん日を神や佛ゝ祈願をして俟てども何の音信なく。いつしか今年とおりたりしゝ倉瀬が不思議ゝ同じ紋の羽織を着し

て来りしかむこゝに再びさよりを得て其紋所の来歴より其持主の素姓をさへ迫りて倉瀬に問ふさゞせど倉瀬は元来守山とはさまで母親しき中おらねば委しき素姓をしる由おくさゞおぞろげに返答せしを兒鳥はいたく本意なく思ひて何卒守山友芳に今いちど登楼なさるゝや字傳へてくれと手紙をさへ倉瀬に渡して頼みしゝど例の万事に放縱なる氣質おるから其儘にて今日まで延引なしたりしがト語り了りて蓮作はかたへの酒盃とりあげつゝちよと其舌をぢうるわしたり。

## 第十七回　文意を文字通りにみや賀の兄弟

そゞろにコレラ病の報知におどろく

倉瀬は再び言葉をつぎ(倉)君には全体シスタア〔令妹〕があつたのか僕アそんな事ア聞うおいうらよもや偽言だらうと思ツて居たのさ手紙は即ちこゝに持参だ。マア兎も角も讀んで見たまへ。トいひつゝ懐中ゝきさぐりて。封じたまゝの手紙をいざしく守山の前にさしおけば。先刻よりして且怪しゝ且おどろきつゝ聞居さりし守山友芳は太息と共ゐ手紙ととりあげ封さりひらき走り讀をしく下にさしを紀(守)賢に思ゐ寄らんハンド〔傳手〕のらして思ひ掛らん事を聞くもんだ。成程君のおもおしで見りやアどうやら其女が妹のやうだが○若は此事件の来歴をば。まゞ御存知でおいからしく。定めし合點がいきまをまい。賢は斯々いふ次第で子。ト上野戰争の際母と妹とを見失ゐし其あらましを物語りて(守)かういふ来歴ゞある譯ですから。兄年新聞ゐも廣告して屢々其行衛を尋ねたが子到底無効だらうと斷念し。十分あきらめて居つた所輓近何事に感觸しさのゝちと旧弊めく話では有がフハザア〔おやぢ〕が不可思儀なる夢を見て子それも一度ならば珍らしくもおいが都合二度までも見たゝんだからさをゞ開化主義に化したといつてゝ根が旧幕府の人間だから親父はいろ〳〵に不審を起してたとへ

廣告損ゐおつてもいゝから。尚一度廣告をして見やうと俄ゑ我輩への相談さ。あんまり馬鹿氣さつた話だからしていろ〳〵止だていゝして見たものゝ實い我輩の心の中ゐも若しやと疑ふてる事があるやゐ無効ゐまでもやつて見やうと一昨日廣告をだした所さ(倉)へゝイ。それじやアいよ〳〵事實だ子。こいつア奇妙珍不可思儀だ。シテおとつさんの夢といふのゝ(守)そりやア斯々斯いふわけで。ト「第八回へ百松の條ゐて友定が任那ゑ語りたると同様の筋とものがたりて(守)さく此夢の事ゑつきてゝ任那も其消理を説明しゑ。おやぢを諭したといふ事でゑが勿論正夢のある筈ゝなし。偶中ゐゝ相違ないが。君のお話がゐんとであれば隨分不可思儀な事件じやアないか子倉瀬ゝ始終の様子を聞て頻毋呆れて居さりしがやゝあつてまたいふやう(倉)さゑ君の方ゐ心當があり。むゝふゑソウマツチ〔あれわど〕の証據があつてゝいよ〳〵兒島といふ女い君のシスタア弟相違ゝおい迂遠な廣告狀をるゑやア及ばん僕が一走りかけていつく。始終乃様子を知らせてきやうか(守)イゝエサさう匆卒ゐゝやられおいテ成程短刀の証據ゲあつてゝ。充分確正だとゝ思えれるが何分それツきりの Evidence〔証據〕じやアまだまだ安心が出来ない譯だがくしあんをして マア兎も角も園田の宅まで。この手段をしらせゑおいて(倉)園田といふア何者だ子(守)園田ゝ同縣の士族てゑが今じやア〇〇銀行の社員で我輩とゝ少々縁續きのものでゑあら今度の廣告の一件ゐ就ても專ら其男弟依頼ゐしさのき蓋し我輩の名義でゝてまさの廣告を出しかねたから園田の別宅の名義を借て子それで廣告をしましたのさ御覧なさい。ういふ風さトゝさへの新聞紙をくりかへしてアゝこゝゝゝいがアノなんです。下谷同朋町〇〇地鈴代常といふ名義でゝく。恰ど一昨日ゝらだしましたが(倉)エ鈴代常鈴代常といふ女いたゝこの小町田の(守)さうさ。よく若ゝ御存知だ子。もとゝ小町田のフハザア

の妾であつたが今年の春は事であつたゝ園田が引取ツて妾ふして子たしこの近々母本妻ふ直をとのいふ話どうして君はお常を御存じだ子(倉)ふまさ五六日前の晩母下谷の摩利支天へ小町田と二人でぶら〳〵義任いぬの川やれをきえこんだが其時廣小路で偶然其レディ(婦人)母出會したのさ。何か小町田へは内々まて話がしたそうな様子が見えたから要事まかこつけて外してあまつた(守)ハまアさくはう是からの事だと見えるが先刻園田がやつてさて子。いろ〳〵小町田の話があつたが(倉)エどふうい話か子寶ア一昨日から如何いふ理由か酷く小町田が欝ぎだーたヨ勿論近来は一体ま陰氣だが二三日は格別變だがろも〳〵原因がある譯の子(守)大まありです女さゝしうて牛賣損ふとは昔からいふ事だが兎角日本の婦人は困るヨ前後の得失を少しも見ないで。たゞ一旦の情ふ任せて。餘計な世話をしたり周旋をするから君ざからお話をするが寶ア一昨日の晩の事だが其お常といふレディ(婦人)が子。元が小町田とは別懇だし。ソラ小町田のラーブ(戀着)して居た。エーあの田の次といふ藝妓の爲まは所謂シスタアインラウ(義理ある姉)といふやうな關係でせう處で先達ての一件から小町田は斷然心を決して。サア内心はどうかしらんが兎ふ角陽面は縁を斷つてさつぱり顔をさへも見せんといふので例のシンガア(藝妓)は氣をもみだして。お常まは腹の中をあかしてたなしくしさりに周旋を頼んだ所がお常も去さりまは憫然がつて。どうがな工風をして粲爾を呼出し妹ふ逢したいと思つて居るうち不圖あの處でゆきあつたので(倉)ハハアろれだやア廣小路でゆきあつたのが(守)はなたち其時の事だらうヨ。それからお常が小町田ををしめて。それといはたぎ何とおしまは強て引張らうとした所が其日は小町田が堅く辭して竟母ゆかないで了ツたところが一昨日表向まは手紙をよこしまはざ〳〵小町田を招いたので何か用談でもあるなと思つて一昨日夕刻

からお常の處へ。小町田が一人で出懸てゆくと。お常は無て乃目論見と見へて例のシンガアを呼よせておいてだーぬけゝ小町田ゝ逢せたゞで(倉)へゝイそれやア然し惡氣でした譯じやアなからう(守)勿論さうさお常は全体情ぶかい性分であるの丹例のシンガアは小供の時から自分の真實の妹のやう丹大層可愛がつゝ育てたのだから非常ゝ其苦勞をsympathize〔同感〕して。是非とも小町田ゝあたしてやらうとゝんの實意と以てした事だが底がさ所謂婦人の仁だかへつて小町田の爲ゝもおらねば。田の次の苦勞種もまを譯だア子。(倉)何故。いゝじやアないか。別に不都合はないじやアないか。僕が見聞した所ゝ因ると。あの田の次といふ藝妓の如きは中々ホワイトしろうと、いふ事か　丹もめづらしい女だintellect〔知識〕も中等以上だし品行は元来端正だし。殊ゝ取まはしも温和な方だ彼なら小町田のワイフ〔妻〕ゝしたツて別段不都合はなからうじやアないか。僕の考ゞやア緣を斷つといふのが第一ゝからん。何の必要があつて緣をたつんだ。今までだまさまて居たといふ事か、又は先方ゝ不實があるとか或は先方が娼妓であるとか。何とか名譽上ゝ關係があるから是非なく緣をきるも當然の譯だが。何も其邊ゝ心配がなかけりやア斷然緣切たつは無要の話だ隨分勅奏の官員中ゝも藝妓を妻ゝしてる奴もあるじやアないか。總て德義のスタンダアド〔標準〕は當時の輿論で定まるものさ。何もゝざ〳〵と西洋の德義を東洋へ應用をするゝやア及むん。それゞどシンガアに實意がありやア。今といふ譯丹やアいくまいけれど行末ワイフゝしてしまふがいゝやネ兎角小町田は苦勞症だから些細な褒貶を意ゝ分して。快々鬱々として居るから僕ア自烈たくて笑止でたまらぬ已ゝ先達ての晩の如き。僕が小町田を強誘しく子。田の次は聘うとまでした位さ(守)ハヽヽさゝ君れやゝゝ丹世の中は渡りやすいが。實地はおか〳〵さういかんヨ輿論が德義の標準を定むるとい

君がいふまでもない事ざが。マア能く考へて見たまへヨ。たとへ我國の輿論だからとて。藝妓を上流丹ねおかないからして。藝妓をワイフにおどをる者があると。兎に角賞贊ねしない方だヨ。それも町人のなんかであてやア。人も彼是といいたないなれども。苟にも學者だとか博士だとか將た政治家とかいねれも身分で。身元もわからない藝妓のたぐひを。直に其ワイフにしたといへば。目ひき袖ひきして笑ふが人情よしやインテレクト〔智識〕が高からうが。其品行が正しからうがそこらね一寸見ふねるからぬから玉石混淆して非評ををるのが。我日本人の持前ざアネ。況んや田の次とかいふ女ねいつかも小町田丹聞いた所でねたしか拾ゐ子の親しまぢで。何の某の子ざかもわからぬ假親をこさえるのね容易な事だが。また翻へツて考へて見ると。其親元のしれないんぞね最も世間体のあるいたなしそれも小町田が出世をしく。充分身をたてた后であれば。またquestion〔論題〕がかはる譯ざが。まだ



社會へも出ざるうちから。藝妓を斯々だといはれるのね大に小町田の爲に取らざる所だ。我輩六七ケ月以前までね君と同じやうな考があつて女に貞實な心さへありやア。藝妓でも娼妓でもかまふことねない納れく妻ゐして可ありと思つて。已ゐ小町田ゐ意見ををるに。幾分か其主意をいつた事が何つたが。社會へでのけてから大ゐ悟つた。社會ね決して我友じやアない。ほとんど讐敵ともいふべき程我に薄情ゐえんだからして。たとへ少く小な事といへども我身に弱點を有して居るのね。蓋し氣のひける基本ゐなるから。處せ乃大障碍といたざるを得ぎだ。小町田の場合に就て考へて見たまへ例の芳原の一件ゐんざアをゐたち小町田のCrisis〔あぶない時〕さ。幸ひ新聞にも載せらまゐいで。曖昧糢糊の間ゐ風評が消えたね。實に小町田の幸福だけれどもあれが世の中にしられて見たまへどのくらゐ。小町田の將來のトいひかくる狡急ふうちくし(倉)マア待イヽエサマア待たまへ。君ね相らたら

も考へもぎるヨ兎角君の論ハ大業過るヨ人生概して五十年其五十年の其間ヨやア失策もあるし成功もあるし恥もかく名譽も得る七轉八起一榮一辱棺ヨ白布を蓋ふヨいたつく初て其名譽ゲ定まるんだたとへ二度や三度恥をゝこうが何のそれしきヨのまふもんか芳原の一件おんざア最ども取る丹足らんよしや新聞ヨ出されたからつて誰ゲ其事ヨ氣をとめるもんか人が氣を留るやうヨなりやア。すおいち我黨の本望だが中々社會ハ記臆がヨるいヨ一年そこいらえ月日が經過とをぐヨ前の事アわぼれてしまふ日本ハ全体便宜な國さ名譽も大業ヨハ得られぬ代りヨ辱も大げさにいかゝない國だヨたとへば一事業で失敗をしくも子二年か三年の經た后ヨ再びそろりツと頭をもちやげて何ゥ新事業ゐ手を出して。まんまと其事を仕遂げた時丹やア。唯ふ前辱と雪ぐばかりゥ大ゐ名譽を博し得べーだ日本ぢやアどんゐ事をしたからツても終身辱を受る氣遣ひハない況んや一小子の事なんざア。かにもそれゐどヨと心配して腦を惱ましヨやア及ばん事ざ。トしやべると守山おーとゞめて(守)ハゝゝ。また倉瀬君の激論ゲむじまつた。成程我輩ハ考へもぎるが君ハ極端ゐ走り過ぎて。兎角ラヂカル〔過激〕ヨるゥら困るテ結句君の論の主意といふハ榮辱相較べて見た時ヨるつて榮譽が多けれむそれでよいとどうやら其樣に聞えるが子。それじやア所謂任天主義で放縱手段といふものじやアないかで知るだけハ手段を講じくなるべく失敗を避るやう丹ゝ成るべく蹉躓をせぬやう丹して而して我ゴウル〔目的〕ヨ達するのが。もと世を渡るの定道じやアおいゥ我ヨ不利ゐりと知りて之を避けむ我ヨ害ありとゐりて之を採るハ。わざ〳〵荊棘を繁茂せて。前途を塞がんとすると一樣隨分べらがうゐ迂濶なむをしだ成程一旦ハ恥辱を受てえ後ふ名譽をさへ博し得れば之を雪ぐことも容易であらうが。もし其恥辱がゐかからうえのゐら。ままを〳〵其名譽が高ゐらうじやアない

ゥ已ゥ蒙つさ恥辱でありやア之を苦ゥもそるのも馬鹿氣た譯だがいまざ蒙らざる恥辱であるゥら之を避るのハ至當ゥ道理さ已ょ小町田が田の次と約して全く婚姻でもした譯なら何も彼是と妨げハせんが現在當人ゲ大ょ悟つて田の次と斷緣やうとして居るのをわざ〳〵横合から干渉をして再び双方の心と動かし緣を絆がせんと試るのハ誠ょ間違ツた次第じやアないゥ故ょ我輩ハ(倉)ヲツト待マア聞たまへ君ハ喋々と辯じるけきども。兎角獨斷の議論で不可ヨ榮辱相償ふとか何とかいふれハマア〳〵御道理とgrant(許諾)しといて。扨其次の議論の如きハ僕ア決して服さないヨ第一ロジック(論理)が間違ツて居るハ〳〵ゥい君ハ藝妓輩をワイフ(妻)ゥ丹をるのハ處世の障碍ょなる恥辱だといふが其理が判然とハょかつて居ないゥ然るょ其糢糊さる前提を掲げて直ゥ丹斷論を下さんとをるかち到底正論といハれまゥい譯だマアサ圖式ょして之を示せばトいひながら吸物膳の上へ箸ょ汁をつけて圖式をゥき(倉)ソラ斯ゥなるだらゥ。

(甲) 恥辱ハ身を立るの障碍ゥり

(乙) 藝妓をワイフゥもそるハ恥辱ゥり

(斷論)故ょ藝妓をワイフゥ丹するハ身を立るの障害ゥり

ネ斯ゥ三段法ゥ書いて見ると如何さま御尤と聞えるやうだが又倩々と考へて見ると此(乙)の文が頗る不明だ何故シンガアをワイフょするとdishonor(恥辱)ゥゥるのであるゥ此プルウフ(証明)が出來ないハ上ハ決して(守)ハ〳〵大變ゥ三段法ができさね其乙文の証明の如きハ已に先刻もいつた箸ざが尚一度いつて見やうと。トいふ折間の襖と開きて書生と覺しき一個の男が(書生)先生(守)何ですす子(書生)御親父さまが只今御着京ょなりました(守)エ親父が參りまーたゥアノこ〳〵へ(書生)ハイ新橋ゥら直ょお出ゥゥりましたさうで(守)そりやア存外ょ早ゥつた只今直に參り

まをのらアノ戸田氏生なるべしヨさうおつしやつて奥の六畳へお通しおをつて(書)ハイ〳〵長話ましさト書生ハ襖をさてきりて起てゆく倉瀬ハ守山ヨ對ひ(倉)おとつさんが御出京おされさんゝ子(守)ハイ。何でも色々家計上の都合があつくフハザアを呼迎へる積丹しまーく(倉)じやア何ですよ。まるでお轉居の都合で(守)さやうさ兎も角も今年中にハ悉皆移轉うといふ考へでもからそれ故フハザアと呼寄せましさが尤も今度の出京乃理由ハ專ら先刻の妹の一義で(倉)成成。さうでもかそれにやア色々御相談があるませう僕アもう退堂と爲やう(守)マア待さまへ其シスタアの一件じやア。或ハ君乃手を勞しおゝれバならんもしれんー且ハフハザアヨもあつてくれたまへ。純たる天保度れ人間だから逢つても面白くハおからうゝ思ども頗る書生風の氣象だから。却ツて我輩より氣ハ若いヨ決して氣のつまる老爺じやないからマア兎も角も逢つてくれたまへ。シカシ一寸失禮してまづ挨拶をーて来ませう。トいひつゝえた〳〵と手を鳴らせむ。書生ハふたゝび襖をひらゝて。手伏つかへつゝ面さしいだを(守)アノ尾田木さんお銚子をのへて子。そして何か食る肴を(倉)モウ僕アー澤山です僕の爲なし廢止たまへ(守)マアいゝヨ。悠然やりさまへ○それじやア一寸失禮○お銚子を早くなるべく熱いのがいゝヨと万事ぬけ目なく世話をやゝて。やがて彼方へいでゆきゝり。

○後ハ倉瀬ハたゝ一個ぼんやりとして坐り居しゞ。酒も漸く飲あゝたるヨ。先刻よりの贊議論でいくらの話が理ヨ沈さて。醉も次第に醒たるゆゑ。まを〳〵体屈ヨ困りたて、一分一日の思ひをして主人の出来ると待てをれど。俄ヨ急要務のでさしと見え。書生が銚子を持參しおがら其辭をいひなどハ。いつそ歸らんゝと心ヨ思へど主人に沙汰おしヨ立出んゝ。あんまり書生風ヨ過るといたれん。ゝ。今暫く待て居んとそろ〳〵立上りて床の間丹近

寄り偽物の山陽の半切を詠えつ。また仰むいて額を見れば。こいつは真物の鐵舟居士おり。軸も額も見了りて。其筆法をさへに諳ぶたまど。主人は此時まで出ても来らぬ。倉瀬は五ツ六ツ欠伸をして。うたへの小窓をあけて見れば前は横町の往来まて。稀々まに人も通るさまおり。天下の尤物でも通行かしと心で戯に念ぶおがら。ふつと目を開きて。向ふを見まば何の語らひつゝ歩きくるは正しくおのが塾の學友なる宮賀兄弟まをありける也。倉瀬は急がはしく顔さしいだして(倉)ヲイ〳〵宮賀ヲイ何處へ也くか。ト呼かけらまて匡は驚き(匡)ヲヤ倉瀬君の。妙お處へ来まゐる子(倉)ナニ妙お所な事があるもんの。こゝア守山れ事務所だア「宮賀の弟透は一寸倉瀬まに會釋をして(透)さうだ〳〵。こゝは守山君の處だ(匡)さうの。僕アちつともおらなうつた(倉)全体何處へゆくんざ(匡)君も大方尚おるまい子。繼原の病氣は(倉)エ繼原が病氣だつて。如何したんだ僕ア久しく繼原を尋ねなかつたが



(匡)僕も子。ちつとえおらなうつたが子今日外田の處へ手紙がきたのさ其手紙を見た所が野猪とう何とうを食ツたれがあたつてそれで虎レラ病まのゝツたといふ(倉)エ。虎レラだつて真實のい、加減お虚嘘ざらう(透)それでも確まろう書いてあつたヨ。子エ阿兄(匡)アゝ正ふさう書てあつたヨ山村ふも傳染したとさ。僕ア山村はフレンド(友人)ドやアおいが繼原は同縣の友人だのら一寸尋ねたいト思つて居るんだが虎レラじやア少々閉口したヨ。(透)手紙は外田宛で来て居るんだが外田が叔母さんの宅へ歸ツて居るうら今持つていつて遣つて来たのさ。(倉)外田は其端書を讀んで何といつた子(匡)ナニ外田は留主だつた「倉瀬は窓の闕ふ願とのせて暫し不審さうに考へ居しが。やゝあつて匡に向ひ(倉)ヲイ宮賀をのしいドやアないか何う君ア讀違やアおいの。能く考へて見たまへ虎レラ病まか、ツた者が平氣で下宿屋まに居る譯もなしまた手紙をかく譯もなしさおかし其端

書は代筆か(医)いゝエ。繼原の自筆だ(倉)それでいいよ〳〵虚喝だ〳〵全体何と書いてあつたか(透)コウツト。あゝおんとか書いてあつたツけ(医)エーと。たしゝ斯だつたらう○前略誠ふ面目もおさ次第おがら例の輕そつみ前後のわきまへもなく無暗に野猪食ひし報いてきをん。兩人共ゴ枕をおらべく。一種のコレラ病ゴ罹り了んぬ乞ふ速ゴ来てもくへ。子エ。ブラザア(おとうと)たしゝ斯だつたネエ「倉瀬は覺えを吹いだーて(倉)ハゝゝゝ。なんだべらぼうな。君達アそれをほんとゴしたのゝ真成のコレラだと思つさのか(透)エ。おぜ。ワイルド、ボウア(野猪)をくつて食傷したと書いてあるどやアないか(倉)ハゝゝゝ。君達アゐんたうゴ坊ちやんだおア。野猪くつた報といふ事をおらんか。それはネい、事をした報といふ事さ。一種のコレラ病ゴかゝツたとは些と六かしい洒落ではあるが。財布の腹下しといふ心で金がおくなつたといふんだらう。どうざうきに相違ないぜトいひつゝアハ〳〵と打笑へば医はさをが ゴ間のあるさうゴ。覺えず顔の色を真赤ゴせーがやう〳〵ゴ打笑ひて(医)僕も子。さゞだらうかを思つたをれどえ。あんまり文章が真地目ら一いからえしやゐんとかと誤解したんさこいつアほんとゴ大笑おだアハゝゝゝ。ゝゝト三人が異口同音に打笑は倉瀬は向ふを打見やをて(倉)ヲイ〳〵宮賀一寸見るべーアハゝゝゝ(医)なんだ〳〵(倉)あそこへコレラ病がやつて来たぜアハゝゝゝ(透)ヤ成程繼原君がきた〳〵(医)ヲヤ〳〵風評をもりやア影だヲイ〳〵繼原ア。

○繼原は只一人今しも此巷路へ入来りをたちまち三人と面見合せ(繼)ヤ。これは倉瀬君久ーく御疎濶こゝは全体だれの宅だ子(倉)守山の宅さ今ネ君ゴ就て奇談があつたぜ(医)ヲイ〳〵倉瀬モウ其話は御免だ〳〵(倉)ハゝゝゝ。何の藏をゴやア及ぢんこつた。あゝいふ間違ひは隨分あるよ中々愛嬌ゴある話だ(繼)ヲイ〳〵どういふ理屈ざネ(倉)二階のら眼藥をやア

あいが窓から其面をだしてのまたむくじやアちつとをしツかい種だけれど仕方がない語ツてきのせんうツけたまもきツドヽンヲヒュヒュウツ(繼)相ゥいらも元氣だおア僕の奇談たアおんだ窓の外の立ばおしも敵手が尤物ゥなんのであれば隨分下さらない方でもないがワキが倉瀬ときた日で見た日じや蓋し頗恐をいむざると得ぞだ僕ハ色々の大事件があつて今がたゥ校へいつた處ガ外田ハ下宿して居るとの事故わざ〳〵こつちまでやつて来たが外田ハアント〔叔母〕の處ヨ居るかーらん(匡)僕もネ今ーがたゥ尋ねた所だが今朝から何處へゥ出掛て居おいヨ(繼)ヲウヤ〳〵そいつハ閉口トいひながらいつまおく悵然として勢おし倉瀬ハ繼原の面を詠めて。早くも其意衷を推察おー(倉)ヲイ繼原どうした子大層塞いでる容体だ子。今ゥ君がのいた端書ヨついてネよつやど奇的列お間違があつたぜそきハ斯様々々ちか〳〵でト宮賀の勘違をものがたれば繼原も覺えずうち笑ひて(繼)ハヽヽヽヽあんまり落語めいた間違だ子。ちゥし我輩の現今の境遇ハゥとんど疫病にのヽつたも宜しくだマア君一通りきいてくれたまへ語るも面おさ事おがらだが近来山村の周旋ヨ任せて汗牛堂といふ書店のらして翻譯物の依頼を受てネ凡そハ九十枚おぐりつけたが其原稿料大ヨたまつて總計二十圓程ヨなりヨタりさ尤も其うち七圓だけハ山村ヒムセルフ(彼自身)の翻譯料だが(倉)ヘヽイ感スンヨ勉強した子。necessity is the mother of invention(必要ハ發明の母)ドやアない。エーとindustry(勉業)の基ゥ子。ハヽヽヽ(繼)處がそれからが大事件さ一昨日其金をうけとる筈だがマア兎も角も前祝ヨ一盃久ーぶりで傾くべしといつく。一昨々日の夕方ヨネ(倉)ハヽ相かいらも急激黨だネ(繼)ナニサ我輩ハいかうといんが。マウンテイン山村の事めが醉ツたまざれヨ頻ヨ我輩を誘ふので(倉)ハヽアそれじやア出掛たお(繼)ツイ據なく引張らもてさるとこへ久しぶり

で進擊したので。とう〳〵六七圓浪散財ヨ（倉）イヨ。ヘイル〳〵（おめでとう）（繼）ヘイル〔おめでとう〕所の騷ぎじやアない。翌日ぼぬ乎として歸つてくるト後からお馬についてくるお金にお手々丹一錢なし。イヤハヤ急々如律令さ直丹馬と共ヨ同行して汗牛堂へとかけつけると主人に國元ヨ急用ができて昨日出立した後の祭何のいひ置もない事故山車をあげる譯ヨいイヤあげる物もだをわけヨもわたしの獨斷でにできません。ト番頭善六めが逃口條さそんな背約はされてに困ると二時間舌の根をたゞらして子やつとこさ六圓ざけ請取ツて子。それで附馬をおつのへしたが。サアそれからがいよ〳〵困却無て一昨日を期日ヨして舊い借財をいひ延したり。一寸時借をしておいたのら。一昨日ヨなつて來るとも〳〵。陸續幕なし丹責かゞたるhetrogeneous〔種々雜多〕の借金取せ。そて一圓歟二圓もありやア。一寸口塞ぎををる譯だが純然ヌウパア〔錢おし〕ちふ有樣だからイヤハヤ我



輩ゑ實ヨ弱ツた。外田ヨ貸た金が三圓ばゝるあるが原が青樓での立替ざからまさゝ返せともいにれおいから例の端書だけ出しておいさがそ吉も知のふまでに音沙汰おし。山村にをるい奴さ一昨日晝をざから逐天してどこへいつたか行方おし。我輩俊寛の役をつとめて二階丹悄然と藏れてゐる。そろ〳〵下宿屋の山の神が。三尺五寸程の書出しを持ツてどうかお拂ひをとやらのをじやアなゆゝ前門ヨ虎をごまかせば後門丹狼婆ア流石の我輩も弱り果て一寸湯屋までとごまゝしておいてまづ〳〵戸外までに飛だしたが。懷中元來自ら錢おし湯錢の准備さへもおい譯だゝら餘儀なく煙艸屋で時借して今日の飯晝にパツク（パツクホ井イトのりやく　ふてそむ屋といふこと）でをましく用もない所をぶらり〳〵一まづoutside（そと田の事　おるべー）を叩いさ上で去就を決しやう と心を定めて。わざ〳〵下町まで出掛てきたの丹。それさへ越中とに情ない子エ。斯くあゞ事の外をるとに此勘平に運の末か。チエ、殘念や弱ツたおア

（倉）夫やア定めし弱るだら字子エ僕も御同様の究の字だが待たまへ。僕ま少しばかり目途があるから。少々其邊で待ま居たまへ。今守山ま會釋しま僕も戸外へ出てトたなしのうち丹宮賀兄弟（匡）僕ア外へ回りたいから。兩君。こゝで失敬するヨ（繼）それじやア失敬（透と匡）失敬々々といひをてつゝ。二人ハ彼方へ立去りけり。

此内以前の此家の書生ハ臺所よりいでゝきたりて。倉瀬の脊の方へ近づきつゝ頻ま モシ〳〵と呼びて居れども倉瀬ハ繼原との話ままぎまて少しも其言葉ガ耳へ這入らぎ。（倉）そもじやア其處ま待て居さまへ此内書生ハ傍へよりて。又モシ〳〵と呼かくれど倉瀬ハ少しも心づかぎ（倉）いゝかア今直丹ゆくぞ。トいひさま俄ま ふりうへ走りいでんとおしたる程ふ。さちまち書生と額合せして（書）アイタゝゝゝ（倉）イタゝゝこれハ失敬（書）へゝゝどう致しまして定丹お待せ申しました。どうぞあちらへ。



ちゝごろ風俗改良の説盛んま興りて。上ハ婦人達の結髪乃風より。下ハ日本下駄乃不便利まで。人のあげつらふ世の中とぞおりける。定や風俗ハ人情れ表徴なり。風俗の異や字なるハ人情の異やうなるを示ま文明相競へる今日丹ありてハ風俗改良の事實ま等閑ま見をぐをべきふあらぎ。目下有志者ガ相つとめく衣裝其他をも改良おさんと骨を折らるゝのも故あることおり。されども人心のさまく〳〵なる往々改良の主意をば誤り。只管粧服の麗なると排して之を野蠻となし之を未開と譏り無暗ふ美麗なる洋帽ハいさゝか。滅多ま高價おる洋服を被り質を八丹置き苦ま澁と重ね以て得色さがるもれものもありけり。是豈滅法なる間違ひふあらぎや。裝服の價貴き元来文明の徴標丹ハあらねば。開化の招牌ま もなりがたうるべし然るまいたづらふ

美を衒ひて。三四百圓の財産をば平生身に纏むて意氣ゞる族は蓋し裝服の何物たるをば未だ通知せざる野暮天とやいえまし夫れ裝服といへる者は。自然天稟に專得さて〳〵容姿の足らざるをば補ふが爲に或は醜さとば掩はんが爲に加役に借用ふる方便にしあれば。強ち華美おらんを要せざるおり。言葉を換へて之をいへば衣服は見る人の心を動かし注意と牽く爲の者にあらで。寧ろ見る人の心持をば不快にふさやらんが爲の者おり。されば他人に見えさる時見苦しからざる樣粧ひ得たらばそれにて事足れりといふべきのみ色の黑さ人白さ人丈の高さ人低き人肥滿たる人瘦たる人其性質はいろ〳〵なれども詮ぎる處は人おの〳〵。其身に適合ふやうに粧服するをば。其本分ぞと思ふべきなれ生中丹奇を好みて。異樣未曾有の粧ひをおし。花奢無比類の衣裳を着して揚々誇る景色あるが如きは。鹿服の似合ひたるに劣りく醜し。往昔外國に懶惰者あり。曾て說ばたて〳〵いひけるやう人は極端ざに粧ひ飾らば。最中は魂くとも苦しくなし（Extremes justify the means）ナンノカンノと勝手に附會頭に美麗なる帽子を戴き足に高價おる長靴を穿ちて襤褸を体に纏ひてある如しかむ見る人目ひき袖ひきして嘲り笑ひしとか聞たりしが此おもものゝいひける事またく道理な如事とも思えぎ總して物事ふは究所のあるあり。其究所だに修め得さらば其餘は大概にして棄置てもをむべし。おりして其究所の何處丹あるやは其人品によりても異なるべけれども概して胸部より上の方にあるべし。男に就く之をいへば帽子なり襟飾なり帽子襟飾が華麗おらんか其餘はそれに應て華麗なるべしされども下の方へ赴く程其度を低うするも不都合なからん。必竟格好が第一おるゆゑ。甚しき不平均は最も忌避すべき事ぞと思たる。かく究所のみと大に飾りて其餘を漸々丹儉約せば容姿おのづから見易うして。自然ヲイヤミなども尠のるべし之を要するは性來の魂處

短處をのみ專ら飾りて其餘を大方よして置さても不可おし我國の俗が粹お容姿などゝいふも或ハ粹とをべ処處を探りて其處のミいと巧よ粧ふを以ふ歟所謂粹な人の粧服を見るよ衣服必らずしも高價にあらねど。たゞ何處ともなくイヤミ氣勘くいとふさたしくも思ふるゝ方のし。英の傳奇家沙翁（シエイクスピヤ）が嘗て臺辭のうちよて。

「御身が裏裡の貯金あらば。あくまで高價の衣裳を求めてこれを身よ纏もさまたげなけれど。ヨがおろ〻のし。処妄想をむ見をかされるやう粧むれヨよしや驕奢ふ粧へばとて華奢丹をぐるハいと醜し蓋し衣裳ハ動もそれば其人品をむ表すものゆゑ。肚を見られぬ用心して。身よ適ふやう粧むれヨ。云々

と綴をし文句ハ寔ふ金を殺して美服を着をる。野暮が頂門の一針なるべし。さハいへ翻へして之をいへば。衣裳ハ衣裳ゆり肚ハ肚ゆり。一二歩退いて音羽屋を氣取り。グツト反身よく考ふれむ。兎角假燒刃ハ脱やすきものゆり。衣服で一旦ハ遯着するとも到底あらむるゝハ自然乃沙汰ゆり。よしや洋服さて博士ぶるとも假令束髮して貴女めかすも。お腹丹見識が乏しからん歟表裏と内外とが相かなむぞ。刀鍛冶の勉強ゆらねど。トンチンカン丹て格好をかしく自然見ツやもゆふ見ゆるゆかし。娼妓ハいかゆどふ素人めかして。頗る上品なる衣服を着して。遊ばせ言葉を吐くといへども。一目瞭然お里がむれ其心ざまも見らるゝゆらずや。他ゆし其肚のうちが下劣ゆるゆゑ。いかゆど其外面を飾るといへども。思ふちよあれば色外に現るげふ爭むれぬ表裏の反對なまなか品格よあらぬ衣服をさるのハ見よくき物のうちの隨一とやいむれん。時よ十月の中半ゆりしか是ハ其種類の人間とおぼしく。身裝と品格とが折あハねど。流石に御當人ハ得意のかほつき。新らしい黒塗の人力車で。ところハ下谷梅園町とある格子戸の家のまへゝ二人相乘よてガラガ

ラ〳〵ツ。

○一個ハ年のころ廿あまり。痩がたゝして丈高くといふ容姿にあらねば楚々なんどとハ稱かぬれど。當世むすめの圓顔出ゝして愛嬌滴滴としてたつぶり備へて眼ハ可愛ゆくして口ゐどゝ働き口ハやさしけれど家庫をも呑むべし色ハ雪白とハまゐらねども薄化粧の匂ひいと麗しく頗る御前的の品物ゆり。額ハ若さゆ似ぬけあがりたるを鬢のゆるいのゝてごまかしたる、當時流行のガツクリ嶋田其髪飾ハ如何ゝといふゆ根掛ハお定まりの珊瑚の上等利休牡丹の櫛ゝ本甲の小釵前へハ小形の玉のいつた銀簪一本上被ハ紺地茶の万筋のお召縮緬藍の縞横縞八丈の下被を被く銀鼠の襟のいつた中形縮緬の長襦袢といふ打扮丹線梵字の丸帯ゆお太鼓ゆ結んで。後間疊附の柾ゝ黒天の鼻緒の附た駒下駄をひつかけ。ちよろ〳〵そろ〳〵と歩む足元どうやら輕さうゝ思ハるゝハ果して如何やうなる原因ゆよる歟。下駄より重いものをつねく〳〵から穿ゐれたものとハ思ハるれど。何ゆ穿なれたかゆ急ゆゝゝからぞ。

今一個ハ年の比四十あまり。よく〳〵目を留めく再撿査をれば。四十四五歟とも見らるる化物痩方ゆしく脊スラリツと高く。鼻筋通り色白く。眼ゆもこゝばかり鋭威ゆるゆゑ。どこやら音羽屋の年増めきて。少々スゴミある見附ゐれども。むかしハ嘸かしと思ひやらる。今ハ老木の櫻木ゆて色香ゆたつながら消失せされども。たゞの素人とハ受取られぬ。曰く蓋し附元の怪しの人物。銘線の小袖ゝ南京繻子ゝ博多の腹合せの帯を結めて糸織の前垂を結びし容体いよ〳〵をかしらしき人品ゆるが。手ゝ絹張の蝙蝠傘と長さ一尺ゐどありぞと見えたる。ふくさゝ包みさる品物をもちたり。

○件の兩人ハ車と下りて。やをら格子戸を押開きて「御免なさいヨ。といひ入るれば。ハイト簡単な返辭をして臺所よりかけいでるハ正〳〵此家の下

女と見えて年比十五六の小女なり○被爲入まし。どなたさまでございまを「年増乃女ハ小腰を屈めて(年増)エーあの私共ハ水野と申しまを者でございまをゞ。鈴代お常さまと申しまをのハこゝたさまでございまをか(下女)ハイ。手前でございますが。(年増)そまでハ直接お目ゴかゝつく。是非ともお話し申したい事がございまして○アノ新聞の廣告の事ゴつきまして。色々うけたまゝりたい事がございまして水野と申をものがまゐつたとさう被仰ツて(下女)ハイ〳〵。ゑばらくお待おさいまして。トいひつゝ不審さうゴ二人を詠めて。下女ハ與の方へ立去しが程なく再び出來りて。(下女)どうぞ此方へおあがんおさいまし(年増)さやうおれば御免なさいまし。アノお氏さん。マアれあがりおさいまし。ト後をふりかへりて順を讓まむ年若さ嬢ハ言葉丈したがひ年増と諸共ゴ與へ通る。こゝハ客乃間ゴ見えて八疊敷あり床ゴハ華山の山水を掛け。花瓶ゴハ菊の花を拋込さり。總て坐敷のさま所謂雅俗折衷丈て。月琴と琴をうやゝしく床の片隅ゴたてかけたるハどうやら娼妓のお坐敷らしく。織繻を一面に敷つめたるハいくらか洋風の客の間めいたり。庭ゴハ洒落たらんと與ゆかしく思へど生憎硝子張の障子ゴあらねば。之を窺ふべきたよりハなし。右の方一間ハ壁ゴして殘る一間ゴハ襖をしめたり。おしさあそばして。ト持いでたる敷物ハ唐天の緞澤山二人ハ一向丈お辭義をしまゝ。わざ〳〵敷物をよゝてをわりつ下女ゞ持出る煙草盆を。一寸會釋して引寄せつゝ年増の女ハ懷中より懷中煙草入を取いだして若紀方の女が帶の間よりぬきいだせる象牙の筒つきたる黒桟の女煙艸入を。わざ〳〵おのゝが方へ請取りつゝ煙管をとりいだして煙艸を含ませ。やゝがて吸附てかおたゞ渡せゞ彼方ハ請取て吸終りつ。こたびハ身をづから煙艸をつめて。ふたゝび火を點じて吸をハりて。やをら年長たる女ゴ與へぬ年増ハ右左を見回ゝしながら。煙草を息長く吸終りてハタと煙壺へ叩きいれたる。

其時は右の方の襖を開きて静に出来るは鈴代常ゐて。く前は小町田の權妻おりしが今は故ありて銀行社員園田某の妾ぢおりて已に近死ねどもおもてだちて其本妻ともなるべき身の上。それゆゑ其眉毛もそり落してきつと昔ぢをた小形ゐ丸髷ぢをな銘線の袷衣へ薩摩飛白の單衣を重ねて唐繻子乃丸帯をきりゝツと結び粋妓乃果ゞとは思はれぬまでゐいとーとやかに進み入りて二人ゐ打向ひて會釈をれば二人は諸共に頭をさゞく初對面のあいさつより定規通り時分柄の口儀ゐどあるべし。此うち小女の次の間より茶菓子を持いづることもあるべし年増は少ーばかり膝を進めて（年増）さて突然に伺ひましく定めし御不審でございませうが。一昨日讀賣新聞と拜見いたしました所たしか此方さまのお名前で。尋ね人の廣告が出て居ましたので。此方に心當がございまを事ゆゑ直接ゐ御様子をうけたまはらうとるざ〳〵窺ひました事でございますが（常）ヲヤ〳〵。さうでございまを



か新聞乃廣告の事でと。只今もうけたまはりまーさゐ。さだめし守山の一條だと私ーもぞんじました事でございまをゞ。それでは何かお心當が（年増）ハイ。其ゐは色々込入ました譯柄がございまして。トいひおがら年若き女を見かへり（年増）このお方は。アノ只今では吉原の角海老樓のおいらんで見鳥と申しまーて本名は水野氏と申しまーく又あたくしは此おいらんの梳櫛でお秀と申しまを者でございまをゞ。アノ守山亮右衛門さまとおつきやるお方は此方さまの御親類でいらつしやいますか「お常はさてもといふ顔色まて覺えを小膝をを〻ませつゝ（常）ハイ其守山とおつしやるお方は私共乃少ー縁つゞきの方でございまして。ちやうど今日も新聞乃事で。宅へお出おをつてゞございまをが。それにやアおまへさんがお袖さんの「お秀さん飲あましたる煎茶を飲ほー（秀）ハイ其お袖さんと申しまをるのは。トいひつゝ見鳥を一寸見かへを（秀）此お氏さんと申しまするのが其お

袖さんの事でございますが斯う唐突ゐ申しましてゐ定めしおわかりゐいありまをまい。これゐいろんな来歴もございまをし。証據も手前方ゐございまをがどうか直接ゐお目ゐかゝつて。おむなーいたしたうございまをから。おらう事おら守山さまゐトいへむお常ゐうなづきつゝ(常)幸ひ興の間ゐおいでゝまをから早速さうやして參りませうトたゝんとしさる次の間より(守山友定)イヤ様子ゐゐかりました直々来歴をうけたまむりませうといひつゝ友定が立いづゐば此方ゐ二人ゐ席を改め兒島ゐ兩手をつき(兒)むじめましてお目ゐかゝりまを。アノ。ゐたくしゐ。トいつたツきり跡ゐ口のうちでモグ〳〵〳〵何をいふろか少しもゐからぢ(友定)ヤ。これゐむじめまして。トいひつゝ兒島を右視左視て。またお秀をゐ右視左視つ(友定)あらまし次の間ゐて承知いたーたが。シテお民さんとやられ来歴ゐ。どういふ譯かおなんぞ証據物があるおら見見せてもらむませうか。エ其証據といふゐ。

マアどんお物じや。マア出しておみせおさいト。入齒もる聲いうがむしく。膝をゝめて問ひかくれば。お秀はおづゝ丹會釋をなし(秀)それでゐあおたさまが守山亮右衛門さまでいらつしやいますの(友定)ハイ左様ぢや。ゐしが亮右衛門ぢや。もつとも今の名ゐ友定といふが。マアそんな事ゐあとでも宜しい。あのお袖。イヤお民さんとやらゐ。今まで何處ゐ如何してをつさのじやうしておふくろゐなくおつたゝ(秀)サ。その来歴ゐ長い事でございまをが。マア一通りおむなーをいたしませうト。

ゐゐより第十六回ゐて倉瀬が友芳へ物語りたると同様の筋を語る。此物語のうちにゐ。折々友定が其折々の事情ゐ關して。いろ〳〵問をかくる事あるべく。兒島みづからが其問ゐ應じて。さま〳〵答辨をる事あるべし。お秀と兒島ゐかたみがむりゐ其来歴を語り終りて。

(兒島)只今やしましたやうお次第で。とう〳〵角海老へまゐりまして(秀)

一昨年以来此事ばかりを始終氣ようけてゞございましたが別段手がゝりもございませぬたつた一度一昨年の春頃トいひうなしが心附きて少ーロ隱りしお秀の樣子をそれと察しくうちうなづき(友定)たしう一昨年の春の頃より悴が友人頃誘引せらるて一度まゐつたといふ事じやが(秀)ハイいらつゃやつたさうでございまるが直頃坐敷ざりて子ヱおいらトいひかけしが お民さんお歸りふなりたのでございまーたつけ子ヱ(兒)ハア(秀)そのやうお諱でございまるので。さつぱり手懸りもありませんでしたところ先日お子息さまのお友達とやらで倉瀬さんとおつしやるお方が同じ御紋のついたお羽織をめーて(友定)それらの事ハ昨日悴のらきゝましたが。シテ証據ようる品といふのハ。ハア其品をゞせさつしやへ。トいひつゝ兒島れ兒をながめて。頻よ膝を進ますれど。お秀ハ携へたるふくさを開きて。一箇の短刀をとりいざして(秀)これハお見覺えがございませうゝトいひつゝ友定の前へ直せど。守山ハ手ふ取あげ(友定)これやア相違のないようしの家の物じや。元ハわしの母の守がさなであつさを。妻よつのはしたものであつさがトいむつゝ涙と目頃浮べて兒島乃兒をうち見やりぬ。お秀ハ懷中より古錦襴のちいさき巾囊をとりいざして。これをも友定の前へ直ーて(秀)これハお見覺えがございませうか袖ちやんの腰よそへてございまーた守袋でございまるが(友定)ヲウ〳〵。これも見覺えがあるたーかよ友芳が守袋と同じ切レでこーらへたのじやア。どま〳〵。トいむおがら手よ取あげて中を改ため(友定)まがふ方ふさお袖の臍の緒かふいふ証據があつて見れば疑もなくおまいハ。トいひかけておぼえを嬉し涙はや兩眼に溢れさたるをそつと手の平よて押拭ひて(友定)大層苦勞をさせさのう(兒島)それじやあおたが家尊君でございまるゝト片手を疊よついてさしうつむく。お秀は嬉しげふ聲くもらし(秀)コレサおいらん。アノお袖さま。モツトそちらへいつて。おと

つさまはお兒をお見せおさいおほんまに〳〵わたしやア嬉しくツてなりませんワ。子エモシ。御新造さまをいふわたしやア子。ちやうど今年の三月ゥらこのおいらんの處へあがりましたのら。悪しい御樣子ハしりませんのさこおひだえゞめて此事をうけたまはりまして子。ヲヤ〳〵さういふ事おら何故早くツからおいひなさらん。証據がおい事なら仕方もおいが假まも証據物がある譯だもの所々へ手を廻して尋ねさならちつたア手懸りがでささうなもの。早くおらおりつたが殘念だ。ト種々愚痴をこぼしまして子。ヲホヽヽヽのかまるでわけおしおり。ろれから心がけく拭りまをところへ。ソラあの新聞の廣告でございませう。二人で飛あがつて嬉びまして子。急いでうゥゞつて見ました所がかうをつかりと事がわかつて(常)わんとまは斯申しちやアなんだけまども。芝居か艸冊子まありさうお事で○お袖さんさぞお嬉しうございませうネエ(兒)ハイ寔ゑ夢の樣でございますヨ(友定)實ゑ何ましろろ芽出たい事だト彼一句我一句互まに別後の物語おさつわらいつゆくりおき。此對面を祝ーあふ親子が心いかおらん拙き筆まハ得も盡さぎ看官宜しく察したまへ。

是より話をあー前ゑ戻る兒島お秀等が友定まに向ひて其身の來歴を語り初めたる時刻と思ゑたまへ

守山友芳ハ倉瀬蓮作と相乘まて此家の門前迄來ー時(友芳)ヲイ〳〵五助かゝへのくるまやのおなゑべしこゝだ〳〵(倉)ヤア中々頗洒落の宅だ子。見越の松まに黒板塀とハをつかり御注文とでさて居るネ只恨らくは格子戸がまづいな。モチつと氣取ツてくれゝばいゝまをろしてくるまをとめる(友芳)五助ツ○中へ這入ツてまつてるがいゝゥ。どうせ今日ハ手間がとれるおら○サア〳〵倉瀬。えいるべし〳〵(倉)マア君から這入さまへ(友芳)それじやア失敬サアぞつとこちらへ○ヲヤだれか客があるが。女下駄が二足ト。ハテナ誰がさてゐるん

だう。〇頼まう（下女）ハイトいひつゝ、臺所より立いで（下女）ヲヤゐらつしやいまし先刻からおとつさんがお待兼で（友芳）誰かお客があるのい（下女）ハイ。たしの吉原の（友芳）エ（下女）大層な別品さんてございまをヨホゝゝゝ（友芳）エ。ろまじやもしや角海老の（下女）よつく存知でございまを子エ。アノそれでございまをヨ（倉）ヲヤヲヤそれトやア何だ子（友芳）モウ廣告拭見たのうしらん（下女）たしう新聞の事で參ツたさうでございまを只今守山さまが其女中母お逢おさる所でございます（倉）ういつア奇妙だ。早くあがつく見たまへ（友芳）マア待たまへ。それでいト。ヲイお清さんお。れの米さ事い與へいあらせんで。そつと臺所から通してくれ。少しおれれ方ゝ考があるから（下女）ハイハイ承知いたしましさそれじやア此方からおあがんおさいまし（友芳）倉瀬君こちらゝらきたまへ少し蔭ゝ居て樣子を見るから（倉）こいつア面白くなつてきさぞト倉瀬い芝居でもする氣ふなつて。頻ゝ獨で面白がり。守山友芳の後ふついて。下女の案内ゝ隨ひつゝ臺所より奥に通る。

〇此奥の間といふい即ちお常が居間と思しく押入ありて床の間なし近頃新ゝ買求めたといふ簞笥一方の壁ゝ對してたち今ぬぎすてさといふ銘線の半纏衣架の片隅ゐぶらさがれり。繪入新聞の讀売い奇麗母綴合せて歌舞妓新報の合本と重なり。木地の針箱と相並びて。簞笥の上ゝ安置せらる。長火鉢の邊猫こゝちよげゝ眠り。三味線懸るところ鏡臺燦然として存す。子のおき世帶故といひながらも取亂したる風情いなくして流石ゝ奥ゐうしう思いれたり。下女い茶をつぎてさし出しながら（下女）モシあおたこゝいあんまり取散らしてございまかほら。奥の四疊半へいらゐやつて。トいふをうちけし手をもて制して（友芳）ヲイ〳〵靜ゝ〳〵。隣の話をきいてる處だ矢張こゝでなくちや。都合がわるい。〇いゝからゝまいないでわつくおきなトい

ひつゝ頻ず耳をそゞたて。倉瀬と何かさゝやきながら。直ゝ次の間なる客坐敷の見島お秀の物語を息をこらして聽居たり。友芳ハ小聲ゝて倉瀬の袖を引うごゝ〜(友芳)ヲイ倉瀬。今いつた話れ樣子ハ少し君の話と違ふじやアないの。君のさのふ話したところでハ守袋ハおかつさといふじやアないか(倉)さうさ成程少し違ふヨ。いつか見島ゝ(友芳)コレサ。少さい聲をしていひたまへ(倉)アレニ子「友芳ハ覺へぞふきいだして そんな丹氣取らなくツてもい。(倉)色々な事をいふ人だ。おゝも氣取りやアしない。プロゝ直接にさいさ時ゝハたしゝ守袋ハおゝはたといつた(友芳)こい川ア少々不審だお。ソシテあの女ハ梳櫛か子。我輩がいつた時ゝや見おゝつた女ざ(倉)さうだらう。ゆりやア。今年から来たんだもの。(友芳)一瓣ありさうな面をしてる子(倉)どうゝ〜〜中々喰へない品物さ。(友芳)さうざらうヨ。あの面がまへじやアト二人ハおきりゝ耳語うなづき。襖と細目ゝ押ひらきて彼方の樣子を窺ひ居る。やゝあつて友芳ハ再び倉瀬の袖と引て(友芳)ヲイ短刀を持出したぜ。成程宅の紋と同じことだ(倉)ヲヤ〜〜巾嚢を取だしたヨ(友芳)ヲヤ成古錦襴だ。○守袋ゝ相違おいぜ(倉)おるわど。こいつア少し妙おやうだが。然ゝ其事ハ兎も角もシイ(あの女)ハたゝかふ君のシスタア(妹)ゝ違ひおいヨこおひだリレイト(物語)ゝた樣子おんざア。けつして偽言たア思ハれんもの(友芳)さう子エ。君ゝさいた話の樣子ゞやまさかあの女ハ偽でもなのゝう只をかゝいのハあの年増だ。トいひのけゝが息とのみて二人もろとも身うごきもせぞ只一心ゝかなたの話に耳かさむけて窺ひゐる。

○折柄またもガラ〜〜〜格子戸開きく入くる客あり。下女取次ぎてこなたへと招ぎる人を誰のと見れば是なん讀者が發端ゝて。たゞおばゝが程見受けたりし。彼の銀行の社主おりゝる三芳庄右衛門といふ人なゝ。三芳ハ年

よも似ぬ氣輕な人ゆゑ。遠慮もおくつかゝと與へ通る。もつとも此家ハ其以前ハ。三芳が所有せし家なりしをちかごろ故ありて社員の園田へそつくり貸與へし事とぞ聞えし。守山友芳ハ急がハしく形を正しゑ會釋をなせば。三芳も急がハしく禮を返してにハかゑ擘をひくめおがら（三）モシ。友芳さん。一寸トいひつゝ。そつと友芳の袖を引て。此方の縁側のほとりへ来ゑて。何やら暫しが程打さゝやけゞ。友芳ハ聞く事毎ようちおどろき（友）それじやア先刻鳥八十で（三）ヨさしハ意外だのゝおどろきましたヨそれゆゑ途中から園田ゑゑかれて此方へ推のけてまゐツた譯だが。マア兎も角もお任せなさい。私が一應あひまをから。

○倉瀬ハ始終ぼんやりと二人が様子を打見やりて。合點ゆかねば黙々の天神兩手をついて火鉢の傍つくねんとしく居さりけり。三芳ハやがてつかゝと襖のわとりへ立寄つゝ襖をさつと押開きて友定お常ゑ一寸會釋し。お秀に向ひて。突然と（三）お秀久しぶりだのう。

## 第十八回の下

前回ハまだ終らざれども。暫く其話を中絶して同日同時刻の他の物語にうつる。看官其心して讀たまへかし。

○紅葉のをざゝ昔ハ柳橋と肩をならべて空蟬の意氣地と張で去られたる。花れ巷も此頃ハさゞ金を見て眼のゐはる淺ましき猫のすみどころ。たてば芍藥すわりくハ牡丹畑と唄女の仇の姿を其儘の異名ゐいとゞ雅びたるべラだよあれば四海みな同朋町の藝者巷其濁江の泥水ゑ染まぬ蓮と清き名を。江一格子の一構内ゐゆかしさ軒先ゑハ神も佛も一様ゑ恵をさまへといふだすき。かけてゞ禱る球燈の紋ぢらしにハあらねども。さていろ〳〵お人心蛇の目の丸き客ゐれば。井げたの如く角立て腹たちばなのねぢ上戸柘榴の

赤紀實おくく天狗團扇のフラ〳〵とたのもしげお紀坐敷でえ稼業大事と一面ヵ野暮も無粋も春風の柳で受る柳村屋是なん田の次が住居おる時に三時を過たきども物思ふ身ゐなかか〳〵に誰がためにか粧飾りたれが爲ヨ梳ちん田の次ゐひとり悄然と身を箱火鉢ゐよせかけてながめがちおる折しもあき格子戸がら〳〵急がはしく開々て入来る一個の佳人(女)田のちやん字ちかい「田の次ゐ覺えき莞爾字ちえみ(田)ヲヤ誰かと思つたら小年姐さんどうしたんでをへさうく〳〵しい(小)聞うして喜ばせる事がありるうら大急ぎでうけて来たんだヨヲヤ母堂ゐ居おいの(田)アヽ今しがたお湯へいつたの(小)さウアヽ苦しうツさ早くお茶でもおくれな子エ(田)ゐんとヨ姐さんゐいつでも元氣だヨヲヤおんだらうネエ新聞を驚握ヨつかんでサ(小)サア此新聞の事ヨついておまへヨ喜ばせる事があるからそれで馳て来さんだアネホラ此間の一件ネ御覽ヨ。とう〳〵新聞にだされた。



ヨ氣味がいヽじやアないか子エ。マアちよいと讀んで御覽ヨトいひつゝ投だす「いろは新聞」田の次ゐとりあぎおし開紀て(田)何でほとへ此間の一件だツて。それじやアあの辯吉さんの(小)アヽ(田)チヨイと何處ヵ(小)アレサこゝだア子。とさし示せば田の次ゐたちまち眼をとゞめて小聲おぎらゐ讀もてゆく其文言ゐいうヵといふヵ。

ものいふ花をうへ野下同朋町の大伺ねへ。山ヵ五百年海ヨ五百年都合千歳屋の辯吉といふばらがき猫ゐ追ゐ〳〵霜枯ゐ向ひたるヨ兎角風の荒が烈しくして頗る不漁なるをおこつ折から無々さしをだとか馴染ざとの多少来歴ある自稱通人おこゝろ吉住とかいふ代言さんが圖らぎ久し振でゝうけく紀たゆ忘是奇貨居べしと瓜をとぎたて。まんまと待合へくわへこみて。チン〳〵おたのゝ真最中どつと時おらぬ風の音に二個ゐあヨをくつて逃だほとく吉住ゐ誤ツく裏二階の階子を踏はづして真さう

さま頭ゝ大怪俄の大イタ〳〵。辨吉描ゝ直ゝ拘引是も十圓の大イタ〳〵。
時分柄寔ゝおきもじさま。

（田）ヲヤ〳〵可愛さうゝ。をつかりだされたの子エ（小）ナンノ可愛さうな事があるもんか子い、氣味だアネえつと不斷からの穴を穿つて長く面白くかけばい、のゝ。「いろは」ゝふーちやア珍らしく端折ツてかいたヨ。探トウがやさどゞうなかツたのかゝら（田）さう子エ。辨吉さんの是非ゝゐんとゝこんゝこと所ゞやゝいワ（小）さうとも〳〵ホラいつうかの醫學校の書生さんの一件ゝんぞゝ（田）さう〳〵。何とゝいつた子。あのゝお客ゝ（小）たーう野々口とかいつたツけ。トたゝしーの折柄格子戸をば。またがラ〳〵と引開けつゝ（男の声）チヨイと伺ひまを柳村屋田の次さんゝ此方でゝおいでゝおさいまをか「田の次ゝ立出ゝ障子をあけ（田）ハイ。田の次ゝゝさしで御座いまをゞト。いゝむつゝ其人の姿を見るゝ年の比ゝ四十五六曽て見たゝとのゝおき人物衣服ゝ總て二子づくめ言語といひ格好といひどう見てもたゞの町人とゝ見えゞ。なんでも吉原か根津の邊の貸坐敷ゝおどれ人間と見えたり（田）あたーが田の次ですが何か御用で。トいゝれて其男ゝ田の次の面をむゝおばし打守りて覺えゞうちえゝ（男）およしさん。モウお忘れなゞツたらう子。わたーゝ大工の源作でゞが。トいふゝ此方も打驚き眼を定めてよく〳〵見れば。見覺のある額の切瘡さていゝと驚く田の次より。彼方ゝゝきりゝ慨びつゝ一別以來の口儀をのべ其恙ゝおきを祝しゝおどゞ田の次も喜び且ついぶかりて（田）マアゝお珍らしいこゞ。兎も角もおあがんゝおさいまーゝおろこゞやアおむなしが出來ませんゝゝみ（源）ゝたーがゝうしてやつて來たゝゝ。色々來歷もある譯だが。マアゝつくりと話しませう。それゞやア真平五免ゝおさい。と上まあがりて火鉢のゝむ。小年ゝ一寸會釋をしてゞれば小年ゝたちあがりて（小）田のちやん。それゞやア後ゝくるヨ（田）マアいゝゞやアないゝ分意

やアしないヨ。おんの内輪のお客だから(小)ヨたしも少し用があるうらイヽエ。また後ヨでなほしてこやうヨ左様ならツと棄ぜりふ小年ハいそがたしく會釋して小褄のヨげて立歸りぬ田の次ハ急須の茶を酌て源作の前ヨいだしながら(田)寔ヨ思ひよらぎお久振であなたヨお目ヨ懸りましたんで。何からお話をしヨいヨやら「源作ハ去ぬり丹頭を掻きく(源)いやどうも面目ない次第でこんな様体にお目下ツた譯ですが大概わたしの身の上の事ハ(田)ハア大略ハうけたまわりましたが寔ヨもうとんだ事で(源)イやハヤ一生の心得違ひで赤いべヨまでも被ましたが子。やつと放免まあつてからも流石ヨ元の所へハ歸りふくヨ車と牽て見さり配達屋ヨなつて見たり色々さまヨ〳〵の真似をしまして揚句の果が貸坐敷の若い者よしやおまへさんの在所が去れても面のだせたア義理ぢやアないが今がた思ひよらず鳥八十の二階でおまへさんが藝者ヨなつて此處丹居なさるのを聞いたらして是非とも知らしたいと思ふ事があつて(田)ヲヤ〳〵さうでしたのうれぢやア妾の身の上の事ハ(源)すつかり今しがた聞ましたが子。わたしの方ぢやア今日が今まで〇斯いつちやア縁起でもないがおまへさんハおくなつた事と思つて子〇最もさう思ふも無理ハない譯さ先月の中頃であつたら思ひよらぎ二年振で桶川の友達丹あつた所が其友達がわたしハいふヨハあのお芳ばうといつた娘ハ可愛さうヨ六七年前と家捜かけだして東京へいつたがそれツきり行方がされないといふ事だ大方おめへを便ふーていつたのであらうヨおめへが居ないから力を落して氣の小さい小供心ヨ思ひつめて死んだのでハないかと斯う友達がいむやをから子成程事ヨよるとさうらも去れねいアヽ貧すりや鈍をると下世話ヨもいふが心ふもない心得違ひで女房ぢかヨかお芳ばうまでアヽ可愛さうヨ罪ふ事をと悔んで見さ所が後の祭り。せめヨ是からハ身を慎んでと思ふハ氣ばか

りで身ゐ治らぎ殊ふゐ居る所が獣商賣惡い水にやア染やすくけふまでグズ〳〵して居やした所が實ゐ譯があつて娼妓の伴で○唐突ゑ斯いつてもおめへさんゑやア解せなからう。ゑたしが今居るのゐ中廓の角海老樓丹兒鳥といふ娼妓があるが子其娼妓の身の上の事ゑついて。けふ大切お用事があるので。ゑたしが伴ゑついて出てきやしたが先刻中食をしやうといふので。廣小路の八十へ登ツて。おいらんやアゑんがと三人でおまんまを喰て居ると。隣室ふ二人連のお客があつて子。ゑも中食をして居るやうをさ聞ともおしに聞いて居ると其話ゐおめへさんの身の上の話ヨ。娼妓もゑんがも氣がつかねいが。ゑたしにゐそれぞと氣が付いたから聞耳をさて、全然聞取是ゞやアうして居らゑないと。おいらん新造ゑやア虚言を吐いて。八十から出ると其儘ゑ別れてやつてきやしたが子。あんまり不思議お事だらしてよく氣狀靜めておさゝおさい。吃驚しちやアいなねいゼ。といひつゝ小膝を進まをれば田の次ゐ何とも解のねつゝ(田)不思議お事だとおいひおさるれゐ。マアどのやうお事でをエト。覺えぞ眉根を擽まをれば。源作ゐ莞爾と打笑み(源)ナニ氣づかうふゐ及ばんこと。おまへさんの出世の門口これも平生おまへさんの心掛がいゝらして天道さまのお惠だらう。悉しくいやア長い事だがざつと掻摘んで話ーませゞ。咳拂ひして源作が說いださんとする折しも湯よりあがりて表より今歸りくる田の次乃老母いと太義さうお格子戸の閾をやをらまたぎおがら(母)イヤどつこひショヲヤ〳〵無用心お。なんだお。アア格戸子を開放しふーてさ。ガラ〳〵ピツシヤリ。

是ゑり話また前ふ戻る

さる程ゑ三芳庄右衛門ゑ間の襖を押開さてツと客の間ふ立出つゝ。お秀ゑ言葉をゃけたりける。思ひよらざる振舞丹。お常ゐ更おり友定まで合点ゆかずとふりかへる中ふもお秀ゐふりあほむき顏見て吃驚色を失ひたゞヲヤ

マアといつたツきり逃も得やらずさしうつむき穴へも入たき風情なり此体を見し兒馬も共に面の色伏失ひ如何ゑ成行く事やらんと思ふ景色のあらむれてさしうつむきたる半襟が縮緬ぶるへゑふるへるとハちと六ゥしき譬ぞの一庄右衛門ハ從容とお常の傍ゐ坐をしめつゝ再びお秀ゐ向ひていふやう(三)思ひ出せば十五六年ゑや一昔とおつたる故義理人情をも忘れた手前ハモウ見忘れたかと思ひの外おれを見覺えて居るといふハ流石に手前も人間並其性根ならちつとやろうつとハ條理がわかるまいものでもない今更ふるい事をのつぎだして不埒を責たとこゞ後の祭り過さつた事ハ詮もおい譯また二ツゑハ老年をしく耻のゞやかしく昔時の是非をむ若いお仁たちゑ聞ゥせるのもどうやら間の惡い詮義ざゥら昔ハむゥし今ハいま。スツカリ帳消シと去てしまふが只おれの目ゑとまつたゥらふハ少々聞たゞさゑやあらない事が○手前ハお新を何處へやつさイヤサ女ハどう

去まゝ〜さ聞けば全次郎ハあの騒ぎでとう〳〵殺されくおくなツたとやゥ。トいひかけておつねのかたを見やり　このお常さんといふ婦人ハ何の全次郎の實の妹兄の放埒と手前のお庇でいろ〳〵さまゞゝ乃苦勞艱難今じゃア立派としさお妻君ざが。此お常さんの物語で手前の不所行ハ一ゥら十まで。すつゥりおきの方ゑ去れてハ居るが。たゞ和のらぬのハ女の成行そきも目が醒て考へれむ全く全次郎の種とハ去れたが兎も角陽面ハおれが女あらまし成行をきくのハ當然一々ゑなして貰ひませうゥ實ハ今しがたこゝの旦那と園田のこと少し商用で淺草までゆ充ちよつと中食をしやうと思ハて上野の鳥八十へあがつて居たとおろ手前ハ大方氣がつくまいが。おきハ手前あちを見掛た故ハテナ素人じゃアおいやうだと何心なく襖の間ゥら隣を覗いて見て思ハず吃驚直ゑひつとらへて女の事伏ゃ實ハ其時ゑハ思つたなれども。いくらゥ園田さんの手前もあれむ暫く樣子を窺つて居ると小聲ではなを故ゑ去のと

ゐられねどさび〳〵梅園町〳〵といふしまた守山とか鈴代とか。こゝの町所とゐやべつて居るゆゑいよ〳〵ます〳〵不審でたまらぬ園田さんまも委細をゐなして猶も様子を窺つて居ると手前たちゐ食事をゐまして。梅園町まで車と傭つて直ふ出掛てゐく様子だからこれまゐ譯のある事であらうもしや先達て風評まきいた新聞廣告の一件でゐないの。守山さんの關係のと心附いたゆゑまは其旨をむ園田さんまもおゐなしゝて少々氣まかゝる事もあれバと途中らしておきゐ別きて今おゝへきて聞いて見きバ手前ゐ此節でゐ貸坐敷の梳櫛をして居るとかいふ事だが全体女にゐどうして別れた其譯明細ふきゝませうと膝狀進めく問ひかくれむ。テモ不思議なる對面や。と驚く友定覺にずも歎息つきつゝ黙然たり。お常も始終の三芳の言葉まを。始めてお秀の履歴を知り。扨ゐ我兄全次郎が。三芳の眼を忍び〳〵ふいひのゑしたる女子といふのゐ此年増まてありけるかと且驚き且呆れて只



忙然とお秀の面を打まもれるのミ言葉もなし兒鳥もまた先刻よりお秀の春後まひきさがりて三芳の言葉を聞居たりしが次第ふ面色土の如くさしうつむきつゝ言葉ゐなく只時々まお秀の面を盗むが如くふがむるのみ。一室俄まに蕭然としてのなたふのけたる柱時計の音のみ高く聞にける。

〇お秀ゐ重さうふる頭を擡げて。やう〳〵ふいひけるやう思ひがけふ紀旦那さまま思ゐぬ所でお目まかゝり何とお詫をしてよろしいやら寔まお面目もございません。今更どのやうふお詫をしたとて六日のあやめ十日の菊おまなのくだ〳〵し字申しましてゐ結句申譯のやうまも聞えて。のへつて失禮でもございませうから旦那さまのお慈悲にあまへてくだ〳〵ふくゐ申しません又お常さまとやらにも〇寔まに申譯もございませんがトいひかくるを三芳ゐ打消し(三)うんなくだらない事狀いつても今更取返しのなるものでゐない此方の聞たいのゐ女の身の上また二ツまゐ手前の来歴

吉備もじ花
おぼろ梅
國田町の小集
會

どうして貸坐敷へ奉公したか。逐一かいつまんで詰をがいゝ（秀）それをお話し申しまをれむ隨分長々しい事でほが。トいはんとしたる其折しも間の襖を押開さて。ツと立出る守山友芳（友芳）イヤ其履歴ハ聞くまハ及むん妹の所在も母の行衛もモウすつかりとまかりました嚴父君も三芳さんも御安心なをツて下さいましトいれて驚く友定三芳友定ハ進みいでゝ（友定）女の所在ハあらつたれども此お秀どれの履歴をきくま（友芳）イヤ其處に居る皃鳥とやらハ尋ぬる妹でハございません其女子ころ三芳さんの（三芳）エ（友芳）サア令嬢でございまをトいれて彌々驚く友定お秀ハ覺えず色をかへて（秀）エ何とおつまやいまをそれでやアあなたハおいらんをバアノ。お妹子で……（友芳）ハテ盜人たけ〳〵しい。証據人ハこちらまあるヲイ源作さんおまへ此處へ來てたなしてやんな。と襖の彼方へ聲をかくれむ。ヘイといらへて次の間より。田の次を伴ひ立出る彼の源作の姿を見るより。アナヤと驚く皃鳥お秀互ひ面と見合をのみ言葉ハなくて尻退をる事の不思議に友定三芳お常も共ま呆れ果て。皆一同ま源作田の次又友芳の面をのみ打まもりつゝ茫然たり。（此段の結句第廿回まいさりてあるる。）

## 第十九回

全編總て廿回脚色もやう〳〵ま

### 塾部屋へ倉瀬の急報

靜寂とせし塾部屋の廊下傳ひま入來る少年けふ出來たての洋服姿とある一間の障子を開さて。うちと覗充て會釋をなし。（少年）小町田君どうだネ御病氣ハ「机まよりかゝりて。書を讀居さりし小町田ハふりかへりて（小）ヲヤ宮賀君ゥ這入たまへ。モウ全然癒のさ（宮）そりやアいま子。トいゝつゝ究屈さうま片膝さてゝ坐りながら（宮）君のブレイン（腦）が平癒ツたと聞いちやア此間の復讐をしおくちやアならん（小）ヲヤ復讐とハ何んだ（宮）ソラ干渉論の續ささ（小）ヘン。もうあの議論ハ廢止たまへ。コントの糟粕の荷

ぎだしたつて畵餅だヨ（宮）いゝや、今日ハ決ーてまけない。此間ハ君が病氣だと思ふからまけておいてやつたんざ〇それハさテと昨日任那ゝら手紙が着たが君と連名だから持つて来た相替らず中々interesting（をもしろい）だヨ。マア讀んで見たまへ。トいひつゝポツケツト（ゥくし）をのさぐりて。西洋紙のletter（くがみ）をとりいだを（小）此間寄送してから間がおいやうだよ。どうも筆まめな男だ子エ。今度ハ何を書いてよこしたネ。先達てハ大變な慷慨だツけが（宮）そうさ。先達てのletterがハ頻ヨOxford（大學ノ名）の整頓してるのを稱めゝ日本の學校の惡口をいつたけが。今度ハ少ーし其反動の氣味と見えて多少惡口がまざつてるやうだ。始の處ハ廢止て。マア此邊のら讀んで見たまへ（小）へゝイ。いや書いたゝ。相替らず長いぞゝ。（此手紙をよむとしるべ）

因云　此手紙の文章ハ横文の筈なれども讀者の爲ガ煩はしーのらむと思ひて故意とおざらかヨ意譯をしたり。讀人其心あるべし。

（上略）想ふに東洋の文明と西洋乃文明と其度の相異ある所以のものハ。全く進化の理の然らしめし所おり今ヨして徒ガ之を歎くハ親の瀕病を遺傳したる男が他人の無病なるを羨むヨひとしく寔ヨ詮なきの限と いふべし。只我將来に希望すべきハ彼が長を採りて我短を補ひ一日も早く彼ヨ追つき肩をならぶるやう致したき事なり。

（宮）ハゝゝ。相替らず剽輕な議論だネ。

さきゞ大學の組織の如きも匆卒今日の有樣を見れば寔ガ羨むべく尊むべくさあがら我國の大學などハ丸で品柄が異なれるが如く。非常ヨ立派さうヨ見らるれども又退いて考ふれば英ヨ今日の大學あるハ多年幾樣の變遷ハ經て。竟ヨ今日ヨ至りしものガて。決して造化翁ガ依估贔負ヨて突然此地ヨのみ好大學を今日造りだせし譯ヨくハあし。

（小）ハヽヽ例の如く馬鹿をいつてる。

我東京の學校の如きも今より二三十の年數を經なば恐らく此國の大學よりも優れる善美の大學とおりなん事敢て疑ふにも及ばざるなり。我東京の學生ハ柔弱よあらざれば鹿暴懶惰にあらざれば病人。或ハ花柳界ゐあくがれあるきて學生の本分を誤るえのなり。或ハ磊落拙粧はんとして輕躁過激なる振舞をなすあり。瑕なき完美ある玉の如きハ殆ど見いだゑよ由おきなりされども是ハこれ一時の弊のみ。力めて矯正せば年經ゑ醫をべし。小子近頃閑暇の折柄二三の小説を繙讀して。ヲツクスホルド大學のむかしを知り其變遷の著しきゐ驚き候。或ハ御存知うも圖られねど左記の小説幸便よ任せ。お送りや上候御一讀なされ候ハゝ自然大學のむかしも知られて頗る興あらんとぞんじハ。

"Tom.Brown at Oxford" （小説の名）

"Pendennis" （同前）

"Adventures of Mr. Veidant Green"

小子が當大學の來歷をおりしハ特り是等の小説よのをよりたるゐあらを。別よ學友某の物語ゐよりて彌々其前代の有樣を知りたり。過去現在將來の三の者ハ事物を論ずるに必要なりと思ハるゑば。こゝよ其略を申述べて。以て御參考の一助とおをべし。むかしハ當大學の學生よハ富家良家れ子弟多し。之を要をるゐ當大學ハ紳士の子弟の一大club の如き有樣おりし蓋し其頃よハ權門富豪が子弟ハ當校よ入學さをるハ專ら立身の便宜とおるべき知交を得せしむるよありしとの承より候故よ貧賤なる子弟ゐして偶々此校の學生となれば往々貴公子の翫具となり。侮嘲さをしことも多うりしと歟。甚しきよ至りてハ權家の子弟と貧家の子弟とハ同じ校中ゐありと雖も其食物の品を異ゐし其服制をも異よせしとう。

自由を尊重する英國の大學ゐして。僅ゑ二十余年の昔ゐ於てゐ。のゑる惡慣習ありしかと思へむ。實ゑ驚歎ゑ堪へざる次第ゐ候。

今より二三十年以前ゐ學生の品行も隨分醜猥ゐりしとの風評なり。Tom Brown おどを熟讀いたし候ても屢々いかゞなる情事の形跡其物語中ゑ隱見いたし候事ゑ村莊の中に妾を圍ひ置候などゐ其比通常の事の樣ゑ聞及び候さきども學生の間ゑ於ても決して此般の振舞を以の面正しき事とゐ見做さゞる故互ゑ此般の不品行あれば着々其罪を彈じて相罵り候由ゐりし我國の通人的學生諸子の如く公然花柳界ゑ荒怠して人ゑ驕るが如きことゐ其頃よりして之ゐりしやゑ承り候。

（宮）ハヽヽ山村や繼原丹讀ませてやりたいきびしい項門の一針だ。

体操運動ゐ今日よりも盛ゐりしやゑ体ゐり候 boat race〔端船競漕〕horse-riding〔馬騎〕swimming〔游泳〕fencing〔擊劍〕等其尤ゐる者ゐりしゑ聞及び候我國おどゑても從前の習慣の反動ゑて大ゑ体操を奬勵いさきき候傾向有之寔に結構ゑゐ候へども。あまり過激ゑ過ざるやゞ注意有之度と思ひだして痼氣を病候次第ゑ蓋し体操と研學とゐまるで相反する性質の者ゑ候へむ。深沈ゐる講學丹伴ふ丹過激ゐる運動を以てもるゐ。或ゐ當を失したるゑ非るゐ。プレトウ翁の如きも曾て体操と講學の併立し難き旨を論ぜし事あり。今より二三十年以前の事とゐ。ある博學ゲ此大學ゐ來遊されし折諸學生の平常の舉動と見て。被申候ゑゐ此大學ゑ真の哲學家を出せし事の尠きゐ。ゐまり多分ゑ物を食ひ多分ゑ筋肉を勞する故ゑあらぬや云々と被申候とゝ。ヲツクスホルドの大學ゑ於てゐ現今体操もモデレイト〔穩當〕ゑ相成候故此リマアク〔注意〕も不要丹候へども。我國の學校家おどゐ多分參考ーゑ宜敷事と存候必竟もるゑ体操の盛ゑ過るゐ害ゑもなり益ゑもなり候害とゐ何ぞや。動作おのづから麁暴ゑ流